ト16Q-17

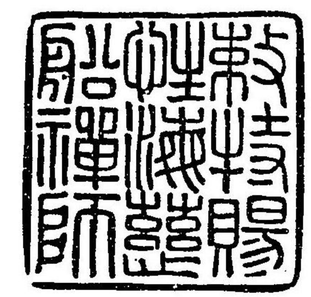
皆皮

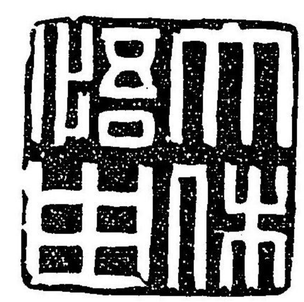
能肉

昭和
12

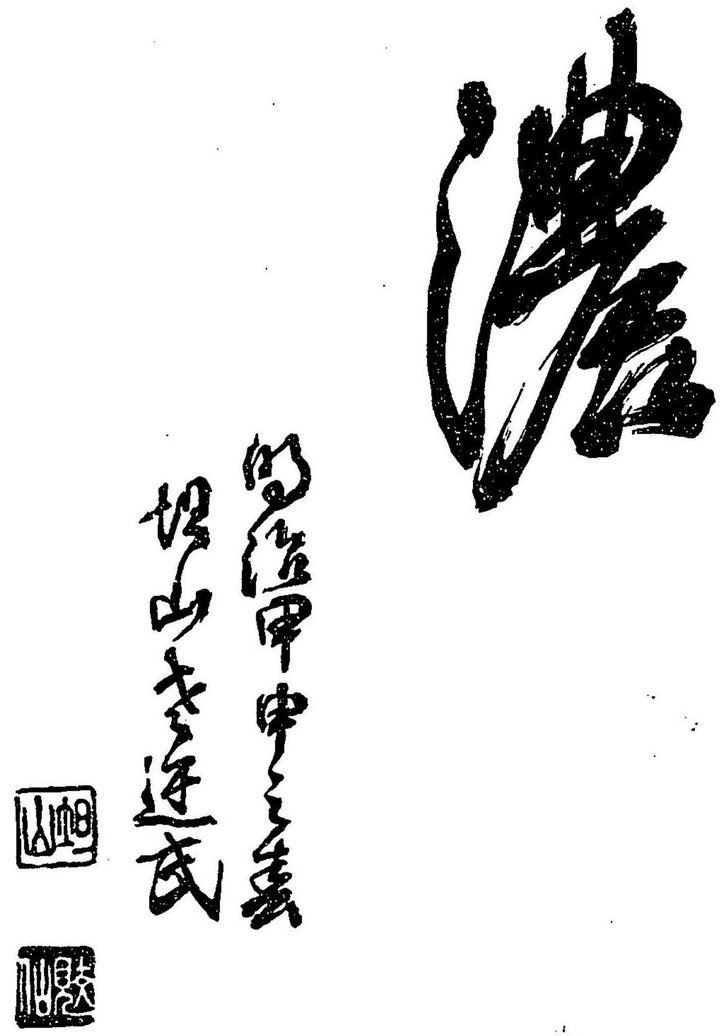
四海之內皆兄弟

永平怪面





原坦山和尚肖像



士不士兮僧不僧巧言詐偽却稱能思之嘆息辭塵世
不管人間誇剽凌
入山元被為山礙逃世猶隨世態行世外太奇真隱術不
羈磊落脫人情
設雖求顯達尊榮豈去賁英到懶生近入山林學山隱
無端惹得道人名偶遊京師人目為道人故及末句
畫出簷端烘背熟夜眠床上伸脚長有時紙筆展情謂孤
言獨語自疑狂

序言

予坦山老師を欽仰するや干爰尚し、唯恨らくは遂に老師の爐鞴に投じて親炙し得ざりしを。適々明治廿三年三月、予信州長野に遊學中、老師は同縣曹洞青年興道會の請聘に應じて來長せられ、而して城山館に於いて講話せられたり、時哉予會末に附して講筵に列し、始めて老師の謦咳に接するを得たり。乳臭の予輩敢て講話の主旨が如何に腦裡に印象せしかを記せず、唯其風丰の魁梧雄偉にして、其性行の磊落不羈なる、顯貴に媚びず、權勢を憚らず、而して凛乎たる威容冐すべからず。されど又恭敬謹愼己れを持するや慢ならず、其後進子弟に接するや威嚴中自ら溫乎たる親情溢れんとするの狀、轉た敬虔の情に禁へざらしむるもの

あるを覺ふ、當時予以爲らく、於戲偉哉師や、師は眞にこれ死せる佛教をして回生せしむるの扁鵲たり、闇世なる靈界に光明を與ふるの先覺者たり、然り予か理想的大宗師たるもの斯人にあらずして誰そと、爾來益々老師を欽仰するの情切也、一たび其爐鞴に投じて鐵鎚に遭はんと、癖癖にも念頭を去らざりき、されど、未熟なる小機遂に素志を果さゞりし。後明治廿五年十二月帝都に出づるも、時既に老師は白玉樓中に化を遷さる、嗟乎止んなん々々々。萬事休せり矣。しかしより以還、今に至るまで、鏗鏘たる心聲の餘音に觸れて私淑せり。嗟乎、哀哉、惜哉、斯大宗師にして一に何ぞ其躅の寂たるや、佛仙社は遂に閉鎖せられ、門下生は今や離散し老師畢生の心血を濺ぎて發せられたる心性實驗の聲は僅に鳥跡に詫して楮上に印するを見るのみ。加旃、今や殆んど教界

に忘れられたらんものゝ如し、否、却て世はこれ百代の偉人として竹帛に傳へりたるなり。夫れ然り、老師の名聲は百代竹帛に垂るゝも其心聲は星物の遷移と共に散逸し去らんとす、是れ予の竊に憂えとする所なり、因て平素座右の師とせる老師の著書、又曾て少壯時代に新聞雜誌等より筆記し置ける老師の講話、將た論說を蒐輯し、干茲、坦山和尙全集と題して上梓し而して道交の士に頒たんと、曩日に藹々居士大內靑巒氏及び上村智證師に謀りしに兩君は深く賛助し、且つ許多の材料を供給せらる、於是乎、書肆光融館をして之を公刊せしむるに至る。而して老師の一生を熟知するもの藹々居士を措て他に求むべからず、依て今居士に請ふて老師の事歷を卷首に揭げ、以て序文に代ふ。讀者諒焉。

明治四十二年十月初祖忌日

皇都礫川の僑居に於て

後學　悟庵誌

坦山和尚全集目次

第壹編　講演部

(一)　心の本體……一
六種の原質……二
識性の純雜……三
敎原……五
不易の理……六
十二緣……九
精神世界……一三
萬法唯心……一八
(二)偶像說……二〇
(三)修行の要旨……二一

(四)教法者の志操……二七
(五)印度哲學の諸學と徑庭ある說……二九
(六)惑病同原の說……三〇
(七)最要至難……三二
(八)佛教實歸の一……三三
苦樂の原因……三五
善惡の分界……三七
惑體辨井緒言……三九
學問宗教の極點を論ず……四一
印度哲學の實驗……四三
社會思想の變遷……四九
(九)學教の異同及佛教と諸教との異同……五一
(一〇)不思議界……五三

(二)印度哲學の要領……五四
(三)動植二原論……五六
(三)人體新說……七一
第貳編　著述部
(一)時得抄……八二
無明論……八三
心識論……八五
再校心識論……九四
老婆新說……九六
腦脊異體論……九八
惑病同原論……一〇二
(二)心性實驗錄一名西學辨解……一〇三
(三)心識論略辨對破……一二四

(四)心性實驗錄批判最後庇……一三三
附行誠上人心性實驗錄死牛洩
(五)鶴巢集……一六六
法體論……一六九
佛法不可斥論……一六九
宗弊論……一七〇
禪弊論……一七一
交遇論……一七三
心……一七四
不生不滅……一七五
諸法無實……一七六
看教……一七七
難易……一七七
無事人……一七八

性情……一七八
人才無限……一七九
辯心……一七九
洞宗嗣書辯……一八〇
接得警策辯……一八一
辯賴氏之北條氏脩禪學論……一八二
金翅鳥王客說……一八四
雷獸說……一八四
商賈說贈透禪和尚之東關……一八五
文辭說……一八六
紙窩說……一八七
迂足齋本快猩人說……一八八
佛氏怠慢議……一八八
曹洞宗制議……一八九

贈諸宗之集會所……一八九
贈人時得抄書略……一九〇
贈腦脊異體論於加州天德奕堂和尚……一九一
與丈六和尚……一九一
與奕堂和尚……一九二
答藏海雲和尚……一九四
寄普明禪士 其二……一九四
簡淨國徹定上人……一九六
簡佐藤礫川……一九六
不朽錄序……一九七
長喜山鬼簿序……一九七
某寺祠堂化簿序……一九八
雪礁接待喜捨錄序 其二……一九八
夢癖集序……二〇〇

臥龍梅書齋帖序……二〇一
道理之世序……二〇二
書道理之世後……二〇三
遊山觀水之記……二〇三
同 後記……二〇五
嵐山再遊記……二〇五
遊豆州初島記……二〇六
自吉濱還江都記……二〇七
龜井戶看梅記……二〇八
興學記……二〇九
玉印記……二一〇
癡隱室銘……二一一
至道邱碑……二一一
醫生津田某求語……二一二

書遂得集後與和田生……二一二
題雨窓讀史後……二一三
題風外老人虎圖……二一四
題少妓圖……二一四
題芍藥戲蝶圖……二一五
乘國溫岳和尚畫像贊……二一五
良寛道人略傳……二一六
秘骨道人傳……二一七
評良寛庵主詩集……二一八
讀天桂和尚正法眼藏辨註……二一八
讀幽谷餘韻……二一九
讀拙堂文話……二一九
稻葉酒翁……二一九
早川誤葬……二二〇

法語……二二〇
接衆……二二六
大溪山豪德寺山門疏……二二七
永源開山一種長純和尚三百回忌疏……二二七
同寺本尊釋迦牟尼佛安座供養之塔記……二二八
安國山水陸會疏……二二八
圓相中觀音大士讃……二二八
賀奕堂禪師往諸嶽山賜徽號……二二九
賀雪巖和尚住豪德寺簡……二二九
大雄山開堂法語……二二九
堂晚小參……二三〇
宗弊……二三一
妄想菩薩成佛不思議經……二三二
惑病同原再告……二三四

妙法……二三六
佛教大意（前大學總理文學博士加藤弘之氏の質問に答へたるもの）……二三七
惑病同原の餘論……二三八
杜撰の禪和を斥す……二四〇
佛法の國益たるを論ず……二四二
惑病同原の實驗……二四四
(六)大乘起信論兩譯勝義……二四六
(七)覺仙證道歌……二七〇
(八)鶴仙餘韵……二七六
(九)自述大意……二三三
集議院江再度建言……二三三
贈大學東校書……二三四
贈西洋諸國書……二三五
再贈大學東校書……二三六
贈大博士佐藤氏舜海書……二三七
再贈西洋諸國書……二三八
贈福澤氏諭吉書……二三八
民部省寺院寮江建言井時得抄献納……二三九
贈腦脊異體論於加藤氏大學大丞弘之君……二四二
兵部省軍醫寮江建言……二四二
復贈石川氏書……二四二
贈ミユルレル氏ホフマン氏書……二四五
贈石黑氏書忠悳君……二四六
○或問五章……二四七
佛法洋學の得失を論ず……二四七
腦脊異同の要義を論ず……二四八

僧徒を呵責す……三五〇
佛法國益を論ず……三五〇
實證の來由を論ず……三五二
○佛仙社學則解……三五四
○佛教法原……三五六
○東京大學印度哲學科業書改正旨趣……三六二
○諸宗の管長に白す……三六三
佛教の本旨……三六三
立宗の大意……三六四
○小崎弘道氏佛教に就きての疑問に答ふ……三六五
○鳥尾得庵居士に贈る書……三六七
○尼金論……三六八

第參編　雜部

○坦山和尚逸事

(一)失戀は成功の媒となる……三六九
(二)誕生佛を敬下す……三七〇
(三)臂を炙りながら雲板と鳴す……三七一
(四)鐵謝とは牡丹餅に有りつくものぢやナ……三七二
(五)東山の蝸廬庵……三七三
(六)關白を罵倒して癲狂院に送らる……三七四
(七)無一物にて江湖會を修す……三七五
(八)淺草奥山の賣卜翁の名札……三七七
(九)賣卜翁一躍帝國大學講師となる……三七七
(一〇)坦山は木石ぢやない……三七八
(二)雲照樣も酒を飲めねば死佛ぢや……三七九
(三)宗教聖典は小說的ぢや……三八〇
(三)行誠の死牛渡に報ゆる最後屁……三八〇
(四)佛前にて肉鍋を炙る……三八〇
(五)坦山は信用を得たか……三八二
(六)無褌の長者子……三八三
(七)奉加帳序文……三八三
(八)散髮を罵るものに答ふ……三八四
(九)廻轉する地球は須彌山ぢや止まらぬ……三八五
(一〇)君まだ彼女を抱てるか僕はアノ時限り……三八五
(二)松崎大尉白刃を坦山の頭上に擬す……三八七
(三)人の年を問ふに答へて……三八八

(三)已れの佛法は難有てないわい……三八八　(四)已れの學問は斑猫的ぢや……三九九
(三五)死を豫知して臨終の報告書を認む……三九〇

○追慕錄

(一)原坦山禪師の遷化を悼む……明教主筆　三九一
(二)追悼坦山老和尚文……佐々木狂介　四〇二
(三)追悼坦山老禪師疏……曹洞宗大學生徒　四〇一
(四)追悼……大内青巒　四〇三
(五)恭悼坦山老宗師遷化……今川龍吟　四〇四
(六)聞坦山師訃帳然書之二首……嵩古香　四〇四
(七)讀原坦山師傳記感……高津柏樹　四〇四
(八)覺仙坦山老師碑……篤々、大内青巒　四〇五

坦山老師の事歴

大内青巒述

坦山老師の經歴と云ふことに付きましても、之を詳細周密に御話すれば極本懷でありますが、中々左様ふな譯には行かないと思ひます、第一時間が無い、此の老師の生涯に就て十分御話を仕様と云ふには、迚も一席や二席で盡すことは出來ぬ、非常に大議論か起つて來ることになる、今は止むを得ずホンの大略丈を御話して置く、ソーすれば私が筆を取つて書きました老師の碑文か曹洞大學の庭に建て居る、又其を石摺に仕たのか彼處に掛けてある、其碑文の講釋丈てさへも中々容易に出來ないと故、極其末葉を摘んで御話する考へてある、其をする丈のことも秩序

的に御話することか六ヶ敷い、又傳記の話だから乾燥無味である議論に這入つて來て批評すると云ふことになつて始めて面白くなる、傳記丈ては幾ら云つても乾燥無味てある、場合に依ては多少批評するともあらふと思ふ。

坦山老師は文政二年十月十八日に誕生せられ七十四て圓寂せられた、目下の若い人達は坦山老師を見たことのある人は、無からうかと思ふ、既に十四年の昔のことであるて坦山師は奥洲磐城の磐城郡の平村安藤對島守の城下新井勇輔と云ふ者の子てある、是は奥洲仙臺の出で五百石計の國錄を貰つて居られた、其頃江戸に神林清助と云ふ易に長した先生が在つて私も其人から易を聞いたものてある、坦山師は此處に於て十五才まて漢學を修められたが、其から江戸に出て昔し有名なる昌平黌と云

ふ幕府の大學に這入られた、其頃は佐藤一齊か校長で中々盛なものてあつた、此人の學問の流儀からは自分の學説には少々違つて居たか、幕府の制度としては是非共朱子學を行らねはならぬのて、止むを得ず佐藤先生も自分の理想を曲けて朱子學を教へて居られた、其故坦山師も始は朱子學を脩められたものてある、其頃同學てあつた所の頼山陽先生の三人目の息子、頼三樹三郎と云ふは非常な慷慨家で、三十二才の時幕府の爲に斬首せられたるものなるか、其人同學てあつたそうてあります、此人の事に就ては老師から、可笑しいことを聞きました頼氏は非常なる才子て最初東條一堂の塾に居つたか、非常に磊落と云ふか亂暴と云ふか少しも勉强を爲ない、毎日々々遊んて計り居る塾を丸てグル宿の樣に思つて居ると云ふのて、塾頭か非常に怒つて、此頃

參りました頼と云ふ少年は、誠に不勉強なるのみならず、塾風を惡くするものてある何んとか御小言を云つて貰いたいと、一堂先生に申上た、スルと先生か其ては一の課業を授けたら好からう、一日の中に必す書物を一寸以上讀め、其は塾頭か嚴重に監督をせよ、唐本て一寸以上と云へは、中々大變なものてある、其上に文章五百字以上のものを一篇と、七律以上の詩を二首宛作れと云ふことを嚴重に申し渡した、スルと頼はかしこまりました、何にか仕事か無けれは、退屈て困まると思つて居ましたか、丁度幸てあると申して、翌朝早く讀み始めた、所か一寸のものを四部位讀んて、イッも出かける時間か來ると何處へかフッ遊びに行つてしもう、還て來て殘りの書も讀み、文章も作り、七律を五首位も作る、數日の後先生がドーだ頼は申付けた事を守つて居るかと尋ねられたが、慥かに一日に一寸宛は苦も無く讀み、矢張是迄の樣に遊びに行く時間か來ると遊ひに出ますと云つて先生を驚かしたことがある、

ソウ斯ふして居る中に頼は斯んな所に居ても詰らないと思つたか、遂に飛び出して聖堂へ行つた、此頃の聖堂の書生は非常に、あばれたもので、或は花見頃になると、上野の山中に醉つばらつて、刀を拔いて其處等を切り廻すと云ふ具合で、佐藤先生か幕府から譴責を受けると云ふ始末、斯ふ云ふ人と同學て有つた坦山老師の學問の樣は何んなて有つたかと云ふことか殆んと思ひ遣らるゝと云ふて惡い方を思ひやる必要は無いか、非常なる勉强家て有つたらうと思はる、

既に老師か聖堂を卒業せられた時分は、今日の如く儀式的の

ものては無い、聖堂の學問を卒へたと云ふことになると、今から五十年モッと前の卒業生抔は、自分の腕試しをやらかすに實地に就て試驗をなし、一方に於ては、小使取りも爲なければはならぬ、其をするのは何處か一番好いかと云ふと、小石川の傳通院の學僚と駒込の梅檀寮てある、梅檀寮は前の大學林てある其處の學生を對手として講釋する而して僅かな謝誼を貰らふのてあるから外からは惡口を云て賣講々々と云つた、其時分の梅檀林の學生は今云ふ普通學と云ふのは漢學てある、其さへも終日力を盡すとは先つ六ヶ敷い、江戸に於て此二箇所は非常に盛なものて學生達の質問議論と云ふものは中々烈しい、尤も是等の人達は叢林と云ふ所て、鐘や太鼓を打つて御經を讀たり、鐵鉢を捧けたりすることは能く知つて居るか、學問すると云ふ所は容易には

無つた、其ふ云う人達か學問すると云ふには、學資か無い、其れて午前中二三時間市中を行乞して、自ら學資をこしらへ、學問するのてあるから、本當の苦學てある、中々御用學問や官費で行る樣な暢氣なものてはない、非常苦しんて行るのたから、一行の書物を讀むも一通りの價打ては無い、其う云ふ本氣に學問をする人達か、錢を出して聞くのたから好い加減な事を聞いて時間か來たら飛たすと云ふ樣なことは決して爲ない、イザ質問と云ふことになると、互に鍋を削つて行るから聖堂を卒業した者か腕を試めすには、必ず梅檀寮に出かける、此處を旨く通つた者なれは、天下何れの處に行つも、ヒケを取る氣遣は無い、坦山老師も此處に出かけて行つた、其頃梅檀林の學寮は幾つにも分れて本山寮、越後寮、加賀寮、佐渡寮、薩摩寮、肥後寮、と云ふ風て有つたか其中越

後寮の寮司か京燦と云ふ和尚て是か非常の豪傑て、私も親炙したことかありますか、此兩人は年は大層な相違か有た京燦は漢學と云ふ側の力は無い、專門の禪學と云ふ側から力を得た人たから、坦山師の若い元氣て之に當たか、到頭及はなかつた、或日例の大議論か起つた、其最初の約束か面白い、其議論のことに就ては今は到底御話する遑は無いが、隨分八釜敷い議論て議論の前に若し御前か負けたら拙僧の弟子になれ、拙僧が負けたら御前の弟子にならうと云ふ約束を結んて議論をオッ始めた、拙者か若し負けたら坊主になつて弟子にならう、若し貴僧か負けたら、還俗して私の弟子に御なりなさい、と云ふ約束をして、議論を始めた所か、坦山老師は中々及はなかつた、其て遂に京燦の爲に服せられて一言も出なくなつたので、約束通り坊主に成つた、始め

は佛法抔と云ふものは聞いたことは無く、少しも取るに足らぬものと思つて居られたが、茲に至つて佛法は中々大丈夫の學問てある、本當の男らしい男て無ければ學ふとか出來ないと云ふことを知つたと云はれた、其故碑文を書いた中にも初めて佛法の大丈夫の學たるを知ると云ふ坦山和尚の語を其儘書て置た、然るに京燦和尚は貴下か約束通り僧侶になると云ふことは誠に結構なことてある、併し乍ら私の直接弟子にすると云ふことは出來ない、私の師匠か淺草橋場の總泉寺に英仙と云ふて、住職して居らるゝから、其弟子になつて私の弟分となつてくれと云ふて、師匠の得度を受けさして、始めて坊さんになつた、所が俄かに儒者先生か坊主になつたのたから、袈裟の掛け樣、鐵鉢の持ち樣等に至るまて、禪宗坊主の規則は少しも御存し無いから、其等

を稽古するには、栴檀寮の學寮ては行かない、其處て何處へ遣らうかと考へたか、京燦の最も親しき朋友て有つた、參州青眼寺の達宗か東京に名高い雲照律師の如く、殆と律僧の樣に行狀堅固な人の下へ差し向けられて行つた其處て坊さんの行儀を稽古させられた、所か窮屈て窮屈て坦山和尙の如き天稟豪傑肌の人たから、其處に辛抱して居るとは難儀な樣たか、坊さんになるには坊主の行作を是非共學はねばならぬから辛抱して居つた、其時に可笑い話かある、四月八日の釋迦の誕生會と云ふので、其御法要か行はるゝので、前日に御莊嚴をなす即釋迦の花堂を作り、其中に誕生佛を安置して、甘茶を注くと云ふのか一般の慣習てある、其時達宗和尙が色々と差圖を行つて居られたか、新たに今度京都て鑄さじた誕生佛、明日は開帳仕樣と云ふので其儘箱に入れて仕舞つて有つた、今飾り乍ら花堂の中に其誕生佛を入れて見樣と云ふので、良作(之は坦山和尙か僧侶になられた時の名で後に坦山と改められた)彼處の居間に昨日京都から來た誕生佛か有るから持つて來い、と云ひ付られて、良作先生其處に行つて見ると立派に紙に包んて箱の中に有る。行きなり其を持つ來た所か、如何にも麁相つかしい質て、其中に何んとなく面白い所か見ゆる、今の誕生佛を持つて來ると、如何なる機て有つたか、椽側の處でドシンと轉かり落ちた、其か爲に大切なる誕生佛は其處に拋り出された、其處て達宗師は驚いて良作何を爲たのてあると咎められると、先生平氣な顏て、ヘイ唯今釋迦か生れた所て、ず誕生佛てすから今生れた所とは甘く云つた、此の一言か慥かに立派な公案となつて居る、左樣な場合に窮屈なる言葉を以て

誠に不調法を致しまして申譯がありませんと謝するよりは、今生れた所てすと云つたのは非常に面白い、其處て達宗師は此人間は到底拙僧の下に置く可き者では無いと考へられ、其から天下に名高い禪僧と呼ばるゝ宇治興聖寺の廻天と云ふ人か有つたか、之は天桂禪師の法孫て近代屈指の人て、永平寺住職環溪禪師――此人か何の位の人かと云ふと、今日公爵大勳位と云はれて居る伊藤博文氏に始めて遇はれたのか芝の青松寺てある、其時には各大臣達及ひ宮様方か澤山御出てになつて、承陽大師と云ふ勅號を御開山に賜はれた時に、以上の人達か御參詣になつた、其時伊藤公は內務卿て環溪禪師には未た一度も御目にかゝられたことか無い。大隈伯、岩倉公抔は夙に懇意て有つた、其時私は席上の周旋御給仕係をして居つた、環溪禪師は岩倉公を始め

ズッと挨拶をせられ、遂に私に向つて大內、內務卿は何處に居ると云はれたから、此方て御座ると申上けると、伊藤侯の顏を見て、聞いて千金見て八文、顏を見ては價値か無い併し御前は才子じやげなノー、と云はれたのて伊藤侯も何んと返す語ばも無く、後て私に向つて彼の坊さんはチト違つて居ると云はれたか、マサカ氣違てあると云つたのてもあるまいと、思つた、マー環溪禪師抔は此位の見識て有つたのたか、此頃の連中は中々侯爵とか大勳位とかに御目にかゝると、ヘイコラ〳〵と同座するか拜謁てもすると、非常な名譽ても得た樣に思ふ者か多い、此環溪禪師か坦山師の莫逆の朋友て有つた、其師匠か前に云ふ廻天禪師てある、其人の下へ坦山師を遣られた、興聖寺に行つて見ると例の達宗和尙のような律宗僧の如き窮屈な者ては無い、今度の禪林の

規則は嚴格に行はるゝ、此中に居らるゝ、人達は中々大勢たから禪宗坊さんの規則として飯を炊くのも薪を採るのも、水を汲むのも菜を摘むのも坊さん達か皆行るのてある、飯を喰ふ上に於ても其日々々の御給仕まてを、坊さん達か當番て行らねばならぬ、或日坦山師に當番に當つて、大衆を食堂に集める爲に雲板を鳴らす、折しも寒むい時分で廊下の寒むい風の當る所でチャン〳〵と和尚か行つて居つた所が、如何にも寒くて堪まらないものたから、雲板を引つ外ずして竈の所に降り臀を灸り乍ら叩いて居た其う斯うする中ズッと廻天和尚か、本堂の方から庫裡の方へ廻て來られた所か、何時もより違つて妙な所て雲板の音がする、行つて見ると良作先生臀を引んまくり乍ら、チャーン〳〵と行つて居るから、此の道心と云つてしたゝか擲くられた樣子

たか、其ても辛抱して修行して居つた、或時廻天和尚に獨參が有つた、即ち眞劍勝負に問答商量して見ると、廻天和尚か其方は驚く程行作の惡い者てあるか、如何にも心眼の高いのには驚いた、と云つて遂に印可を與へた即ち是て十分と云ふ意味てある、先生印可をせられて遂に愛想をつかした、何にも是れ位の事で悟つたの印可を與へるのと云ふことは、怪しからんことた斯んなこと位は學問の上からでも云へる話だ、其れに印可をすると云ふ樣なことては此坊さんも盲目坊さんだ、斯んなものなれは禪宗々々と云つて骨折つて研究するには及ばないと云つて、其處を飛出してしまつた、此處て先生大層な御天狗になり廻天和尚と云へは當代禪宗第一と云はるゝ大宗師てある、其人を足下に見て非難した位だから天下に乃公に相手になる坊さんは一人

もない、誰ても來いと云ふ勢である、其中に覺岩と云ふ面白坊さんが有ると云ふことを聞いたか、此人は始終佐久間象山と鎬を削つて爭つたと云ふ程の人今は大坂在に隱居して居らるゝ、其處へ雲水坊さんになつて拜宿をし、自分の力らを試み樣とした、幸ひ其處に懇意な者も居つて勸められたから、其晩に獨參を願ひますと云ふと、直ちに許されて方丈へ通つた、其時に隨分亂暴な問を起した、佛には法身と報身と應身との三ッか有る、法身の佛は飯を喰ふものてすか喰はないものてすかと問ふた、スルト覺岩和尚は大層怒られて其樣な亂暴なことを云ふものては無い、と注意を受けたか先生中々默つて居らぬ、私は其んな答話を聞きには來ません、法身は飯を喰ふか喰は無いかと云ふことの答話を願ひ度い、此問か亂暴てあるか亂暴て無いかと云ふことを

詮議してもらい度い、と云ふと和尚益々怒つて其方は失敬な奴た其ちらへ出て行けと云はれた、スルと例の懇意な坊さんか非常に心配して、此儘歸つて貰らつては後の者か迷惑する、何とか懺謝してくれなければ困まる、さうか其んなに困まられるなれば君の爲に詫して遣らう、と云つて翌朝威儀を正し線香を立て座具を展て三拜し懺謝をやると、和尚漸く機嫌か直り貴樣の樣に亂暴をして歩るいては困まる、昨晩の事は許すと云つて牡丹餅を喰はした、後て懺謝と云ふものは牡丹餅に有つくものたなーと云つたと云ふ樣な性たから、馬鹿にしぬいて居る、所で今度は彼の名高い風外和尚の所へ參禪に行つた。

風外和尚は此の時分は大阪に居られたが、御承知の通り畫も描かれ書も中々立派なもので、鳥渡とした山水一幅ても近來は

隨分高價になつて少し確かな出來の好いのになると半折で五十圓も百圓もするやうになつた、其頃海内に指を屈する宗匠方の中に就て更に優れ居られたのは此風外和尚であるが、此の和尚には寺があるではなく三州足助の香積寺に居られるともあるが後には大阪へ行つて裏店住居をして居られた、彼是する内に彼の有名なる天保の饑饉年となつた、處が中には隨分勘定づくで飯食ふ丈けでも得であると云ふやうな考へで來たものもあらうけれ共、日に〳〵和尚に隨身する雲水が增して來る、然るに風外和尚の處に米は一粒もない、けれ共和尚何處へか知らん出掛てゆくと二斗か三斗の米を貰つて來るさうだ、其頃世間で云ふ塾頭をして居られたのが奕堂和尚であつたが、或時風外和尚に向つて云ふには此の饑饉で多くの人は餓死すると云ふ程

てあるに、幾人雲水が來ても居れ〳〵と仰せられますが、竟には食物がなくなつて共に餓死にしなければならぬことになりますから、何うぞ是れからは無暗に雲水を居くことは許しにならぬやうに願ひますと眞面目になつて云ふた、すると風外和尚ベロリ舌を出して、何うか私のベロはあるか、是さへあれば大丈夫、是れの有る間は食物位は何處かで貰つて來て食はせるから心配するなと云つて平氣て居られたと云ふことである、

其風外和尚の處へ坦山老師又牡丹餅でも御馳走にならうと思つて出かけて行つた、處が今度はさう旨い調子には行かなかつた、體軀こそ極く小さい、一揉みに揉潰されさうてあるが中々何ふして、少しも威儀を繕ろはない所に自から犯す可からざる威嚴が具はつて、居る、坦山老師が初めて風外さんに御遇ひにな

つた時には御可愛さうに風外さんは法衣がなかつたのか毛氈を被つて、丁度達磨のやうな姿をして見臺に向つて居られたが、ジロリと坦山老師の方を向つて尊禪は「疎山壽塔の話」を何と參究して居る、疎山は三文錢を以て匠人に與へんか兩文錢を匠人に與へんか、將た一文錢を以て匠人に與へんかと僧に問ふた。然るに僧は之に答ふる語が無かつたと云ふことだが、尊禪は其僧に代りて答へて見さつしやい、坦山老師は我れは半文錢を以て匠人に與へんと答へた、スルと風外和尚が其れはいけない其れは疎山の錢だ佗人の錢を使はずに自分の錢を使かはつしやれいと云はれた、中々牡丹餅流儀には行かない、坦山老師一言の返しも出來なかつたものだから、然らば一文錢を使ふたものでありませうか又は三文錢を使つたものでありませうかと眞面て風外和尚に問はれたら、風外和尚が私は今「歐蘇手簡」を讀んで居たよと云ふた、實に木に竹を繼いだやうな話であるが、其の言葉つきこそ誠に猫なで聲ではあるけれども、笑裏に刀ありとても云はうか、恰も鋭き劍を頸へ當てられたやうな心もちがして手に汗を握り、今が今まで高々として居つた鼻を見事に曲げ取られた譯だ、其れから風外和尚の下に難儀な思ひをして其苛酷峻嚴な提撕を受けられて遂に大事了畢せられたと云ふことである其後風外和尚の手を離れて奕堂和尚と二人で京都の大悲山といふ山の中に山居して切瑳琢磨せられたが彼の上州前橋の龍海院で奕堂和尚の後住になられた藏雲和尚も此の山居の仲間であつたといふことであるが、其頃の苦學の有樣を承はつたこともあるが實に驚ろいたもので、夕つた一つの金盥で顏も洗

へば飯も炊く、今日の衞生家に聞かしたら銅製のもので飯を炊くなんと云ふやふな事があるものかと思し召さうが、三人の中に道具と云つては其は一つきりより外には何にもないのだから仕方がない、暫くは其所に山籠して居られたが、藏雲和尚が自分の住職して居る京都近傍の何とかいふ寺を明け渡して奕堂和尚に住職させた、其れが奕堂和尚の初住の寺である、坦山老師も亦平澤の京都在の白川の心照寺と云ふに住職にせられたが寺と云ふても貧乏寺で食物さへも十分ないと云ふ有様、然るに初會の江湖會を勤めるといふことになつて、環溪禪師が其頃泉州堺の蔭凉寺に住職して居られたか雲水が四五十人も隨身して居るから、夏冬共に處々の江湖會に出掛けて其へ雲水を引連れて行つては修行をして居ると云ふ譯だ、そこで環溪和尚が坦山老師の寺へ來られて何うだ江湖會を行らんか私が助化をしやうからと云はれて、其は有り難い君が來て西堂をやつて下さるならば早速やらうと云ふ相談であつたから、愈々其夏は四十五名の常詰で坦山老師の初會が勤まることになつた、そこで環溪和尚の方では十分當てにして居られた、江湖會と云へば兎に角百日の間其所に詰める坊さん達が安全に食つて修行が出來るやうに米なり味噌なりチャンと支度が出來て居る筈なんだ。然るに環溪和尚が愈々江湖の始まる日限が來たもんだから、雲水と共に行つて見られた所が案外だ米一粒味噌一嘗の用意もしてない、是は全體何うしたのかと尋ねられると法幢は私が取るが、江湖は君が置いてくれるのだと云ふ挨拶であるから、環溪和尚も是には驚いたけれどもサテ今更致し方もない、翌日から

毎日一同で托鉢に歩いたり點心に出たり、此の位骨の折れた結制は初めてゞあつたと始終環溪和尚が折々一つ話に話されてあつた、然し是時に坦山老師は「圓覺經」を講せられたが、其れは實に聞きものであつたと、其れも環溪和尚の一つ話であつた、さて又坦山老師が其所の住職して居られた頃、唯今曹洞大學の門前に支店を出して居る海老屋長兵衛が京都室町で盛んに衣屋をして居つたので時々出掛けては法螺を吹いて居られたさうであるが、其所へ出入をする小森宗二と云ふ醫者があつた、或日のこと海老屋の店で其の醫者と坦山老師が初めて逢つた、坦山老師は本より不遠慮な質であるに、小森の方でも何の坊主共がと云ふ考へだから、終に一言云ひ二言云ひする中に流石の坦山老師も一句も口が開けないやうになつた、是は昔から佛心と云たり涅槃妙心と云たり八識心王と云たり、兎に角人々所有の此心は一體何處に在るものであるか、五尺の身體中足か腹か脊中又は骨にか筋にか何處に在るかと云ふ問題、心の在所も分らないで精神の魂識のと幾ら云つても無駄じや空論じやと斯やられた時に坦山老師一句も出なくなつたのだ、昔から心と云ふものは何處に在るかと云ふに胸を指して心と云ひ心と云ふ字に「ム ネ」と云ふ訓を附けた位、佛敎の書物の上では胸の間に八葉の蓮花のやうにブラ下ッて居るものが心だと云ふ、其を證據には憎いとか可愛とか喫驚りした時なとには直くに胸に響くと云ふて居たのであるが、其んなとては西洋の解剖的に學んた者には承知か出來ない、支那の學問でも佛敎と同樣な說を立てゝ居るか之も同しく空論だと云はれても仕方が無い、其を坦山老師は

様々と考へられたか成程ソー云はれて見ると西洋の學問の方は實驗から來たのだから餘程確である、若しも慥かに證據の擧つたものて無ければ皆空論に歸すると云ふなれは佛法に說く所のものは西洋の學問の爲めに壓倒せられて佛々祖々か數千年來苦辛せられたる所の學說も哀れ衰亡に歸するのてあらう何うかなして之を實驗的に研究しなければならぬと云ふ考へを起した、之れか最も注意して置かねはならぬとて、凡そ歷史と云ふものは譬へは此紙一枚に二千五百年の歷史も收められるのて其間の事を一口に云つて見れは何んてもない間に時間は經過して居る、其中に何んぞ一つ變はつた事が起ると其れか其歷史中へ鳥渡點を打つた樣なものてある、吾國二千五百年史の中で神功皇后の三韓征伐とか大閤秀吉の朝鮮征伐ても殆んと

點を打つたのである、其とは違つて其の點を相續して線を引くことになると千年前にポチリと打つた點か數千年後まても續くことになる、太閤秀吉の事業に隨分大きくは有つたが畢竟歷史上の一點に過きない、德川家康は何うかと云ふとポチリと點を打つたのが二百八十年もズッと引いて來た、是等から考へると吾か日本に偉人と呼はれる人達は澤山に在つたけれども、聖德太子の如き始めて佛法を御採用になつてポチリと打たれた點か今人まても線と成つて來て居る、之から先は何處まて續いて行くことになるかも計られぬ、吾々は此世に處する間に切めては點たけても打ち度いものてあるか其れさい中々六ヶ數い況んや線を引くと云ふことは尙更のことてある、

今坦山老師は佛法と云ふものか始つて二千八百年以來最尊

無上の教へと云ふことは誰れも信して居るとてあるけれども、之を實驗的に學ばねばならぬと、云い出した者は坦山老師一人である、其も研究の結果空論ては無く實驗的に心と云ふものは唯識の第八識或は第七識第六識前五識と云ふものを實驗的に研究せられたる所の點は此處きりではない、十三年の今日まて兎に角續いて來て是れなら後も尙ほ幾百年續くかも分からぬとになる、今老師の腦脊異體惑病同源と云ふものは卽ち之てある、此說か吾か釋迦牟尼如來及び歷代の祖師方は御承知か有つたか無かつたかと云ふと或は坦山老師か始めて唱へ出した說とするとも出來るか、楞嚴經を大佛頂萬行と云ふが大佛頂とは大きな佛の頂き卽ち之れが腦髓で人間に取つては最も尊きものであるから御經の名にしたのてあるから斯う云ふ語は、經文に續々見へて居る、左れは釋尊は明かに吾々の心の腦髓に在ると云ふことを御承知て有つたのてあらうか、支那あたりに來てから曖昧模糊たるものに成つたと云ふことを見出されたは彼人か一度大安心を得られた場合て有つたそうです、其後今少し確かな證據を得たいと云ふのて涅槃經を見られたら其中に「頭を殿堂となして心王、中に在します」とある文を見られて益々確かな說を得ることになられた、して見れは釋尊か既に三千年の昔に示されたことは明かてある、其結果坦山老師は醫學も研究せられ解剖學も行られたのてある、

坦山老師は實驗的研究を爲なければならぬと云ふのたか、其は佛法と云ふものは說明たけては何の詮もない、實驗的に履踐しなければならぬと云ふたのて、此れが段々相續して何處にて

も佛法を實驗的に研究し履踐する者が有りさへすれば坦山老師は歴史に一線を引いた偉人であるといふことが出來る、

今一は坦山老師は腦髓と脊髓とか體が違ふと云ひ惑と病とか同源であると云ふのて病は吾々の體に異狀を生するものて惑と云ふのは吾々の心に異狀を生するのてある、此心の異狀を生する惑と身體に異狀を生する病とは全く別物てはない、心の病卽ち煩惱を解脫して悟を開けば體の病も無くなると云ふのか坦山老師の發明てある、此事になると何んな醫學者ても生理學者ても異議は云はない、愈々之に違ひ無いと云ふことが益々明かになる樣てある、此一方に於て慥かに歴史上惑病同源の說に確實なる一線を引いて行くことが出來る、腦脊異體と云ふ方になると容易に決することの出來ない、問題てあるといふことてある、今一ッ坦山老師の學說上言ひたい事かあるか今は略して置く、坦山老師は風外師に遇ふて心の惑ひを解脫する方は慥かに證得せられたか、身體の病氣を除くと云ふ方は、老師か或時尾州八事山へ參詣しやうと思ふてノコリ々々と名古屋の東の方へやつて行かれると、後になり先になり一人の乞食のやうな老人が附いてくる、坦山老師か休めば其老人も休み歩めは歩む、可笑しい奴と思つて坦山老師は錢を少し惠んてやつた、所か其老人か云ふには私は其んな物の必要な人間ては無いと云つて莞爾りと笑つた、其顏か如何にもスゴイ顏で恰も坦山老師を輕蔑して叱り付けた樣に身にゾッと感しられたそうて、此れは餘程變つた人間てあると思つて色々話をしてみると、七八百年も前の源平時代の戰爭の話しなどを今見て來たやうに言ふ、其れは自分

て確かに目擊した樣に話すのてある、其他一々の話しか中々感服すべき說か多いので、老師も兜を脫いて、道を聞かれた、其時に一口に云へは仙術と云ふものを授かられた、老師が佛仙社と云ひ覺仙と云ふのも皆此れから來たので、覺は佛陀、仙は仙人、言ふ意は煩惱を解脫するに佛法て、身體の病を解脫するのは仙術て無けれはならぬと云ふので、佛仙社と云ふを結んて如何なる人も身心共に安全を與へると云ふことを敎へられたのか老師生涯の仕事である、是等の事に就て何にか書き留められたものか有らうと思つて段々探しましたか、殆んと二十卷計りもある、中にはチョイ々々した色々な物か有つて現今の博士連中井上圓了とか三宅雄次郎とか云ふやうな人だちが、大學の學生て老師に起信論講義を聞いた時分の點表なども這入て居るか、其等を見ると餘程面白い、老師の書かれたものに讀み惡いものはないか、唯一ッ讀め無い妙な書き樣をしたのかある、日記位なものまでも誠に美しく書いて在て、今日手本にしたい位の字か有る、チョット書入れ一ッせられても正楷て書いて其綿密さ加減に至ては到底吾々の及は無い所かある、其んな綿密なもの計りかと云ふと磊々落々丸て狂人か書いたかと思はれる所かある、綿密家と思へは忽にして磊落、磊落家と思へば忽ちにして綿密其間實に端睨すべからさるものかある、茲に至ては普通の秤りを以て老師の目方を量ることか出來ないことになる、

御話か妙な所へ飛んて行きましたか、老師は啻に日本の歷史上のみならず世界の歷史の上に一線を畫した人てあると云ふことを記臆して貰らいたい、或時京都て時の關白公と衝突して

大に喜つた、關白を喜じると云ふことは非常なる大罪にて、重くて死刑輕くつても遠島となるのであるか、某人の取成しで、發狂人として漸やく助かつたこともあるか、斯の如く遠慮會釋も無く關白殿下に向ても自分の氣に喰はぬ事があればドン々々理屈を云はれた、其頃京都の北岩倉と云ふ所に狂人を入れる風癲病院か設けられて有つたか、老師も其中へ入れられた、其時に作られた詩なと面白いのかある、其後六尺四方位の甍の車として、は少し大きい位なのを作つて、片一方の方に窓を附けて光りを取る樣にし、其中に這入て書見をして居られた、車か附いて居るものだから具合の好い所へ引張て行つては暫く生活して厭になれは又出かける、其れを蝸牛の庵と云ふ意味て蝸盧と云ふ名を付けて居られた、斯う云ふ樣な事蹟は隨分澤山ある、

其から後狂人と云ふとて江戸の法類總代を京都へ呼び出し罪人同樣の扱ひて江戸へ送られた、其時に之を關白公に上げてくれと云ふて詩を一首と歌一首とを役人に託せられた、其詩も歌も雲を詠したので、

蓋覆乾坤笑女媧　或昇山岳或泥沙
隨風隨處無常態　時起甘霖利國家

其歌と云ふのは、

天つそら風にまかする浮雲の風のいつこに吹きさそふらん

と云ふのてある、關白殿は之を見られて非常に老師の人物を惜まれ、拙者か惡るかつたと云はれてあつたと云ふことを承まはつて居る、其から江戸へ來て居られたが彼是する中御一新となり同盟會か起り教導職に補せられ大講義にまて上ほられた時

に教導職を免せられ、曹洞宗の僧籍を奪はれた、其時の要路に當て居る宗務局のお役僧達が非常に老師を嫌つて左程罪も無いものを追出し還俗をさせてしまつた、其罪は何かと云ふと其頃教部省に屬して大教院と云ふのかあつて、其の處に編輯課を置いて其課長と云ふのは養顔徹定と云ふ、淨土宗の大教正で、其屬員が坦山老師と相馬崇禪と云ふ二人であつた、然るに大教院に於て說教の模範として三條の教則を敷演したものを教導職一般に配附すると云ふので出版した、其時に出版屆を怠つたと云ふので老師と相馬崇禪氏と出版法違犯の罪に服さねはならぬとになつて、其時に私は原坦山の差添人として四五度裁判所へ呼ひ出されたとか有つた、其宣告文を見ると右は養顔徹定の指圖に依ると雖とも其方共の手落たると明かなりと云ふので、罰

金一圓二十五錢を申付けられた、と云ふのか罪なので、宗局に於ては、天下の法律に觸れた者を宗内に置くとは出來ぬと云ふので、管長から教部省へ上申し、老師の大講義を奪ひ、其上僧籍を削つた、是等の事から考へて見ると、其時の管長其他か、非常に老師を虐待したと云ふとか明らかである、然るに捨てる神かあれは拾ふ神もあるといふ諺の如く、近年死くなられた本願寺の法主明如上人が直に老師を聘せられて築地の本願寺別院にて教育の事を司てもらつた、又明治十二年に帝國大學へ彼の加藤弘之氏か招待して文科の印度哲學の講座を擔任してもらうとにもなつた、其うして凡そ十年間大學の學生に佛教的教育を施された、其の教育を受けた人達は多くは今博士に爲つて居らるゝ人達てある、明治十八年に學士會員に這入られたか佛教者として

此會の會員と爲つたのは之れか始めてである、其後曹洞大學の總監として來られたが是等は別段特筆すべき程のとても無いが、斯くして廿五年の七月廿七日に圓寂せられたのてあるか、今や臨終と云ふ時に至つて「拙僧儀即刻臨終仕候間此段御報知に及ぶ」と云ふ葉書を自ら認められて多くの知人に送られた、

老師愈々眼を眠むると云ふ時に死に際はの世話をする人か能く行るとてあるか眼を開かない樣に撫でるのてあるが、老師は眼はよいから口をと云はれた口を開いて死ぬとまついと思はれたと見へて自分で抑へて眠るか如くに圓寂せられました、御互も斯う云ふ風に死に際を立派にやり度いものてあるか、何分命は一ッしか無いもの故死ぬる稽古をして見るとか出來ないのは遺憾てある何うかお互に平常膽力を練つて其覺悟あり

たきものてある、……

迫山和尚全集

第壹編　講演部

(一)　心の本體

後學釋悟庵編

心の本體は如何なる物にて如何なる形狀なるや、古より大智大聖と稱せらるゝ者も之を確定すると難し、五洲諸道の敎門、及び究心精神等の學科も、未だ一定不易の說なし、但其發現する所に依て、知るべきを知り究むべきを究めて止むのみ、西洋敎の說には、天主始めて地塵を以て人體を造り、生氣を鼻より吹込み、生靈を成すと云ふ、歐米諸國の敎小異ありと雖も、其原を天主の能造者に仮する大に同じ、亞細亞の佛敎の如きは、萬物の體は佛天の所作に非ず、原體本有にして因緣聚散生滅の相を現すと、諸宗の所立區々なりと雖も、其大原本有の性、因緣に由りて生滅すと談す

ること皆同じ、孔老の如きは、其終始を詳論せず、唯自然天命に皈するのみ、近世理學熾んに行はると雖も、心魂の說に至ては、或は其國の敎法に依て天造の物となし、或は心魂は動物の頭腦に具する一物にして、知慮應動等の用を具し、隨て生じ隨て滅し往來出入する者に非ずとす、如是種々の異說皆古へより智人傑士の皈依信仰して主張する所なれども、之を熟察するに天主といへる能造者ありて、天象・地質・人魂・畜身・草木金石に至るまて、悉く意に任せて造作する者ある的證あるか、原體本有なる實物を檢出明了なるに非れば、一定の確說を以て億兆の異見を合同すること能はず、只人々の所見所信に任するの外なし、予は原體本有の說を善と思ふ、故に今其概略を演んと欲するのみ、

○六種原質

凡そ天地の際、其總體を大別するに六種の原質たり、曰く、凝・流・氣・溫・空・識是なり、夫天象地質より萬物に至るまて、皆此六種妙合の成する所、西國の學術之を細別して七十數に至ると云、(識を除て論ぜず)此六種妙合親和して動物となる、人獸等是也、特に人間の如きは識種を受る最も多し、是萬物の最靈たる所以なり、獸畜之に次く、鱗介の如きは尤も識種の微なる者とす、植物は五種の所成識種を得る、極て微にして無きが如し、金石の如きは多く單質の凝體とす、凡そ凝流氣等五種は耳目の知り易く、慮知の測り易き所ろ、所謂識の一種は其原質至微至妙にして測りがたし、理學舍密の諸學諸質を研究する精微なりと雖も、識種を論ぜず、蓋し識は一大原質にして宇宙間に遍滿彌綸し、恒に氣空溫と親和す、若し其體凝流質と和合すれば動物を成す、但其形狀の見るべきなし、故に分析研究、其實體を檢出して耳目に觸れしむる能はず、獨り精思實究、其妙體を求むるに在り、

○識性の純雜

凝流氣溫空の五種は、理化諸學の究明する所、已に精確なれば之を置き、今識種の體性純雜を說くべし、夫れ識は萬類動物の心體たる者にして、所謂覆載間に遍滿する所の最靈至妙の一物にして、其起滅隱顯する所以の者幽玄不測、故に神者之を見て之を神と云ひ、佛者之を見て之を佛と云ひ、仁者は仁と云ひ、智者は智と云ひ、靈魂と云ひ、精神と云ひ、性命と云ふ、其實は一體なり、而して其質純あり雜あり、其滿空に彌綸する者は空氣等に和合す、其識種を受くること多き者は動物となり、最靈なる

者は人類たりと雖も、固より五種の原質と和合するが故に純雜の別あり、是則智愚明暗の由て分るゝ所以なり、若し智覺盛大なる者を大智となし、純智精覺の者を至聖と稱す、或曰、識性天地間に遍滿する者何を以て之を證する曰、一切萬物皆原質ありて親和妙合して其體を成す、獨り萬法の主宰たる靈魂識智其原體なしと云へけんや、天空地底淵水の深きに至るまで皆動物を生ず、豈之を偶然にして生すと爲す可んや、其形質を察するに皆凝流等の體あり、心識獨り偶然ならんや、總て一切原質各々吸集牽合の力と、排拒推斥の性とを具す、故に能く妙合して形體を成す、是天造にあらず、人爲にあらず、物質固有の本性なり、其性集合すれば形象をなし、壞散すれば蕭然として形跡を絶す、其形象起滅あるが如しと雖も、原質は毫も消長せず、然るを動物の形骸百體千法萬軌の本主たる心識靈魂、獨り原體なきの理あらんや、蓋し其原體は常住不變にして、其凝流等の質と妙和して、形象を成すれば萬物となる怪むべきの理に非ず、其不變の本體を原因と名け其形象の生滅する所以を緣由と名く、是れ即ち天地萬物終古不變にして、亦た能く生滅變幻の形象、千種萬態測量し難き所以なり、

○教　原

大凡、萬國教法の本原を尋ぬるに皆上世草昧の時に起り、轉展變化して今に至る、故に今より之を察すれは怪むべく笑へきが如き者多しと雖、特に其本支如何を察するに在るのみ、喩へは、嬰孩の時闇裡に向ては鬼魅あるかと疑ひ、黯雲を望ては神龍あるかと恐るゝが如き、豈其人の恐ならんや、其智の未だ達せざるのみ、夫東洲西國を論ぜず、教法の原は人心を治するに過ぎず、其心を治する所以の方法、風土に隨ひ時勢に隨て同異なき能はず、是れ人情智識の方向變遷に由るを以て也、人心或は古を尊ひ今を卑み、或は奇を好み怪を愛し、或は新を競ひ舊を厭ふの類千百にして足らず、蓋し歐米の教、能く時變を察し、時機に應じ、精學實究以て之を修飾し、肅規嚴則以て之を正整し、巧說利辨以て之を誘導す、故に治化を贊助し、人心を開益す、東洲の教、漫に上古を推尊して變通なし、故に偏見陋習を脫する能はず、甚しきは治化を妨げ人智を晦塞するに至る、亦猶ほ山民野氓の稚習に類するが如し、教法に優劣あるに非ず、司教者の智愚に由るのみ、殊に佛教の如き其原牟尼氏の自證覺智より流說し、或は之を三際に徵し、或は之を十方に演ふ、三世十方を收めて一念心上に皈し、

一心を開て億萬の教法を列す、畢竟人心の妙體靈用を談するのみ、所謂實の如く自心を知る、之を菩提と名くる者是也、中世以來の佛徒、其道の實際を詳にせず、多くは神奇不測を旨とし、其言荒誕に渉り、遂に識者をして見聞を厭はしむるに至る、是れ其徒の罪にして其法の過に非ず、予は尤も佛陀氏を奉ずる者なり、然れども實際有益の法に非ざれは之を言を欲せず、又他の教を非するを欲せず、亦猶ほ春花秋月各其趣を異にし、紅桃白李其色を同ふせず、何ぞ必しも鶴脛を截て鴨脚を繼ぐことを用ひん、亦各其得る所に隨て可也、若夫道の本原天に出るとなし、又上帝の全權賦命に係ると說き、又無爲自然玄々至妙と云ひ、又無始本有隨緣起滅と談ずるが如き、皆是各教の主張する所ありて、或は人心を當下に治め、或は精神を悠遠に安ずるの妙あり、強て之を取捨せんと欲する者は教法の原旨に非ず、只其時機に隨て人心を治め、情惑を安ずるは、教法の大用にして其原に達する者と謂へし、

○不易の理

古今の聖賢英哲之を學び之を思ひ之を究めて止まず、而して其實は得がたき者は不易の理なり、獨り人事上のみに非ず、天地の大より見がたく知りがたき、ゴ麼の物に至るまで其確然不拔の理を究むるは至難の事と云ふべし、比へば日月の運行大地不動の如き、古へより不易の理となせしも、後世に至ては日は不動にして、月地運行の理を發明せり、抑も天地の廣大なると、萬物の無量なるとは且く之を措き、予は教法上に於て不易の理を求め、自ら之を信受し、更に他の億兆に及ぼさんと欲す大凡天下の教法數多ありと雖、其宗趣の大要三種を出てず、曰天造、曰自然、曰緣起、是れ也、天造とは歐米の教法多種ありと雖も、所謂天主靈神なる者ありて天地萬物人身靈魂も皆悉く製造與奪する所なりと信ず、然るに後世理學化學等大に開け、或は異教異學より詰難を受るに至ては、所謂天主なる製造者ありと云ふの理、恐くは不易となしかたし、其自然と云者は支那の教法に係かる、(又天命と稱すれども、天詢々然として之を命するに非ずと云へば亦自然の義を出てず、此れ西教と異なる所以なり、)例へば、茫洋として邊際の見へがたきを無邊と云が如く、未た邊際を究めざるのみ、邊際なきには非ず、自然も亦然り、未だ其然る所以を究めざるのみ、自ら然るに非ず、之に由て云へば、一切皆自然なりと云ふの理未だ不易の實飯となしがたし、其緣起と云ふ者は佛教の談ずる處ろ、蓋し諸法萬物の本質は常住不滅なる者なれど

も、其物體形狀に至ては不動不變なる者にあらず何となれば星學者(米國「スミット」氏)云、近來恒星十三を消失し、十星を出現すと、恒星は此方の太陽と同體なる物と云へば、況や其之に屬する惑星地球の如きを不變の物となすは不易の理にあらず、現に火木兩星間の衆小行星の如き、必ず大惑星の壞裂せし者ならんと考證するを以ても、其之を生じ之を滅するの理なきに非る知ぬべし、但人智の明かに之を知る能はざるのみ、(これを成住壞空と云ひ、又生住異滅とも云)、今此敎中に於て其生滅する所以の理、之を因緣と云ふ、之を近く動物に徵するに、必ず其生死の緣由あり、其諸緣和合して物體を成すべき者を種因と名け、又原因と云ふ、其之を助けて成長せしむる者を助緣と云ひ、依緣と名く、經云、吸引同業故有因緣、生羯羅藍、遏蒲曇等と、是我が大聖の所說にして、動物の生ずる大本を同業吸引と云ひ、其吸引の情想を無明と名く、即ち原質同氣の者吸引集合して一種因を生じ、依緣相助けて生成する者なり、羯羅藍、遏蒲曇は動物の身心凝體を成ずるの初位なり、獨り動物のみ同業吸引の性あるにあらず、萬物の生成する此吸引の性に因らざるなし、(近來世俗頻りに引力を談ず故に之を略す)、然れども之を生成する、必ず飲食等の助緣あらざれば、其生を全ふする能はず、又其生を害する由緣を以て、之に加ふれば亦其生を遂ぐる能はず、之を死と云ふ、經曰、因緣集れば之を有と云ふ、有と云ふ者あるに非ず、因緣散すれば之を無といふ、無といふ者あるに非ずと、此の如きの說、予は之を不易不拔の定理と信ず、尙ほ我が佛敎中不易の說多しと雖も、今僅かに其一端を發するのみ。

○十二緣

前きに諸敎諸學の中、不易の諦理と稱すべき者は緣起なりと演べたれども、尙ほ其義未だ盡さゝるを覺ふ、故に更に廣略の說を擧げて不易の眞理を證せんと欲す、前に引く所の吸引同業故有因緣の經文は萬種の大本なると丁々たり、近世理學漸く熾んなるに及て、彌よ我が大聖の說諸敎に傑出せる事を信ぜり、何となれば近世理學の大家、萬物の體質を大別して凝流氣の三體とし、通有偏有の二性となす、而して所謂通有の十一性、之を精神に徵するに、塡充性・無盡性・習慣性・運動性・引力性の五性を得べし、其餘は相關する事なし、夫れ精神の諸質と和して物體を成すに至ては、引力に外ならず、引力は至微至小の分子より、最大極遠の日月星辰天地の運度、萬物の成敗、皆引力の增減與奪に因らざるなし、而して引力の發明、皆近世に出づ、(「ガリレ

オ、ニュートン等)獨り我か牟尼氏、楞嚴會上に於て如上の說、已に二千八百年前に在り、其之を譯傳する千百七十年前に在り、(唐神龍元年、天竺僧般刺密帝譯、我明治八年まで千百七十一年)知るべし、萬世不易の妙法なることを、(佛經動物の本因を同業吸引となし、歐洲學士之を萬物に徵す、共に不朽の法たり、)殊に因緣の實義、亦解し易からず、(世俗因緣ごかしの如きにあらず、)因緣とは之を讀むれば十二となり、之を總ぶれば苦集の二となる、集とは物質依緣吸合して動物の種[illegible]を成す、其體は諸負の集合物なるが故に集と名く、其動物たる安樂のみに非ず、必ず苦惱あり、故に苦と名く、(拔苦與樂は佛敎の本旨、後に說くべし、)之を細別して十二支となす者は、所謂業力吸引して種因の本原を成す、業とは物質發動の機なり、人類に在ては五官の發揮に緣て情機の運轉する者を行業と名く、金石の類に於ては本質固有の性、互に依緣吸合して形狀を成す、之を物體と云、金石の如き至頑無識の者と雖も、尙ほ能く吸引力有て萬種の形狀を成す、況や動植の物體を成すべき者は、吸引力殊に敏捷にして、(人體十五原質の如き其最とす)能く種々の形體を成すものなり、此れ極微の分子と雖も必ず吸引同業力あるに因れり、是故に識性諸ろ〳〵の原質と緣因妙合すれば、一種動物の形體を成す、胎卵濕化の四生別異ありと雖も、其最先形體を成するや必ず同業吸引の力に因らざるなし、已に其形體を成し、又更に之を相續するの緣因有て胎卵濕化の異狀を現ず、即ち一切人畜より深淵地底に至るまで萬種の動物を生ずる由緣なり、經曰、心は巧畫師の如く、能く種々の五陰を造ずと、信なる哉、今其一證を說んに、白人黑人と接合すれば、非白非黑の人種を生じ、大獸小獸と接合すれば、必ず其中間の獸を生ず、且人身腸胃の中蛔蟲を生じ、外部に虱蟲を生ずるが如き、皆原質依緣吸集して成する者にして、天主等の所造に非ざる明らけし、故に腸胃の穢滯を除き、外膚の垢膩を去れば蛔虱を生ず、若し果して一切天主の所造となさば、穢滯垢膩を去る者は、天意に逆ふとせんか、身命を委して虎狼に食はしむる者、天命を奉すとせんか、思はざるべからず、而して其原質の體は本然固有なる者にして、我が小敎中之を法體恒有と云ひ、大敎中之を世間相常住といひ、又六大周遍と稱す、(六種の原質之を古譯に六大と稱す、小大の敎は小智を導く敎を小乘敎と名け、大智の者には大乘敎を敎ゆ、故に大小敎の目あるなり、其本性常住恒有にして生滅する者に非ず、經に所謂生せず滅せず、增さず減らずと、其生滅增減するが如き者は所

謂因緣の聚散にして體質の生滅にあらず、一たび因緣吸合して一種因を生ずれば即ち之を十二緣中第一位無明支と名く、無明とは諸質集合して靈覺明智の性を陰藏蓋覆し、(五陰五蓋等名義の起る由緣なり)恰も靈明の性無きが如し、故に無明と名く、之に加ふるに了因修緣を以てするときは固有靈明の實性顯現す、(木に緣て魚を求むるが如きにあらず)之を大聖佛陀と稱す、然れども皆其無明妄昧に隨順流行するが故に之を第二行支と名く、其無明行業に熏染し、起す所の分別念慮(即是習慣性)之を第三識支と名く、此心識孤起單行する者に非ず、必ず形體と俱生するが故に之を第四名色支と名く、名とは心識を云ひ、色とは身體を云ふ、已に心身あれは內に覺智思想あり、外に五官の用あり、之を第五六入支と名け、心身六根具足すれば眼は色像に觸れて見をなし、耳は聲音に觸れて聞覺を起し、乃至肌膚に觸れて痛痒寒熱を覺ふ、之を第六觸支と名く、其之に觸るゝや必ず苦樂等の受用あり、之を第七受支と名く、苦樂あれば必す愛憎の情想を起す、之を第八愛支と名く、情想万種、獨り愛を以て名くる者は、愛は動物固有の吸引力にして餘の情想は之に原起する者なり、之を愛する甚しき時は必す之を取着して捨てず、之を第九取支と名く、愛想取着より所有の行業結果成熟す、之を第十有支と名く、所有の行業より又更に緣因交換生成して止まず、之を第十一生支と名く、生ある者は必ず老死あり、故に第十二老死支と名く、此暫く現今上に於て說く者にして、必ず老死して止む者に非ず、又更に緣因聚散離合起滅、二世三世十世十方に通貫して止む時なし、抑も此精魂靈覺の性は、三際に亘り虛空界を極め、遍滿彌綸する者にして、(即是塡充性、無盡性)例へば溫質光質の性、暫く其緣を遮るときは人の五官に觸れざるが如しと雖も、其實は一切處に充滿するが如し、經曰、本妙身心性色眞空、法界に周遍して常住不滅、衆生の心に隨ひ所知の量に應じ、業に循て發現すと、豈不朽不易の妙法にあらずや、

○精神世界

嗚呼難い哉、學問の要、恰も万斛の砂石を抖擻して數顆の精金を撰み、九重の淵底を摸索して一種の寶玉を求むるが如し、古へより佛敎を排して譎誕無實の法となし、馮虛架空の說となす者は、彼の砂石を握て精金を見ず、波浪を怖れて寶玉を失するが如し、是佛敎說法の儀式に暗く、茫洋海中に無數の珍寶あるを知らず、予今佛氏說敎の儀式に擬し、之を實理に徵し、現今に驗し、眞實不虛の理を顯すべし、先づ佛敎

の妙旨を知んとせば、現在吾人の住して見聞覺知する世界の外に、精神世界あることを信ずべし、今夫目に彩色を見、耳に聲音を聞き、好惡を論ずる者は現在耳目世界にして精神世界には非ず、(主從の別あるとを信ずべし)蓋し精神世界十種の差別あり、最下第一の世界を泥黎界と名く、泥黎とは梵語にて極苦の義なり、又地獄と名く、(現今島原等の稍や娯樂ある地を云ふに非ず、此界は常に苦惱のみにして娯樂ある事なく、花鳥風月も皆な愁ひを催し、眼耳見聞悉く悲哀を起さざることなし、現世に於ては死を第一の苦とすれども、此地獄界は死よりも苦なる世界なれば、苦惱を免れんとするに至る、故に苦世界と名づくるなり、第二を餓鬼界と名く、此界は常に不足の念のみにて貪欲のみ深く、恰も現世飢渴の忍ぶべからざるが如し、此界に二種の族種あり、一を無財鬼といひ、二を多財鬼といふ、無財鬼は常に衣食財寶あることなく、飢渴寒凍、終年區々として匱乏に苦むなり、多財鬼は衣食財寶山の如くあれども、足ることを知らず、用ゆること能はず、愈々多ければ愈々貪り、附木一枚も使ふことを厭ひ爪に火をともして苦情を訴ふ、第三を畜生界といふ、此界は苦多く樂少く、唯食欲婬欲のみ強く、父子兄弟の差別もなく、強い者勝ちにて力らづくにて飲食雌牝を爭ひ、子を犯し親を姦し、其意に適せざれば殺傷相食に至る、第四を修羅界と名く、修羅とは梵語にて不端正の義なり、此界は我慢勝他の心つよく、他にまけぬことを善しとす、故に心術端正ならず他の善きことは嫉妬妨害し鬪爭殺戮止む時なし、第五を人間界と云ふ、此界は苦樂相半ばし善惡相雜はり、五欲の情殊に熾んなり、五欲は財寶、色欲、飲食、名聞、睡眠是なり、此五欲滿足すれば樂しみ、得ざれば憂へ、仁義忠信等を善とし、殺盜姦妄等を惡とす、第六を天上界と名く、衣服、飲食、住處、眷屬等皆清潔にして自由滿足し欲すること得ざるなく、思ふこと悉く成就す、然れども此界に大苦惱あり、無常と名く、其善報盡る時は亦衰滅の苦あり、第七を聲聞界と名く、此界は種々の苦惱は皆心想より生ずることを觀念し、心想を滅盡し、寂靜安樂に住せんことを求む、第八を緣覺界と名く、此界は殊に喧鬧を厭ひ、獨善幽靜を好み、微動の心念をも滅盡せんと欲す、而して聲聞緣覺の二界、大同小異なるが故に常に同く三乘と稱す、第九を菩薩界と名く、菩薩は梵語にて大心者と譯す、此界は心想廣大にして己れを捨てゝ他を救ふことを務む、故に他の爲めには如何なる難苦をも厭はす、所作一樣ならすと雖も、大功大利を起し、他を利益するを以て此界の本務とす、第

十を佛陀界と名く、佛陀とは梵語にて大覺者と譯す、此界は清淨無爲の樂界にして百福千祥備はらざるなく、萬德圓滿にして壽命無量なり、此界に四種の大寶あり、一を大慈仁といひ二を、大智慧といひ、三を大妙樂といひ、四を大方便と云ふ、其大慈仁の說を聞ては、極惡大兇も感涙を流して善根を萌し、其大方便の妙談には、須彌山を芥子に納め、一毛端に億万の世界を現出す、其智慧妙樂壽命無量なることは一切の聖賢英傑も之を願ひ之を求めて止まず、故に此四大寶は餘界の及ばざる所とす、凡そ精神十種の世界大略此の如し、更に人間界の近況を尋ぬるに、此界の大君主を意識大王と云ふ、三の大臣あり、一を正理大臣といひ、二を思想大臣といひ、三を周知大臣といふ、五の官省あり一を察明省といひ二を聰聽省といひ三を了氣省といひ、四を養成省といひ、五を觸覺省といふ、三大臣は常に大王の傍らに在て五官省の奏達を辨理し、万機を統宰す、近比此地より電報あり左に錄す、

日本國東京府管下芳原町に於て、博覽會興行の由に付、大王陛下万機の御暇御慰勞の爲め、行幸被遊可然奉存候、此段奉伺候也、

聰聽卿代理

人間界紀元三六十八年十三月三十六日　菊成權丞

周知院御中

此に於て、三大臣大評議ありけるが、思想大臣曰く、陛下常に深殿の中に在し万機に叡慮を勞せらる、幸に聰聽省伺の通至急行幸然る可しと、正理大臣襟を正して首を掉て、曰く、不可なり、今大王至妙至樂、万德無缺の至尊を屈し、右樣不潔淫蕩の境地に行幸せらるゝこと以ての外のことなり、況や至尊御一人、吾々三人の扈從のことなれば何方へ行幸相成るとも仔細なしと雖も、是非共五官省供奉のことなれば、如何の大事出來も計りがたし、特に觸覺省官員の如き皆不淨汚穢の地を貪樂すること甚しければ、若し强て之を制する時は吾々をも闇殺し、至尊をも惑溺するに至るべし、此儀差止むるに若かずとて、

指令　伺之趣御採用不相成候、自今右樣不正の儀は正理院實究局へ打合せの上、願伺等可差出事、

右は稍や諧謔に涉ると雖も、皆精神世界の實況眞說にて一毫の虛誕なし、且つ之に依て佛敎の法喩無量、古今の沿革等を信ずべきなり、

○万法唯心

天地古今を網羅して遺さず、万法を生成して盡るなく、無量無邊にして形跡なく、影響なく、恍々奇々、最靈不測なる者は其唯一心の法なり、緩月朦朧道路暗かならざるに蚖蛇あるに駭き、燭を照して之を見れば、蛇に非ずして繩なり、暗處に鬼魅あるを認め、燈を把て之を察すれば鬼に非ずして杭木のみ、是蛇の繩となり、鬼の杭と變ずるにあらず、所見思想の轉動するのみ、世に三上戸と云ふとあり、三人同く酒を嗜み其醉に及ては一人は瞋り、一人は悲み、一人は笑ふ、是酒の性別あるに非ず、其之を飲む者の性異なる也、夫れ万物万法の體性固より至妙にして名義の盡す可きに非ず、而して其之を異解別受する所以の者は皆宿習に因る者にして決て一般ならしむる能はず、若し天造ならば一般なるべし)宿習とは過世の善惡好醜等の熏染より、智愚苦樂等の現身を受ると權衡の輕重に隨て昂低するが如し、現今若し惡行に熏染すれば惡趣に入り、善業に慣習すれば善果を結ぶこと疑ふべきの理にあらず、至善は無爲界に生じ最勝の妙樂を受け、極惡は艱苦界に墮して大苦惱を受るも亦唯心の所變、自業自受の必然なる者なり、彌爾氏曰(英國近世の大學士)何の宗門、何の學

科に限らず、眞理の全體を盡す者に非ず、決して此外にまた眞理あらずとは定めがたしと、予謂く、之を眞理とせば又之を非毀する者至る、故に我教中最上點には眞理の名をも立せず、之を無爲眞如界と稱す、彌爾氏恐くは未だ我教の深意を知らざるか、抑彼國に流布する所の者淺近にして取るに足らざるか、予嘗て儒佛及び西洋諸學の大略を聞くに、外物の眞理を究むる者は理學化學に及ぶものなく、心法の實理を盡す者は佛教に如く者なし、獨り悲む、牟尼氏の出世已に二千九百年、(釋迦佛降世我明治八年迄二千九百有二年入滅より同年まで二千八百廿三年)爾後之を譯傳し之を註釋する者所見斑々、故に常に歎ず噴漠沙中に珠玉を求むるが如し、況や當今諸學の燦んなる浮虛無實の法は、殆んと將さに跡を滅せんとす、必ず其純粹精實なる者に非ざれば衰敗を補ふ能はず、今此唯心の如きは其尤も純實なる者なり、然れども、之を宗とする者と雖も、砂石を混ぜざるを保ちがたし、夫れ此唯心の理は前きに略演する如く、万物万法は皆緣因相依て成ずる所の者なるが故に之を依他起生と名く、而して諸法は人々の所見思想に隨て變ずること鬼蛇と杭繩との如し、是唯不動物に於て然るに非ず、人類に於ては思想計度の轉變する又殊に甚だし、醫叟の

舜を殺さんと量り、提婆の釋尊を弑せんと欲するが如き其邪計の最も顯著にして見やすき者なり、之を偏計所執性と名く、抑も万法の紛紜たる毫釐の差違に至ては眞理を盡し難しと云へし、然れども千差万種の法は、一心の思想所見より變化するとを了ぜば、万法は氷消して一身の實體に飯し、彼の思想情識の妄計偏執を脱すれば、眞情の理性無爲の心體、獨耀顯赫なるを圓成實性と名く、其無爲眞實の地は、一切の苦惱を離れ、常住安樂なるのみ、其此に至るの方法千差にして階序の大略四あり、曰信(十信)曰解、曰行(三賢)曰證、地上是なり、此四位深義あるが如しと雖も、多くは宿習に係る者にして、強て之を安排するに非ず、何れにも其無爲妙樂界に至るを我が教の結果となし、諸宗の俱に期する所なり、(佛仙會雜誌四)

(二) 偶像說

耶蘇新教を奉ずる者、皆偶像を拜するを禁ず、予曾て其徒と話す、頻りに佛教の徒木石等人造の偶像を奉ずるを嘲る、予問て曰く、西國の人圖畫を愛するや、答曰、西國の圖畫を愛重する殊に甚し、其絕技神品を購ふに至ては、千万金を以てす、予曰く、圖畫は丹青の所成にして、固より人畜に活動なく、山に草木の榮枯なく、河に水流魚躍なし、之を愛するは何の故ぞ、曰、人畜山河皆其眞に逼るを愛する也と、予曰く、山は樹石に非ず、河は水波なしと雖も、其の能く似たる者は愛重するに足れり、所謂其人を愛しては其屋上の鴉に及び、之を憎んでは其影跡をも厭ふべし、今其君父を愛重する、或は其言を寫し、或は其容を摸す、皆其の想像を起し愛情を表する所以なり、故に其教を奉ずる者教祖の肖像を木石圖畫に寫し以て追慕想見す、皆愛重の至りなり、亦彼の圖畫を愛する者、豈其圖畫を以て眞實とせんや、是其情想を見聞に寓するに過ぎず、故に山河は樹石水波の所成に非れども、精妙の圖畫を見るときは山に岑崟幽邃の趣きあり、水に波浪激灩の景あり、人をして雨奇晴好の情を生ぜしむ、其高德名望の人を畫くや、見る者をして欽敬尊重の心を起さしむ、然らば則ち、東洲の教者偶像を以て眞實とするに非ず、但我が信念敬情を寓するに過ぎず、豈偶像を拜する者皆悉く愚陋と謂て可ならんや、(佛仙會雜誌)

(三) 修行の要旨

第壹級　講演部

夫大機用の物ありと雖も、之を用ゆるの方法に熟せざれば恰かも無用物の如きあり、苟くも其方法を得ば其用あげて盡すべからず、之を踏ふるに電器汽船の如き其大用鬼神の如き物と雖も、吾人をして之を用ゐしめば徒に其用を爲さゞるのみに非ず、遂に其器械をも破毀し、至重なる人命をも失亡するに至るや必然のみ、蓋し、中世以來佛法を以て無用物となし、謊誕無實の妄法となし、社會人民を害する者となし、黄吻の書生沒知見の俗士も之を口にして止まざるに至る、之是を用ゆるの方法を知らず、之を司る者(諸宗の教徒)唯其一隅を執拗し、其實際要旨に達せず、故に其大用隠れて顯れざるのみに非ず、遂に此毀謗を速くに至れり、今牟尼氏の語に因て其方法順序を述ぶべし、苟くも之を用ゐることを解すれば、豈其大機大用電器汽船の類にして已まんや、

牟尼氏曰、(涅槃經)修習戒者、爲身寂靜、修習三昧者、爲心寂靜、修習智慧者、爲壞疑心、壞疑心者、爲修習道、修習道者、爲見佛性、見佛性者、爲得阿耨菩提、得菩提者、爲得無上大涅槃、故得大涅槃者、爲斷一切衆生生死一切煩惱一切諸有一切諸諦故、斷於生死乃至斷諦、爲得常樂我淨、故(爲の字皆去聲)此一段の文を熟察觀修し、其要旨に達せば其至妙

の機用天地を毫端に藏すべく、一口に大海を呑盡すべく、其至樂の境界五大洲に帝王たるも未だ一分を喩ふるに足らず、今此に山野の人あり、之に示すに一擔の器電氣器械)一隻の船を以てし、之に語て曰はん、此の器以て坐らにして山海萬里の外に音信を通ずべく、此器以て萬噸至重の物を載せて滄溟に横行し、至遠の國土に運輸すべしと聞かば必ず恠んで謊誕となし騙詐となすべし、而して其實用をなすを見るに及んで、初めて其言の欺かざるを信じ、且つ初めて其器を製する人の非凡の智識に驚愕すべし、今牟尼氏戒定等の方法、能く人心を運輸し、常樂等の妙境に到らしむ、苟くも其方法を實用せず、其大機用を發するを驗知せざれば、其之を怪んで謊誕となすも、亦宜ならずや、然れども其方法に熟せず、其要旨を得ざれば亦無用の贅法たるを免れず、是故に今其大機用を發すべき方法を述ぶべき、其實際に達するに至ては其人に存するのみ、

修習戒者、爲身寂靜、(以下九雙の句あり總て上句を原因とし、下句を結果とす、戒とは人の爲す可らざることを制して爲さざらしむることとなり、之を爲すあれば已れを毀り人を害し、風俗を亂り禽獸と擇ぶことなきに至る、而して其之を戒め之を禁

ずるは、身心をして寂靜寛裕ならしめんを欲すればなり、寂靜とは徒らに靜坐寂默せよと云ふにはあらず、世俗情欲の境に奔馳沒溺せざるの謂なり、凡そ人間爲す所あらんと欲するもの、獨り佛氏のみならず、皆其飲食を菲ふし情欲を制せざれば一事をも成すこと能はず、必すしも之を束縛し、之を屈曲し、囚人獄徒の如く然らしむるにはあらず、是故に一分戒、二分戒、乃至滿分戒等ありて、其人の意樂に隨て之を制するのみ、然るに世の戒を持すると稱するもの、多くは己れの持戒を以て他人の非法を誹毀し、持戒を以て其身を尊大にし、持戒を以て他人を侮慢するに至る、是皆持戒の本色にあらず、經に言はずや、淨戒の相をも取らす、亦邪念の心もなし、之を清淨戒と名くと、又持戒を以て佛法を求め、其報を掠取せんと欲し、又持戒を以て欲利を博取せんと欲す、之を戒禁取見と名け、又戒盜見とも名くる一種の邪見なり、抑も、戒は情欲の惡境に沉溺するを豫防する所以にして、特に佛氏のみならず、世の極刑重罪に陷る者、情欲の放恣より生ぜざるものなし、況んや、放逸暴戾にして至道を得るの理あらんや、是故に五戒十戒乃至三千八萬等の目ありと雖も、其要旨に達せば其細目の如きは宜きに隨て可なり、經曰(瓔珞本業)戒は形の非を除くと、又古人曰、一戒を持せず萬戒を犯さずと、其要旨を得たりと云ふべし、

修習三昧(爲心寂靜)とは三昧亦三摩耶三摩地禪那等の目あり、大同小異なり、其要旨は心想を一處に制し、散亂浮動の情念を靜整安寂ならしむ、故に靜慮と稱す、(禪那の義)凡そ一事を工夫し一業を精ふせんと欲する者は、必ず寂寞の地に住し、靜思深慮せざれば其事業を審明する能はず、彼の歐州のニュートンワットの如き、畢生の智力を盡し殆ど人事交際を絶するに至て能く一事を發明せしに非ずや、況や萬法の本源たる心法の實際に達せんと欲するもの、豈に散亂浮動の念慮を以て得べけんや、故に亂想妄動を止め、靜念寂思以て諸法の實體を究了せんと欲す、故に三昧の修習するものは心の寂靜ならんが爲めにすと云ふ、然るに三昧を修し、禪定を修習する者、徒らに跏趺坐の形狀を習ひ、坐禪の容止を認め、身を卒ふるまて妄亂掉舉の情念を制御する能はず、恰かも蛇を竹筒に入るゝが如く、火を灰中に埋むるが如く、遂に蜿蛇人を嚙み、熾然玉石を焚くの災害を免るゝ能はず豈之を三昧を修習する者と稱するを得んや、

修習智慧(爲斷疑心)(以上六雙の文皆上句を原因となし、順次に下句に及、終に常樂

等の結果に至る、故に戒定慧を以て總原因となし、壞疑以下を總結果となす、唯深淺あるのみ、故に經に曰く、戒を持するは定を得んが爲め、定を修するは智慧を發せんが爲なりと、知るべし智慧は萬法の大原因なることを、夫れ智は動物固有の靈性にして、蜘蛛の網羅を張り、蜂蟻の巣窠を構へ、鳥の雲外に翱翔し、魚の深淵に游泳するが如き、其一事を以て之を觀れば人智の及ぶ可らざる者の如しと雖も、是皆前業報得の然らしむる所にして責むるに足らず、獨り人類は百事に應じ萬業を成すべき妙智を具足するが故に宇宙間の主宰と稱すべき者とす、然れども上古の人民は未だ水火金石の用ゆべきをも知らず、血食水飲して巣窟に住す、漸次に智識を開擴し、水火を使用して舟車を行り、電雷を捕へ通信の僕役となすに至る、此の時に當て、古聖發明する所の心法の妙體奇用世に顯はれざるのみにあらず、之に加ふるに、謊誕架空の誹譏を以てす、豈嘆惜に堪へざらんや、今其心法の妙體を蔽塞して闇昏恐迷ならしむるものを疑心と云ふ、疑心とは癡情矇憧として決了ならず、事に觸れ場に臨んで實理に達する能はざるなり、若し夫れ疑心の根蔕を脱却し、實法を發顯するを得ば、到る處に自在を得、古人の所謂指を案ずれば海印光りを放ち、十方無碍の大光明と稱するも誇言にあらざるなり、昔者學人あり、古德に問ふて曰く、如何なるをか道と云べき、古德答て曰く、平常心是道なり、又問ふ其道は趣向して到るべきや、德答ふ、向はんとすれば、即ち背く、又問ふ向はずんばいかてか道と云ふことを知るべきや、德答ふ道は知にもあらず、不知にもあらず、知は皆亂想妄感、不知は闇鈍無記、若し直ちに不疑の地に至れば大虛空の廓落たるが如し、豈强て是非の沙汰に及ばんやと、問ふ者此に於て疑心を除き、道趣を了達せりと、此の一段の問答能く牟尼大聖の經意を發明する者と云ふべし、都て世間出世間を問はず、疑惑不明の心より種々の妄情を薫起し、一度轉ずれば貪欲瞋恚の惡念を起し、遂に非分の物を强奪竊盜し、無辜を殺戮傷害するに至る、其原因は必ず不明疑惑の妄情より轉生するものなり、今其實智を以て疑心を破壞して明了廓落たらば、至道常樂の妙果、豈其遠からんや、

(四) 教法者の志操

甚しいかな教法の衰へたる、王公の室に教儀の跡絶し、士君子の流教法を談ずるを耻るに至る、顧ふに是れ教法の衰ふるによらずして宣教の徒其人を得ざるなり、

夫れ教門多種ありといへども、其最も盛大なる者は佛教と耶蘇教とのみ、而して其教祖の大本を繹ぬるに、釋迦氏は其初め王族にして已に太子の位に登り、其教法の爲めにするの切なるや半夜に王宮を遁れ、深山に數年の修學あり、其の酸苦艱辛實に飢寒の支へざるに至る、故に經に曰く、我不愛身命、但惜無上道と、是れ即ち釋氏の教萬世に連綿し、五大洲中最大無比の教法たる所以の基礎なり、耶蘇氏は其始め賤家に生れ、獨一天主の教を唱へ、其國忌に觸るゝを以て卒に十字架上に磔殺せらるゝ然れとも其死に至る迄、毫厘も其節を變ぜず、是其教歐羅巴洲中最盛至旺なる所以の元素なり、教旨に異同ありと雖、其精神に至りては俱に金剛不壞の誠心を以てす、所謂富貴にも淫せられず、貧賤にも移されず、死生も變ずる能はざる者、是其萬世に超出する所以なり、每に憐む、近世教法を唱ふる者多くは權門に匍匐し、官途に趨走し、阿諛辨佞以て宗旨を賣弄し、偶ま一の褒言に遇ひ、一の職俸を得るに及んては揚々然として白俗の相將たるが如く、亦晏平仲の御者に似たり、如此の心操、豈能く大教を扶竪し人天を教導するものならんや、古人曰、古來得道の士同塵の方便なきにあらず、未だ名利の邪念あらずと、信なる哉、大凡そ志操は人身の主なり、才識品行は

之に次くものなり、今の教法者多くは其志し利名に存し、教法の實を失するが如し、蓋し之れあらん、不幸にして之に過はざるか、抑も亦眼孔狹小にして之を見るも知ること能はざるか、（佛仙會雜誌）

（五）印度哲學の諸學と徑庭ある說（明治十七年三月二十日東京大學哲學會の演說）

印度哲學（即ち佛教）の大略に、教・理・行・果の四種を分つ、第一教とは釋迦氏の自證覺智を以て施設する所、其主眼は人々本具の最上智德を發明せしめ、極妙樂地に安住せしむるに在り、經に所謂迷晦すれば即ち無明、發明すれば即ち解脫と是也、第二理とは迷悟苦樂の原因由緣を說く者なり、第三行とは智道覺路の況致、階級次序を談ず、第四果とは心原を覺了し、菩提涅槃等の最上點に至るを結果とす、而して他の哲學・心理の說と其旨を異にする者あり、我朝久しく習慣せるところの儒教の如き、性情の區域を說き、道德の奧義を談ずる主要は情欲を節制するに在り、所謂喜怒哀樂の末だ發せざるを中と謂ふ、發して節にあたるを和と謂ふの類、西洋の哲學家、智情意の三能力を細別研究す、是皆心意の現狀に由て配設する者なり、獨り佛氏の學、心

意の本體に就て觀察伏斷の工夫を下し、之を變改し之を轉化し、終に無漏眞淨の實性を顯現するを主とす、喩へば礦石を分析轉化し、金銀の純性を得るが如し、蓋し佛氏の說は一切動物の心體は(神經等皆無明俱生の妄心にして、所謂從本以來無明に無量無邊の厚薄差別ありと云ふ者)煩悶惱苦の窟宅とす、其惱苦の本原を除くを出離と名け解脫と號す、其解脫の極點に達する者最上學者と名く、(即ち佛)其人の住所を無漏涅槃界と云ひ、其心意を三身四智と名く、其心意の淨穢現狀に區別する者、七十五法、百法、六百六十法等に組細開合の異あるのみ、但近來これを實證する者少なく、名義のみの論說に墮するは遺憾と云ふべし、是故に常樂無爲の法を實證するは此學の結果とす、又因緣應報の說も諸餘の談ぜざる所なり、(同上)

(六) 惑病同源の說 (明治十七年十月五日東京大學文學會講演)

佛敎中世以來、實學眞證の法衰廢し、名義のみを傳へて今日に至れり、宜なる哉、世間に於て空談無實の法となす、余亦善善を盡す者に非れども、精究實驗數十年、稍や其實際を得たり、故に先年惑病同原論を公布す、然るに之を信ずるもの少なし、今や本部に於て之を勸むる者あり、因て其大略を演ぶべし、

夫れ惑とは佛敎通常之を煩惱と云、(煩悶惱苦の義)煩悶は通常貪瞋痴を根本とすれども、是れ其發現の狀貌にして其實體を云ふ者に非ず、經云無明藏より十三煩惱を起し、(我慢貪瞋等七見六着合して十三あり)十三煩惱より一切煩惱を起すと知るべし、一切煩惱の大本は無明なることを、(無明は別に論說あり)無明の實體は頭胸腹の中心に集結する所の蘊質なり、(苦本を苦集諦と名づけ結使と名く、又五衆を陰蔽障蓋するが故に、五陰五蓋等の名あり、)所謂中心とは腦髓心肺胃腸等なり、茲に人あり、財色を貪婪して節度なく、身命を傷亡するも止むこと能はず、其意に任ぜざれば瞋怒暴亂す、强て之を抑制すれば鬱憂惱苦し、飲食を減じ、遂に肺胃等の病を發す、此の如き者佛氏之を煩惱の所爲となし、醫氏之を鬱夏病肺病胃病となす、余を以て之を言へば、其源無明の暴動抑制に由る者なり、故に之を煩惱と云も可なり之を疾病と云も可なり、蓋し人體行住坐臥に健康なるも、心地(頭胸腹の中心)憂悲苦惱の根蔕あるを煩惱と云、更に行住坐臥苦惱に堪へざれば疾病と名く、煩惱は疾病の原因にして疾病は煩惱の結果なり、(共に苦因無明の集結より起る)故に曰、惑病同原苦因一

體なり、但其原體を實究除滅するは、佛教心理學、生理學、醫學等の精研修證すべきの最要とす、（同上）

（七）最要至難（佛仙社の說）

夫れ人の貴賤凡聖を論ぜず、專心注意せざる可らざる者は死生の原理なり、大凡其死に至る、或は外緣に由る者あり、殺傷等是なり、或は內因に由るものあり疾病是なり、其外緣に係る者は見やすし、其內因に出る者は知りがたし、當今醫學、理學、生理學、動物學等の專攻研究して止まざる所なり、而して恐らくは未だ其實際確然たらざるが如し、余之を自己の身心に實驗修證するもの數十年、而して自ら斷言して實地を發明せりとなす者は惑病同原苦因一體の說なり、然れども世人をして堅信篤行せしむる能はず、故に總に信ずるものあれば混々縷述を厭はず、凡そ我が佛仙學は總て實驗眞證を專らとして虛飾空理を用ひず、必ず實際的證すべきの目途ありて而後眞際履行すべし、眞際履行して證驗明確ならざる者は之を廢絕す、（喩へば須彌の說空言無實に歸するが如し）故に佛仙學則は、我が數十年實驗して得たるところの結果なるが故に、毫も空論虛飾を用ひず、抑も學に三科を分つと雖も、其原因は一なり、唯惑に麁細あるが故に證に先後あるのみ、而して三科中、最要至難、先聲未發の大秘訣と稱すべきものは腦脊の接路を斷ずるの一事是なり、余始め竊かに是目途を（安政の初）發してより、今に三十餘年、稍其實際に達するを得たり、此に於て、既往を顧みるに死生の原理は佛教、理學、醫學、生理學等の最要目的とする所にして、未だ其實驗を經ざるものは余が深く怪んで止まざる所なり、蓋し是れ諸學の先哲、豈其學智に乏しからんや、唯其見知の眞際に至らざるに由れり、余之を詳說せんと欲するも深井短綆の思あり、苟くも堅信篤行の人に遇はざれば勞して功なきを恐る、故に今唯最要至難の因緣を提出するのみ、（明治十八年）（同上）

（八）佛教實歸之一（明治十八年一月二十日東京大學哲學會講演）

盡十方無盡法界無邊不可說の中に、生滅去來無量の形像を現ずる者其大原因二あり、一は親和集合の性、一は排拒遠離の性なり、天地日月の大より一極微塵の么麽なるも、此二性に由て始終せられざるものなし、是故に無機の鑛物と雖も、凝聚形を

成し、無情の草木も日光線に遇へば枝葉の方向を替へ、寒溫地を異にすれば花實盛衰を變ず、特に動物に至ては最も甚しきものとす、夫の最上等の人類より、最下の無血族に至るも、其本具親和の性に適すれば之を愛し、之を求め、其排拒の性に觸れば之を惜み之を厭ふ、是動物の心體覺機に具有して習慣を待たざる者なり、其習慣薫陶を經歷して進退變化する者と雖も、必ず其固有の性に原起する者なり、而して一切動物普徧通常の愛求する所の者は快樂なり、惜厭する所の者は苦惱なり、其厭苦求樂の情、類に隨て各異なり、禽獸以下動物の如きは色食睡の三欲を要求し飽足を得て止むのみ、人類に至ては更に利名等無量の愛求あり、上古人智の草昧なる、萬邦殊域の人類無量の思想を生ずるも皆是れ厭苦求樂の通情に原起せざる者なし、就中最勝快樂を永世に求むるの情は人類に於て最も切なりとす、或は天地萬物の原始を求め、或は上天神靈の所在を認め、或は萬物皆神靈ありと想像する等の類、是れ蓋し一切教法の原素なり、近世の哲學家、所謂一切の教法思想より生ずとなす所以なり、然るに最勝快樂を永世に不斷ならしむることは人類の得可らざるを知り、更に思想を轉じ、或は上天冥々の中に在りとなし、或は遙遠邊々の外に在りとなし、或は萬物變化の主宰見聞すべからずとなす、近來哲學家、可知的不可知的の範圍を定め、稍〻思想の測量をなせり、茲に釋迦氏教法の實歸を稽ふるに、是亦厭苦求樂の通情感覺より原起すと雖も其感覺を起すの媒介は五官にして、其苦樂の感覺を起滅するものは內心に在ることを發明し、經中所謂集は(惑體又無明と名く)苦の原因なりと說く、然れども萬邦億兆の思想無量なることを察し、これを總攝して三界と名け、(三界唯心萬法唯識)之を區別して二十五有となす、(上三諸天の最勝樂地より、下阿鼻の極苦に至る)或は十方の淨土を談ずれども、その實歸に至りては(觀無量壽經に)諸佛の正徧智海は心想より生ず、是心作佛是心是佛と說く、當さに知る、三界の相十方淨土の體は、只是一心淨穢苦樂の相なり、由是觀之、諸教の歸所は最勝樂地を上天冥々の中に求め、佛教の歸所は苦樂淨穢を一心の內に求むるものなり、

○佛教實歸之二

苦樂の原因

苦樂の原因を究むるに先だち苦樂の區域を定めざるべからず、而して其區域を

確定すること甚だ難し、何となれば、動物の類億萬無量、各其苦を苦とし其樂を樂とす、是故に蜻蛉の轉丸、蟭螟の一枝、魚の水を宮殿となし、鳥の樹を樓閣となし、蚯蚓の蟄、蜂蝶の舞、皆其得る所に安じ、其安ずる所を樂む、若し此をして地を易へ處を轉ぜしめ、蜻蛉を高樓に上らしめ、蟭螟を海に入れ、魚を花樹に舞はし、蜂蝶を水に遊泳せしめば、其苦死するや立て待つべし、況んや、人類の千思萬慮、涯際極むべからざるに於てをや、先づ人間の苦境に屬するもの、三苦四苦八苦等是なり、然れども是亦人に由て苦とせざる者あり、殊に貧窮困苦の如き、(心地觀經に八苦の一とす)一般通常の苦とする所なれども、顏回の簞食瓢飲、原憲の蓬戸瓦窓、以て晏然快樂なるが如し、又許由の一瓢をも拋ち、拾得の所有物は一の竹筒に限り、豐干は虎を馬車に當つるが如き、固より通常の相場を以て苦樂の境界を定めがたし、蓋し細かに苦樂の實際を究むるに、不適意を苦とし適意を樂とす、不適意の極を憂苦となす、其憂苦の生ずるや大原因あり、經に云く、無明緣行、乃至招集純大苦蘊、と、所謂無明とは經中に苦集聖諦なる者にして、心地に(頭胸腹の中心)集結するが故に集諦と名け、結使と號す、又五濁五蓋等の名あれども其實は一體也、此苦因凡庸は知ること能はず、唯苦因の動搖

に由て苦樂を分つのみ、喩へば財色の二緣、內に伏する所の苦因を動搖すれば必ず貪求の熱情を發し、財色を得ざれば止む能はず、(之を愛取有支と名く)其尤も甚しきに至ては强盜强姦を犯すに至る、是即ち大苦蘊を招集するの大原因は、根本無明念の動搖より發現するものなり、法華經に諸苦所因、貪欲爲本、と談ずる所以なり、是故に佛教は先づ貪情を制するに始まり、大苦本を滅盡するに終る、其苦本を滅盡し了れば心身常に最勝快樂に安住す、之を歡喜園と云ひ、又妙樂世界と稱す、是れ即ち苦樂の原因結果なり、

○佛教實歸之三

善惡分界

諸惡莫作衆善奉行は、特に佛教の通規のみならず人間社界の大道公路なり、然れども其分界の毫末に至ては分別し難きものあり、先づ東洋の舊傳によれば五倫の大道と稱し、所謂父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、これに戻れば暴惡となし、悖逆となす、然るに近世文明と號し、開化と唱ふるに及んで全く君臣の名な

き國あり、諸の共和國是なり、夫婦なき國あり、アフリカの諸方是なり、一夫一婦の國あり、耶蘇教を奉ずる諸國是なり、一夫多妻の國あり、モルモン宗徒及び東洋諸國是なり、一婦多夫の國あり、西藏の如き是なり、且其交際の如きも東洋は其夫妻大賓の如くなるを美德となし、歐米諸國は夫婦は勿論、他の妻女と雖も、握手接吻するを禮式とす、猶其風俗の萬種なる驚くべく怪むべきものあり、其是非善惡を一定すること甚だかたし、然らば則ち果して善惡なきか、情々其本際分界を察するに、善惡は人情國體風俗慣習に基いするが故に、一定の條理を以て之を束縛すべからず、佛教の如きも亦地方に隨て同異あり、西藏の如きは白牛白象を佛の化身となし、これに事ふること父母よりも尊重なりと、亦我邦佛教の諸宗、各其風規を異にし、俄に其善惡を一定しがたし、蓋し書に所謂、爲善不同、同歸于治、爲惡不同、同歸于亂、この語たるや人類世界に公行して、以て善惡の分界となすに足れり、若し夫れ佛教には心者善惡之根源、先制其心、心定意解然後得道(法句經)と是更に善惡の根源、萬法の實歸を分析發揮餘蘊なしと云ふべし。

○佛教實歸之四

惑體辨並緒言

余曾て教學論集編者に、余の諸稿を選擇記採することを諾す、而して同集第拾九篇に余の無明論を載す、蓋し此論や四十年來の持說にして、(弘化四年製今に三十八年)抑も余が惑病同原、苦因一體の說は、佛教諸宗、理學・醫學・生理學・究心諸學の反目する所たり、余更に精究實驗、愈確然として改めず、(實驗明了なるが故に)今又これを再布す、必ずや其謗焰の益熾んなるに至るを知る、又更に惑體辨を製し、佛教實歸の第四と爲す。

余、聞中世日耳曼國に碩學コペルニクス氏あり、初めて地動の說を唱ふ、當時之を信ずるものなし、其徒ガリレヲ氏之を擴張し、遂に羅馬の法廷に囚獄せらるゝに至る、而して氏は剛膽にして屈せず、之を擴張して止まず、今日に至ては全世界上天學の定則となれり、千万中一の不信のものあれば罵詈して愚陋となさゞるなし、此に由て之を觀れば、宇宙間の事一隅を執て定說をなしがたし、是故に上古に至聖大賢

と稱せらるゝ者、後世其說を掃盡するものあり、是れ眞理の實際に適せざる者は不朽を期しがたし、余曾て謂く、佛敎の迷悟を說く緻密周備なれども、其惑體を論ずるに至ては瞭然たらざるが如し、余之を決斷し圖解等を製す、人猶未だ信せず、余喋々して止まざるものあり、抑も亦說あり、經曰、從無明藏起十三煩惱(七見六着)一切煩惱以十三爲本、無明與十三作本と知るべし、無明は一切煩惱の本體なることを、大凡そ人體を分て身心の二となす、又更に細別して身を五根となし(眼耳鼻舌身)心を四種となす(受想行識)是れ九種親和妙合して一の八體をなす、而して身心中無明なる者を求むるに其實體を得がたし、當今身體學・解剖學等の精密なる人身體中一微塵許も名狀すべからざる者なし、然るにこの無明に至ては其實體何物たるやを知る能はず、余精究實驗、遂に其實を得たり、(無明論、心識論、三心圖解等)夫れ無明とは、心身の妙用を昏迷滅無するが故に無明といふ、見・知・思・想皆昏濁惑亂するが故に見惑思惑といふ、(惑見惑思と爲は尤も好)心體の常樂無爲を惱亂苦悶するが故に煩惱と云ひ苦集といふ、眞性を蘊藏蓋覆するが故に蘊蓋といふ、是の如く種々の名義あれども、其惑體は一なり、其惑體を脫するを解脫と云ひ涅槃と云ひ、最勝法と云ひ極妙樂と云、是皆心體常樂の異稱なり、但之を脫するに遲速緩急の別あり、是佛敎中敎理行果の多端なる所以也、今其惑體の明瞭ならざる原由を察するに、或は心身の實體を知らず、單に物體形狀を研究す、余の所見を以てすれば惑本病源未だ實際に至らず、故に余堅强特立、謗焰毀砲を甘受して辭せず、此に於て佛仙論を製し、惑病同原苦因一體の說を擴張す、竊かに彼ガリレオ氏の心操に感ずる所あり、釋迦氏有謂、夫爲道者、譬如一人與万人戰、或格鬪而死、或得勝而還、(四十三章經)と余亦是惑體辨、相識知音を宇宙の外に求むるのみ。

頃來究得佛仙眞、惑病同原一苦因、想像古今幾明晦、誰知劫賊本家親、
佛苗仙樹抽光英、妙樂奇觀獨盛榮、唯我非敢貪異禀、願將至道附群生、
聞說易行淨土敎、往生極樂壽無窮、我家別有難思法、極樂來生方寸中、

○佛敎實歸之五

學問宗敎の極點を論ず

緒言

余十月十日を以て公衆に對し、學問宗教の極點を論じたり、今之を輯綴して佛教實歸の第五となす、

先づ學問は、當今日本にては法、理、醫、文の四大學と定め、西洋にては教、法、理、醫の四大學と定むる國多く、フランスのみ文學を加へて五大學となすといふ、而してこれを細別すれば數十種の學科となる、其大要を總括すれば覆載間億兆の事物を研究し、而して人類の精神智識に其實際を明らかにするを學問といふ、宗教は西洋にては一大學科の高位に居り、諸學と對峙す、彼「バイブル」「コーラン」の如き、皆天主上帝を奉崇歸所となす、然れども後世無神論起り、造化進化の說紛々たり、況んや地質學の如き起りて、天地は決して一時の製造物にあらざることを實驗するに至り、遂に造物主を以て、上古蒙昧の妄計想造に歸せり、東洋にては印度に佛教あり、支那に孔老あり、而して學と教とを兼攝混同せり、故に佛學佛教、孔老の學孔老の教、皆混稱に來れり、孔老の奉崇する所は天命といひ上帝と稱すれども、これを成す無くして成り、之を致す無くして至ると云、人は地に法とり、地は天に法とり、天は道に法とり、道は自然に法とると云へば、確然たる能主宰なきが如し、然るに人智日を遂て開達し、古へは神變なり天怒なりと恐懼敬服せし所の雷公も、今日は電信局の奴隷、匹夫匹婦にも、古人肱に百斤を擧るものは希有の怪力蓋世の奇人となし、獎噲朝比奈の門破りの如きは古來の奇談とせり、然るに今や金城鐵廓も大砲の一發之を粉碎し、汽船の一戟千万馬力を運轉す、又彼天動地動の變革の如き、豈古へ天動し、今は地の運轉するの理あらんや、學問の力を能く天地を轉ぜしめたり、然らば則ち天の天たる所以、地の地たる所以、万事万物の實際を我が精神智識に明了ならしむるは學問の能事也、天主上帝自然因緣を論ぜず、生滅去來すべきものなるか、昇降浮沈すべきものなるか、我精神智識の實際に明了ならしむるは宗教の要務なり、此に由て之を言へば、學問宗教の極點は、精神智識の實際明了に在るのみ、

○佛教實歸之六

（明治十九年五月九日東京學士會院講演）

印度哲學の實驗

印度に古來哲學と稱すべきもの婆羅門等の諸派ありと雖、支那以東に流布せず、今釋迦氏の佛教を云ふ、是れ講演に二の大旨あり、一には釋迦氏の爲めに實驗與

證の正法社會に泯絶し、荒唐無稽の妄法となるを痛惜し、二には一切人類の爲めに、離苦妙樂の最勝道を失亡するを悲歎す、

宇宙間無量の事物、我が五官に觸れ感覺せしむるもの、亦我に在て感覺するもの、之を精究し、其の實理に達するは容易の業にあらざるなり、佛敎は本より感覺者を研究するの敎學にして、其實幽邃玄妙と稱す、先づ佛敎の通則に轉迷開悟といふ、而して迷悟の區域甚だ曖昧たるが如し、今其實際を究んと欲するに其原由を尋ねざるべからず、

第一、釋迦氏滅後、徒に其名義を傳へて其實驗眞證の法を失す。

第二、傳記譯述の徒、濫りに其敎を裝飾せしが爲め種々の名義を設立し、卒に譎誕架空の說に流る、(出定後語等の所破逃れ難きものあり)、

第三、後世の僧徒、虛飾無實、心行反對、公衆を心服せしむるに足らず、

是の如くの原因あるに由て、佛敎の實驗眞證の正理を今日に談ずるの至難なる所以なり、故に余數十年の精究實驗に得る所を略說すべし、

佛敎の本旨に眞如本覺の淸淨心に、無始の惑體無明と、和合するを通常人類の心體とす、是故に善惡相混じ、種々造業浮沈常なし、佛敎は其惑體を解脫するを開悟得道とす、而して其惑體無明なる者を求むるに其實體を得る能はず、(當今解剖學等精密にして人身中一微塵計も名狀す可らざるものなし)宜哉、後世其實驗眞證を得ること能はざる、今茲に其大略を演んと欲す、

夫れ一切動物の生因を無明といふ、蓋し人畜蟲魚各其性質を殊にし、智愚利鈍强弱優劣千差萬別ならず、而して佛氏の學、心體の淳雜を論じ、雜染苦因を解脫し、淳智淨樂を求む、其之を實驗明了ならしむるに、先づ古來經論の大略を演べ、次に實驗眞證の本旨を述ぶべし、

大日經曰、云何菩提、謂如實知自心、又觀無量壽經曰、諸佛正徧智海、從心想生、是二經の文、即ち是佛敎の極點、菩提正徧智なるもの、人々固有の心性を實驗了覺するの謂なり、

首楞嚴經曰、諸修行人、不能得成無上菩提、皆由不知二種根本、錯亂修習、云何二種、一者無生死根本、則汝今者與諸衆生、用攀緣心、爲自性者、二者無始菩提涅槃元淸淨體、則汝今者識精元明、能生諸緣、々所遺者、と是れ釋迦氏唯獨發明の心法にして、一切動物必

ず二種の心識を具するを演ぶ、

- 一心
  - 淳
    - 眞如　淳は一切動物心性
    - 菩提　淨覺の實體即ち眞如等
    - 涅槃
  - 雜
    - 生滅　雜は一切動物無明
    - 無明　雜染の現象即ち生滅等
    - 煩惱

又云、去泥純水、名爲永斷根本無明、と是れ同經に清淨の心體を清水に喩へ、雜然染煩惱の心相を濁水に喩へ、無明は泥の如く、清淨心體を渾濁するの原因に喩へたり、然らば無明なる者を探究して、之を除渾せざるべからず、

瓔珞經曰、從無明藏、起十三煩惱及一切煩惱、と又云、凡夫善心中無不善、何況無相心中而有無明、と是れ皆無明を以て一切煩惱の本源となせり、而して其無明なるもの知るべからざる時は、佛敎を誕誕架空の妄法となするも亦逃るべからざるべし、

涅槃經曰、定慧等學、明見佛性、と定慧は今の坐禪觀法を云ふ、又起信論に止觀俱行と

云ふ、是に種々の名あり、曰、舍摩他毘婆舍那三昧禪那般若等、約していはゞ、佛敎斷惑の方法は皆定慧に攝すべし、

遂磨云、直指人心見性成佛と、是れ直に人々本具の心性を徹見するを成佛となすの義にして、經に如實知自心明見佛性、と同意なり、而して其人心本性如何が實知徹見すべきや、是れ亦明瞭ならず、或は痴坐暗證終身を誤り、卒に其非を知らざるもの幾許ぞや、是れ皆其根本明了ならざるに由れり、

楞伽經曰、諸外道有四種涅槃、非我所說法、我所說者、妄想識滅、名爲涅槃、と、是前の無明和合の心體を妄想識となす、是亦惑體を知らざれば如何か之を滅すべきや、蓋し佛敎其實を誤り、迷悟の本源を失してより、徒らに空言虛義を論じて其實際の宗主たる轉迷開悟離苦得樂の法、皆有名無實の空談となり、所謂驢鞍橋を誤認して阿爺の下頷となすの類たり、誠に生盲の模象評何日の了期かあらん、

次に實驗眞證の本旨を演べし、

惑體者、黏纏渾濁の流動液體也、惑體蔽腦、謂無明、集結於胸腹、謂煩惱、是實驗にあらざれば知る能はず、眞證にあらざれば解脫する能はざるものにして、所謂心體に俱生

して本性を渾濁纏縛し、而して暗昏痴鈍ならしむるものなり、其渾濁の液體、腦中に滯滯するが故に腦中精神及び十二對の神經、(支那に於て腦氣節となす)皆爲めに痴鈍し、胸腹に及び、煩悶惱苦をなすが故に煩惱と名く、其胸腹に在るものは知り易く、腦中に在るものは悟り難し、知り易きものを麁惑となし、悟り難きものを細惑となす、これ三細六麁の論辨ある所以なり、諸宗及び諸學の先輩も詳說し及ばざる所なり、又更に其麁重の現象を演ずべし、惑病同原、苦因一體、蓋煩惱者、諸病之原因、諸病者、煩惱之結果也、是れ即ち前に擧ぐる所の惑體漸く濃厚に至り、或は偏重單厚等あれば各所に諸病を發す、而して其原因は渾濁の麁細厚薄あるのみ、且惑病同原の說は明治二年を以て廣布し、本朝は無論、歐米へも贈りたれども、爾來愈實驗眞證の工夫更に明瞭確實なるを得たり、唯獨り、彼のガリレオ氏の始めて地動の說を唱起せしの思想を抱けり、今之を詳說するを厭はざれども、立談の盡しがたきを以て更に他日を期せん而耳、

○佛教實歸之七

社會思想の變遷（二月十三日東京學士會院講演）

寄哉、古往今來、盡十方界、無量無邊の事物、治亂成敗、宗教、科學、政態、風俗、是非、得失、唯是一思想の變遷のみ、試みに上古人類の思想を考ふるに、天上に樂國ありと思想し、地下に惡獄ありと思想し、八方に勝妙の淨土ありと思想し、又蟲魚草木にも神靈ありと思想せしものゝ如し、(是れ宗教の上古に原起する由緣なり)中世以來稍々思想を轉じて、或は天道人理の區域を論じ、或は造物者の有無天神の存否を談じ、政教各立、諸學分科、一是一非端倪を辨ぜざるに至れり、近世に至り、又更に思想を轉じ總て實驗實理を標準とし、望遠鏡顯微鏡を製造し、天體地儀の實理を發明し、電氣蒸氣の機械を製造するが如きに至ては、從前の事物は多く空見妄想に屬し、大抵夢中の所見に同じきが如し、若し其變遷の一二を擧ぐれば、古へは天體は右旋する者となすも、コペルニカスガリレオ等の出るに及んで地球左轉となり、古へは又雷霆は天怒也、神靈なりとなすも、今は電信局の奴僕となり、又提燈の代理者となる、又近く我邦に於ては乘輿鹵簿の變遷の如き實に驚駭に堪へざるものあり、是に於て科學當今人類の定則たり、或人佛教を排して曰く、佛教中十に八九は上古思想の賸れ殘り、店

晒しの引け物多く、今日文明進化の時に當ては如何に符牒を付け直しても、價値なきものなり、往々改良を企つる者ありと雖も、見るに足るものなしと、余曰く、然らず、(以上余の主義の存ずる所看者亮せよ)始め釋迦氏心性の實理を發明し、眞如佛性、菩提涅槃等の實義を說けども了知のもの少なく、徒らに名義を傳へて今日に至れり、經曰、唯佛與佛乃能究盡諸法實相と、故に佛敎中の實理を求むるは恰も萬石の砂礫を抖擻して、一顆の眞金美玉を收むるが如し、又經曰、諸佛正偏智海心想より生ずと是語たるや、實に佛經中眞金美玉の標榜と稱すべし、然れども心想中の正偏智皆妄想妄見に顚倒せられ、正偏智と稱しがたし、今是れ正偏智を說かんと欲するに先づ人々心身に苦惱の原因あることを知了せざるべからず、小乘に煩惱といひ、大乘に無明といふ、皆苦因の異稱なり、ヲルゴット氏曰、佛敎は苦惱の原因と、之を脫する道とを求むるが爲めたり、と、是れ苦因解脫せざれば正偏智に至りがたし、其之を脫する方法を佛法といひ、之を敎授するを佛敎といひ、之を學習するを佛學といふ、共に苦因を解脫するを以て佛敎の原因結果とす、惜哉、後人解脫の本原を究むる能はず、或は漫に之を裝飾して讒誕に流れ、或は之を心身の外に求むるが如き、其本を失すといふべし、故に余は必ず人を導くに理學・生理學・解剖學等を以て干涉學科と定め、先づ心身の構造原理の大略を明し、次に心性迷悟の體用を詳にし、將に以て千古亡羊の思想を挽廻し、實際眞理の正偏智覺に契當し、極妙樂果の本地に安住せしめんと欲す、恰かも蚊力を以て大山を擔んと欲するの思想あり、余曾て佛敎を研究するに當り、金剛三昧を修習し、胃病肺病を治してより、(肺病の如き此の法を除くの外恐らくは全治の法なし)漸く進て惑病同原、苦因一體、腦脊異體、功用各別等の實際を發明し、其實理を擴張せんと欲し、十餘年來一協會を開き、佛仙會と名く、佛は心性を覺了安樂ならしめ、仙は身體を健全壽康ならしむ、之に由て近來敎科を改正して五科となし、(第一腹惑病、第二胸惑病、第三腦惑病、第四背脊病、第五全身病、)惑病の大本を解脫せしめんと欲す、余曾て謂らく、是れ蓋し人類最利益の發明なりとす、然れども亦余が空見妄想に屬するか、只將來の論定を俟つのみ、(敎學論集)

(九) 學敎の異同佛敎諸敎の異同

(九月廿一日東京大學哲學會講演)

近來學敎の異同を論辨するの說あり、(學藝志林第九十四冊記載加藤博士の所論)

實に當今一大家の論辨、學問教法の針鋒點眼といふも過賛にあらざるべし、然れども佛教の爲めに一二辨ぜざる可らざるものあり、其説に曰く、學問は實驗・索蹟・比較の三法を精密にし、事物の眞理を究明するを學問と云ふ、學問の目的は智にあり、教法の目的は信に止まると、是れ蓋し西洋諸教皆天主上帝を歸所となし、人間の見聞覺知の及ばざる所となせば信に止るといふこと當れり、然れども佛教も之と同じく信に止るとは云がたし、何となれば佛教といひ佛道といひ佛學といひ、皆古來通稱し來れり、而して共に釋迦氏を教祖とす、(當今十三宗)且佛氏の經論に信・解・行・證の次序あり、信を初級となし、證を終位となす、(信を假名と云名字と云未だ眞の佛者と云がたし)故に能入の門と云道の源と云、初中後皆一心を出てず、西洋諸教の見聞覺知の外に天主上帝を求むるが如きにあらず、且佛教中戒・定・慧の三學あり、教・理・行・果の四法あり、然らば則ち佛學と云佛教と云皆當れり、況んや佛氏の最上結果を究竟覺と云、無上智と云、佛智見と云、決して見聞覺知の外に在る者にあらず、然れども後世の佛氏、荒唐亡羊歸着なく實驗なく、古へを貴び今を卑み、漫に言を高遠に託して、名利を求むるに汲々たるの諸流に至ては又之を何とか謂はんや、(教學論集)

(一〇)不思議界

不思議界は無量大自在靈妙神智王の遊園なり、神智王は眼横鼻直、戴天踏地國の最上天主なり、其遊園は始め通常賤貧凡聖雜沓の共有地たり、後ち靈妙神智王其草莽を芟除し、二生四魔の惡賊を誅伐し、五官の混亂を鎮靜し、一切の塵垢を淨除し、金剛を以て基礎となし、摩尼寶珠を以て大樓閣を建設して妙觀殿と名く、是殿閣の美麗勝絶なる、此土最上無比なる神智王の無量の神變大自在なる言論思慮の及ぶ所に非す、故にこれを不思議世界と名く、此土の不思議なる大小長短なく、自他遠近なく、今古生滅なし、竊かに其大略を演んに、神智王の妙觀殿裡の歡樂無量、神變自在妙々奇絶なり、固より一切人類動物の遊戯歡樂を禁ぜざれども、大小遠近、自他見愛の牆壁有りて入ること能はざるのみ、唯是神智王或時は妙觀殿裡に於て、十萬八千の天人綵女に命じ、伎樂歌舞天地に振動し、或時は十方國土を一團として、毛孔内に納るゝに、其國土依然として小ならず、其毛孔亦大を加へず、或時は西方十萬億國外の極樂世界を一撮して掌上に置き、阿彌陀如來をして説法せしめ、或時は最上天主全

智全能の造物者をして、日月星辰世界萬物を造作せしむ、神智王此に於て、呵々大笑す、其笑聲億萬の迅雷を同團一發するが如く、忽焉として阿彌陀佛天上に昇り、造物天主西方に往生し、萬物は飛散し、虛空は消盡し、遂に其之く所を知らず、

妙園樓

最妙園樓風景奇、乾坤落盡虛空萎、毛端國土億千萬、閑臥牀頭遲日月、(敎學論集)

(一)印度哲學の要領

印度は上古に文化の聞べある國にて、當今に流行する所の宗敎中、佛敎猶太敎等最も上古に屬す、今佛敎の性質を察するに、釋迦氏自性の實理を發明して佛敎を設け、心性の實體を菩提・涅槃・眞如・佛性と名づけて種々に敎化せられたり、而して釋迦の出世は上古草昧なるが故に人皆奇怪不思議を奉崇し、遂に之を混淆附會したる者にして、眞如・菩提等は決して奇怪不思議なる者に非ず、後世學科分立するに及んで、皆實驗を基礎とするより、概して宗敎として閑置せらるゝに至れり、然とも佛敎は他の宗敎の如く幽冥荒茫信を目的とするにあらず、ヲルコット氏曰く「レリジョン」(宗敎)と云語は佛敎に用ゆると妥當ならず、佛敎は寧ろ「道義哲學」と稱すべきなりと、余は直ちに心性哲學といふを適當とす、本校に於て印度哲學と改むるは尤も當れり、何れにも心身外のものにあらず、而して今其要領を說かんと欲するに、人類對機の大略を說かざるを得ず、先づこれを大別して五種とす、曰く人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩・是なり、此五種の人類に應ずるに要領と稱すべき一偈頌あり、曰く諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎、此中前二句は人類一般の規則にして獨り佛敎に限るべからず、但善惡の境界稍差別あるのみ、(善惡區域の辨今之を略す)自淨其意の一句、實に佛敎の最要たり、而して意には種々の名あり、日本には唯こゝろといふ名のみなり、先つ印度には前五識、(眼耳鼻舌身)第六意識・第七末那識・第八阿賴耶識等の名あり、支那語にては心意精神等と云ひ、西洋心理學にては智・情・意の三大能力を分つ、佛敎は其實體に就て淨穢を分つ、(又迷悟生滅に分つ)而して其大意は、心に雜染混濁の質あるを以て、これを淨盡除滅せざれば心性究竟安樂ならず、(是れ餘の宗敎學科の談せざる所なり)而して之を除滅するに略して三法あり、曰く戒・定・慧是なり、古人喩を設けて曰く、戒は賊を捕ふるが如く、(賊は雜染に喩ふ)定は賊を縛するが如く、慧は賊

を殺すが如しと、蓋し定の一事は佛教の最も緊要とする所なり、裟摩佗・禪那・毘摩裟那・三摩提等是定の異稱なり、今其効驗の大略を演ぶべし、余弱年の時胃肺虚弱にして、食物不消化、呼吸頻喘の症を患ふ、醫藥を用ゆるに全治を得ず、或師の言に隨て禪定を修學して稍健康を得たり、漸く進て惑病同原、腦脊異體等の發明に及べり、禪定の極度を金剛三昧といふ、(堅確鋭利の義)心身の内、(腦胸腹を心地となし其他を身處とす)惑體病原の所在に堅確の定力を用ゆれば、恰かも氷雪に沸湯を澆ぐが如く鎔解消盡痕跡を絶するに至る、余常に謂へらく肺病の如き恐らくは是法に非ざれば全治を得がたし、故に近來教科を分つて五科とす、第一腹惑病、第二胸惑病、第三腦惑病、第四背脊病、第五全身病、是なり、先つ腹部に始まり順次に之を修治し、全身の病原惑本氷消するに至て、始て健全無事の心身といふべし、ヲルコット氏の所謂佛教は苦腦の原因と之を脱する道とを求むるなりと、然れども之を脱盡し得るは容易の業にあらざるのみ、

(一二)動植二原論

第一　本題を述ぶるの原由
第二　本題の主意
第三　本題の結論

第一　此動植物に就ては動植物學ありて之を研究することなれとも、余が演ぶる所は少しく事かはりたる問題なれば、先づ自分が此論を發するに付きて、原由、竝に予が學問の履歴より說き起さんとす、自分の學問は斑猫の如きものにて、最初余は儒學を修め、五六歳の頃父母の膝下にて唐詩選を敎ひられる事など尙記憶に存せり、十八歳の頃まて經典子史の力を極め、當時德川家の學校なる昌平學に入ると十五歳より十八歳までの間なりしが、彼の學校にて書生寮寄宿寮等ありたれとも、余は之に入ると能はず、內塾に入りて勤學せり、十八歳の時父母の見込にて醫を學ぶことゝなり、此頃名高き穀町に住はれたる多岐安叔の門に入り、又港長菴の門に入りて、書生兼居候をなすこと四五年なり、其頃は今の如く醫者は直樣外國の書を飜譯するとなく、飜譯家と醫者とは全く別にて、彼の高野長英等は飜譯家なり、此時は外國の交通もなく、醫學天文學のみは外國の長所なれば之を飜譯することを許さ

れ、其他は嚴しく禁ぜられ、高野長英、渡邊登の如き洋學者が非常の災厄を蒙ることゝなり、余の如きも彼れ此れ心配したりしも青書生のことなれば格別のこともなかりき、醫を學ぶこと五年にして二十二歳の時、故ありて出家し今に至るまで四十九年釋迦流の法を學び、此方には尤も長く掛り居れり、かく前にも演べたるが如く、余の學問はぶち猫の如き學問にて、西洋家もやり、又支那風の孔子流の學問もやり、釋迦流の宗教もやりて見たるが、かの釋迦の宗教にて學問上即ち哲學にかゝはりたることゝ、又余等の仲間に言ふ「有難屋」とて專ら有難ひ事の方をする事とあるが、余は元來學問の方より入りたること故「有難屋」の方は下手なり、夫れ學問には其手段洪遠深邃なるものと、切近着實の方とあり、此は宗教と科學との別るゝ所ろなるが、科學とは大學等に於て教ゆる諸種の學問にて皆切近なるものなり、宗教とは遠大なる方に關する事にして此を圖にて示せば、

- 廣漠遠大
  - 宗教
  - 宇宙起盡
  - 思想觀測
  - 生前死後
- 親近切實
  - 科學
  - 治亂興廢
  - 五官感覺
  - 生病老死

となり一方は何でも廣漠遠大にて分り難きこと、一方は親近切實にて分り易きことなるが、予が學問は此廣漠遠大の宗教と、親近切實の科學と兩方より來ること故丁度三毛猫とも云ふべき者なり、然るに世界の現況を看れば、宗教は追々そげる鹽梅にて、科學は漸々盛大なる樣子にて、既に西村先生も當院に於て、曾て演べられし如く、夫の韓圖が謂ゆる三時期、即ち宗教時代より想像時代に進みそれより實驗哲學の時期となると云へる通り、當今は皆親近切實にて證據確かなるとの外は信ぜられぬ事となり、哲學も實驗にあらざれば出來ぬこととなれり、天文學は隨分廣漠遠大なることを研究すれとも皆確かなる證據あるなり、扨て是より六ケ敷き事となるが、彼の耶蘇教の所謂ゆる天國、佛教の謂ゆる極樂などは實に實驗にかゝらぬ證據のなき廣漠遠大なることなり、困ったる事には望遠鏡が發明になりしことなり、若し天國が實驗にかゝるとすれば望遠鏡にて見れば天主殿が畫寢をして居る所なども見えさうな者なり、余が思ふには佛教中にはかゝる實驗にかゝらぬ廣漠たる者の外、立派なる切實の哲學有りし者が紛失して仕舞ひ、彼の廣漠遠大の者のみ傳はりしなるべし、何れ又極樂から電信の届くこともあるべく、天國から報知の來る

こともあるへければ、廣漠遠大の方は先づ其迄見合と致し、今日は余は佛教に五十年の研究を費し、且つ若き頃ろ西洋學をもやり、自から實驗したることあれば諸先生の熟考をも得たり、それを御話し申さんと思ひ、此動植二原論を述ぶることゝ致したり、

第二　先づ科學の上より始めて說き起さんに、理學の定則に於ては十一種の通有性と、八種の偏有性とを立て、萬物を支配するの大則とするが、佛教に於ては楞嚴經に吸引同業故、有因緣生、竭羅藍、遏蒲曇等、となり、此吸引同業とは科學に理學の謂ゆる引力性にて、萬物の生成するは此引力によることは常に理學者の說く所ろにして、佛教も已に之を說けり、今其他の事は舍きて、最上の動物なる人間に就きて之を說かん、尤も佛教にも天上界と云ふことあり、耶蘇教にも天國を說けとも、之は謂ゆる廣漠遠大の事なれば之をば止め、人間は最上の動物なることは皆認むる所にして、萬物の靈など說くに至る譯故、專ら人間の上に就て云はんとす、即ち人間の本原に就き演ぶべし、其二原論といふは追々陳ぶる所に因て詳かなるべきが、余が考ふる所にては元來佛教には一の紛失物ありと思ふなり、菩提涅槃と云ふことは能く云ふとなれとも、如何なる者が菩提涅槃なりや、又正等又は最上覺等といへとも、其實物を詮議するに甚だ怪むべく、果して眞に菩提涅槃其物が傳れりとは思はれぬ事多し、余は因て佛の入滅と共に、釋迦の發明に係る此菩提涅槃なるものは紛失して傳はらず、其代りに似寄りの法のみ澤山出しなるべしと思ふ、偖て萬物生滅の原因は前にも申す如く、引力性ありて萬物を生じ、又分解性なる者ありて離散するとなるが、此生滅の作用は動物植物に限らず、無機體といへとも之に因りて支配さるゝものなり、演題に入る原因を一寸と此に述ぶれば、通例科學即ち醫學生理學解部學等の言ふ所にては、生物は細胞とて卵の樣な物より成り、動物の原質と植物の原質とは異なりといへり、凡そ動物植物礦物といへば萬物皆之に包含して、天地の廣きも此三つに皈する事なるが、奇なる事には其中には半動半植の者ありて、珊瑚の如き動物とも見え植物とも見ゆる者あり、或は冬は蟲となりて夏草に變ずる、又春夏は草にして秋其葉枯れ冬其根が變じて蟲となるものなり、地生羊とて草にして羊兒の如く、其味も羊に似たりと云ふ者などありて實に混亂なれとも、通例は動植の區別は判然して、動物とは自身自から其思ふまゝに動作することを得るもの

を云ふ、然るに世界の廣き萬物の多き種々雜多にして、動植に入れぬ者も出來る事なり、此動植物の原に就て佛敎中にあるとを自分が發明せんと思ふ故、之を述べて諸君の御爲めにもなり、諸先生の熟考を得たく思ふ、若し此が當らざれば御叱を蒙るまで、當れば實に不朽の名譽を得べき者也、先動物原に就て云はゞ、動物は佛敎の言ふ所にては暖・命・識の三つより成るとあり、此三つは何れも同じ元素より出づる者にて、皆溫素が其中にありて動作をなし、此三つの相續する間は人間の命もある譯なり、科學の方にても人間の熱度は夏冬共に變りなく、華氏の九十六度なり、之を血溫といへり、此溫素の働きにて身體の生活運動も出來るなり、此處に一寸言ふべきことあり、支那は元來文化の早き國にて世界中の古國といへば、印度埃及支那と數らるゝ國なるが、支那の學問は中絶せんと見ゆ、今に至りて東洋の學問は古を尊び今を卑むの風ありとて、洋學者などが玄翁鎚を振ふて打付ける譯なり、支那にては孔子以後に聖人なし、佛敎にては釋迦の後に佛なしなど云ふは尤も鐵鎚の當る處なりと思はる、余は少く此風に反して自から研究する所あり、二十年前腦脊異體惑病同原、の事を發明し、西洋にも之を送りたれとも、地獄に遣りたる便りの如く一向返事もなし、元來此事は生理學醫學には反對する所もあれば諸先生の熟考を請はんとす、夫れ余の考へにては人間は植物原と動物原との二原あるべし、日本は文化猶ほ若き故に頭腦に精神知覺あることは多くは未だ知ざる者あるが、余は此を承認す、此を云へば佛敎中の者は外道として之を擯斥するならん、然れとも今日に至りては人往々心勞する時に當り腦漿を痛む、或は腦髓を費す等の語を爲すに至りしは追々西洋の開化の入り來りし効驗にて、佛敎者も古は之を惡く言ひし今は「つきあひ」にかゝる語を用ゐるとゝなれり、此事は佛敎中にも證據あり、即ち涅槃經には心王處中云々の語見へたり、支那には素問が靈樞かに心は心臟の中にありと云ふ意あり、其故心の字と心臟の心字とは同一なり、支那流の醫者は百中の九十九迄は皆此說を取れり、今は斷じて精神が腦中にありと云へとも醫學上とも反對の旣あれば、先づ腦脊異體惑病同原の事を述ぶべし、此れ實に余が全力を盡して辨ずる所なれば諸君の注意して聽かれんことを願ふなり、彼の植物の本原なる者は草木に限らず、植物にも蕃薯の如く到る所に根を生じ各自に生を營む者あり、動物にても蜈蚣の如く數十肢を生ずる者ありて甚だ混雜なり、頭に腦髓ありて肢體を下に

向て發生し、植物は根を下に有して上に枝葉を發す、動物は肢體を傷くるも大害なきも腦を傷くれば死を致すが如く、植物は枝葉を斫るも生育を妨げざるに根を斫れば枯るゝなり、植物の根の下に這出づる小根は唯吸收の用を爲すのみ、人間の肢體の如きとは異なり、人間と植物とは構造は斯く類似すれば、人間の體を生育する者は植物原と同樣ならざるべからず、然るに科學に於ても此事判然ならず、因て彼の腦脊別體の理を二十年前に研究發明したる事にて之を今日演ぶる所なるが若し間違へば早速あやまる積りなり、古來醫學・生理學・理學・解剖學にも此事なし、或は腦脊別體なりと云へる者あるも、其如何に別體なるかを說ける者は一も之なし、腦は知覺の本原なるとは異論なし、是れ恰かも植物の根の「かぶた」と同樣なり、「しよるぬべる」氏は嘗て脊髓に前後對ありて前後の用を異にすと云へるが、此も甚だ承服し難きなり、一條の脊髓が前後相異ならんとは理に於て有るべからず、故に余は格別なる意見を述べんと欲するが、必ず理學の駁論を招くべし、此に至りては最早や極樂や何かの廣漠遠大なる大話は間に合はざるなり、さて人類の其始めに當り必ず母胎に宿ることは何れの學に於ても判然爭ふべからず、其始めは僅かに形質を爲せるのみにて首身四肢の分ちもなし、是れ蓋し精蟲が卵巢に飛び込みて成る所なりと云へり、三十日にして其狀恰かも牛蛆の如く未だ人獸蟲魚を分たず、三十五日始めて「ヘツノヲ」(臍帶)萌芽を生ず、是れ恰かも植物の芽を生ずると一般なり、四十二日にして口を成し、四十五日にして四肢を生じ、六十日にして手足やゝ全し、九十日にして始めて全形を成し、男女を辨ず、此時胞衣を生ず、胞衣は小兒の胞胎內に在る間養を取る所にして、飲食を用ゐずして能く生育するは全く胞衣よりして母體の滋養を受くるに由る、是れ恰かも植物の葉が發生する時の如し、四月にして內臟機關、並に外部の顏面手足等完全す、七月にして骨節を生ず、然れども此時の骨は皆軟骨にして鼻端の柔軟なるが如き者のみなり、漸くして九月或は十月に至れば母胎を離れて產生するを常とす、人身中最も先きに成るものは心臟にして、心臟とは即ち肺臟の中間にぶらんこして居る蓮花の蕾の逆さにかゝるが如き者を云ふ、是よりは動物植物二原の論に入るべし、夫れ人身の外部は眞先きに臍帶を生じ、內部は心臟を先きに生ず、故に人體の動植二つの根原は必ず此に無かるべからず、植物には種子ありて此より發育するが、凡そ何物に限らず必ず其源因ありて其勢力

を生ずる者にて、人間も既に母胎に托すれば早や六尺の體を成熟すべき原因此に備はるなり、其根原は蓋し子體と母體と兩方に存し、既に生して子は頭より足に至るまて盡く具せり、余が考ふる所にては人間腰部に植物原あるべし、是れ余が實驗に徴して知る所ろなり、

人間の母胎にあるや乳糜を以て滋養とし、乳糜は血より分泌す、血は心臟を中部とし、之よりして身體中を支配することゝ爲り居るが、どうしても心臟が植物の根原とは見做されず、植物原は必ず腰部にあるべし、然らば骨は如何にして生ずるかと云ふに、是れ蓋し母體の血の中に含有し、それより分泌して骨を成すなり、腰部にては稜骨ありて其骨孔の間より血を吸收し、子體の骨を成すことゝなるなり、此事は科學上には少しも見えず、故に佛學の(實證によりて植物原の說を成すなり、眞の佛學なるものは今時說く所の如く曖昧にして、唯高妙にばかり馳するものにはあらざるべし、其間には色々の修行ありて始めて大悟すべきものなるに、今時にはかゝる人は一人もこれなし、故に佛敎をして遂に荒唐無稽の謗を招ねかしめたり、是れ實に佛敎の廢頹する所以なり、余は始めて此荒唐無稽なるを見て數々之を止めんとせしほどなりし、佛敎には菩提涅槃又は無明煩惱等の名稱ある實物を存するとは確かなれとも、さて其前後矛盾するが如きあり、道理に合はぬ如きありて、實に取り止めなき樣見ゆれとも、其全體より通觀すれば雲霧朦朧の中に明體即ち日影を微かに認むるが如きあり、若し水滸傳八犬傳等小說の如き實際あるべからざることを考へて作りし者ならば、終始取止なきにて止むべきも、其中自から光輝を認むるは即ち明體あることを承認するに至るなり、唯其明體たる佛敎中の名物は演劇中にもよくある如き、寶劒の紛失などの如く矢張り紛失して今に至るまて人の知る所とならざりしなり、其名物とは即ち金剛三昧にして、釋迦牟尼佛は金剛三昧を修得して無上正等覺を成したるが、其後に至りては此臭味を誰もわからず、佛敎中僅かに名義を存し實物は既に紛失せるが如し、今余が之を會得したるは恰かも寶物を横から盜み取りしが如く、即ち佛敎名物の泥棒なり、余は此實理を會得し、科學に徴し、之を合せんと思ふ、故にかく動植二原論を演ずることゝなれり、

第三　是よりは此論の効益を述べんとす、余は少時虛弱にして肺より胃にかけ毎に快からず、胸腹常に穩かならずして欝悶し、時々疼痛を起すこともありしが、此が

余をして惑病同原說を發明せしめるの原因とはなりぬ、かくて其後禪學者の坐禪が大に身體に益あることを思ひ付き、少時は刻苦して坐禪をも爲したりしが、遂にかの金剛三昧を發明するに至れり、金剛とは謂ゆるダイヤモンドにして最堅至剛の者なり、三昧とは生死の境を離脫したる境界にして、此にて身心安樂の場合に至り、常住妙樂を得ることゝなるなり、余は此修に於て五ヶ條の說を陳列して、諸先生の熟考に供せんとす、

其一は惑病同體、苦因一原、

其二は腦脊異性、效用各別、にして、當時佛敎は十三宗三十三派あり、僧侶の數は十七萬五千ありと雖も、皆かの廣漠遠大の說を取りて曾て實驗の發明を爲すものは之なし、余は此金剛三昧に就て悟た所ありしが故に科學の關係をも取調べ、殊に醫學にかゝはる事ゆへ、二十年前より佐藤舜海翁等へも推參して此說を述べ、西洋にも此を送りたれども格別贊成をも得ず、醫學に於て病氣と云ふものは、即ち佛敎に於て云ふ惑體にて、以前には惑體同原苦因一體と立てたれども、同原と云ふ語は確實ならざれば、惑病同體苦因一原と改め、又以前には腦脊異體とせしが腦脊異性と改めたり、惑は即ち無明煩惱にして此原因は脊髓中にあり、

其三醫學に病原と稱するものは、之を無明と呼ぶべし、是れ病原にあらず、以上三ヶ條は從前の說明にかゝるものにして、以下の二ヶ條は此度の新發明にかゝる者とす、

其四精水は血腋中より分泌するにあらず、是れ大に今日の醫學と反對するものなり、

其五血液中に神氣を含有す、これはハルクランドも斯る說を持せり、第一より第三までは明治二年の出版にかゝる惑病同原論腦脊異體論二書に詳論せり、精水なるものは精囊に貯へ、種を傳ふるの用に供するものにして、陽部の生殖機既に成熟するに及んで生ずるものなり、白液より分泌するものにあらず、神經の事については脊髓液は粘液にて逆流するものなり、是れ八稜骨より膠性粘液を通ずるにて、此等は神氣あるものとは異にして、毛孔より分泌して復還らず、故に脊髓神經と腦神經とは其性質を異にして之を中絕し得べし、新譯起信論に和合識と云ふことあり、無明性と和合することを云へり、和合物が肺臟心臟に充つれば下流し、足の爪先まで

も盡く及ぶなり、此和合物陰機に至り分泌す、此あとは科學說くところと同じ、八稜骨よりは膠性粘液を分泌し、脊髓を通過し腦神經と和合す、和合ならざれば精水生ぜず、故に十三歲頃までは生ぜざるなり、素問か靈樞かに男は八の數、女は七の數にて成るものにて、男子は生れて八ヶ月にて齒を生じ、八歲にして齒變り、二八十六に歲にて精水通じ、八々六十四歲にて精水盡き、女子は七月にて齒を生じ、七歲にて齒かはり、二七十四歲にて經水通じ、七々四十九歲にて經水停まると云へり、佛敎にも此證あり、壯年の時と雖も斷へず精水を分泌すれば遂に涸渴す、此等も實驗あることなれども猥褻に涉るが故に略して言はず、又血液に神氣ありと云ふことは、凡そ世界は凝流氣の三體ありて、精神は凝流二體とは思はれず氣體に屬すべし、「ハフソン」は腦神經を說て精神の由て生ずる所を腦氣節の作用なりといへり、「ロベルド」腦脊異體を說けども、他の諸大家は皆然らず、脊髓神經は腦神經の末端なりといへり然るに之も確乎たる證據は之なし、解剖學とても生たなりに解剖すること出來ざれば、此體は固より其循行の徑路も明かならず、故に信ずるに足らず、因て余は五ヶ年來研究せし所の佛敎に就て發見せし積りにて、此論を演じ諸君の御熟考を願ふなり、余は佛敎を修するに就て、夫の廣漠遠大の事は御斷りとして談ぜざれども、五尺の身心に直接に當る丈のことは實驗實考する所あれば、かくは述ぶることゝなれり、余は幸に大學に於ても佛敎の講義等致すことゝなり居れば、諸君の爲めにも利益あることを申したくかく長々しく演述し了れり、（明敎新誌）

（一三）人體新說（明治二十四年十二月十三日 學士會講演）

年若き人などは今の世の人年號によりて其價定まれりなど言ひ、天保オヤヂ、文政ヂヾー、文化モーロクなど名を附するなり、然るに余今將さに年モーロクならんとして却て新說を出すと云ふ、怪むべきに似たれども怪しき中又新說のあるあらん乎、

大凡至近にして見難きものあり、眼睫の如き是なり、至親にして知り難きものあり、腸胃の如き是なり、眼に近接すること眼睫の如きなしと雖も、人能く自ら之を認むること能はず、腸胃のこと人の常に能く知る所にして、消化機の部分なれば誰として持たぬものもなけれども、喉元三寸落去れば、胃腸のこと亦自ら確むる能はず、況

んや至親至重事物の本主万法の根原なる人體身心の原理に至ては、古來英哲賢聖の稱ある大學大智群類を傑出するものと雖も一定不易の說なきものは、其道幽邃深遠測度し易からざるもの、あるによらずんばあらざるなり、

蓋し人にありて至親至近なること心に如くはなし、而して自ら知る能はざること既に斯の如し、先刻細川氏の話されたる仁の如きも、人の心中の最高なる一部なり、然るに其解說の定まらざること彼れの如きあり、其原理原體に於て明らめ難きものたる怪むに足らざるなり、余は從來宗敎者なり、壯より佛氏の說を喜び、之を精究すること茲に五十餘年、漸く入れば漸く深く、恰も大海の邊際を知るべからざるに似たり、密かに自ら此心體の原理を明めんと欲し、而して未だ此に達するに及ばざりき、昨年始めて五種の偈を作りて、宗敎の本原を示し、世に廣告するを得るに至れり、曰く佛敎千万卷、今古摸名裁、早晩失其實、群類漫泣岐、然れども其失する所決して我心身の外に存ずるにあらず、首楞嚴經にありては、黃老嘆して二種の根原を知らずといへり、二種の根原とは何ぞや、曰く無始生死根本、曰く無始菩提涅槃元淸淨體即ち是なり、余も五十餘年此理を考究し、今より三年以前漸く之を發見することを得、腦脊異體の論を爲すに至れるなり、

無始生死の根本と、無始菩提涅槃元淸淨の體とは、共に二種の根本なること明なりと雖も、人の腦中前中後腦何れの部分に如何にして存在するかは、今日に於て到底之を悉知するに由なきなり、されど其根本の必然實在すべきは疑を容るべからず、

釋迦指して無始生死の根本といふ、果して何物ぞ、經には之を無明と說く、明を無にするが故に名く、即ち第二の根本元淸淨體をして、其明をくらさしむるもの之を無明といふなり、此の如くにして無明は元淸淨智慧の妙體を覆ひ、從て精神の苦惱を起すに至る、故に無明又之を煩惱と名く、余の幼時、土居大炊頭の祐筆誤て大炊頭を大炊頭と書し、炊の上に一畫を加へたるのみにて、暇となりたるものありき、其暇となりし煩は、唯に我人の精神上に煩を起すのみならず、又引て身體上にも及ぼすべし、之れ余が一代の發明なる惑病同體の說なり、煩惱又の名惑或は之を障とも名くるなり、而して此惑若くは障と名くる所の無明煩惱なるものは、果して何物ぞといふに、今日の佛敎は既に之を失ひたるが故に、到底之を明にすること能はず、既

に根本の無明にして不明なるが故に、其修行の方法も亦終に明なること能はざりしなり、

佛教の他の諸宗教諸學問と異なるの點は、此に最も注意を要する所なり、即ち他の宗教學問にありては、其說く所は凡て說かるゝものありて說くなり、更に之を言へば相手ありて後出て來るものなり、仁といひ義といひ凡て然らざるなし、然るに獨り佛教は相手によらずして、直ちに自己の一心上の探究なり、此に所謂二種根本の如きも、他にありて存在するにはあらず、的然我人心性自身の上實在するなり、去れば其修行の方法も理論の組織も、至て深遠難義にして、彼の釋迦より十二代西天大乘中興の祖馬鳴龍樹の時既に業に其本眞を失ふに至りし所以なり、故に爾來菩提涅槃に關し、無明煩惱に關し、終に確實の傳を絕し、唯名ばかり飢饉歲の雜吸の樣に菜ばかりの佛教となり了りぬ、余の新說と稱するものは、實に此佛教本眞の實理にして、幸に余の發見するを得たる所なり、

余の先年廣告したる一に人類原あり、余は此人類原に關する研究は、五十餘年の久しきに亘るが、漸く此理を發見したるは、明治二十三年にして、此腦脊異體の論これ從來の學說と其理を異にする所なり、醫學者理學者は、未だ決して腦脊異體の說をなしたるものあるなく、實に余の昨年の發明なるか故に、人類原の名を附して世に公言することゝなりしなり、當ると當らざるとは余は之を知るに由なし、唯自らは實理動かすべからずと思ふ、

腦髓より十二對の神經あり、脊髓より三十二對の神經ありて、派出して全身に分布す、腦神經はもと九對或は十對と稱せしが近來十二對なること明かとなりしはこれそ學問の進步によるならん、然れども猶未だ腦脊の異體なることを知るに至らず、彼のジョンスペルといへる大醫は、五十年の間た力を脊髓の研究に致し、神經前後の各一か其作用を異にすることを發明して、名譽を學者社會に博したることあり、此事敬宇先生譯西國立志編に引きたり、大醫を以てして五十年の精究を以て、而して漸く此發明あり、神經系統に關する研究の難きこと知るべし、蓋し世に解剖學あり、然れども解剖は死體のことなり、神經は死體によりて其理を明らむべからず、去ればとて生者の頭は之を斷ち割るべくもあらず、之を知る能はざるも亦理なきにあらざるなり、然れども後世恐るべし、終には如何なる方法によりて、如何

なる發明の起らんも亦知るべからず、若し果して時の至るあらば、余の五十餘年の精神を費やしたる所、又或は其參考に供するに足るあらん乎、是れ余の新說を述ぶる所以なり、

去りながら之を新說と云ふも、實は釋迦の眞法にして、中途にして之を失したるものを、余の再び之を得たる所なり、現時我國に存する佛敎の如きは、則ち之を失したるものゝみにして、十三宗三十三派之を概するに難有やと葬式屋の外、又眞の佛敎を見ざるなり、淺草の觀世音、善光寺の如來、成田不動尊の如きは、有りがたやの主なる者にして、其流行盛なる者なれども、有り難たからぬ者より見れば、之を有り難しと聞くも、其有りがたき者の定まらぬは不思議なといふべし、淨土宗は有難きものは彌陀に限ると云ふ、然れとも法華の有難きは、却て之を念佛無間と罵る、有難やの價の極まらぬ事大率此の如し、余が居の近邊に不動尊の開扉あり、有難やに向て不動尊何故に有りかたきやと問へは、盜賊を防ぐの利益あり、片手に繩を持し片手に劍を提げ、繩を持て盜を捕し、劍を以て之を切ると云ふ、實に去る故に有り難きものにや、然るに他は又曰ふあり、否々不動尊の有難きは是より愈冬となりて寒さも增せは、之をあんかの代りにする利益あればなりと云ふ、何れか眞の有り難きにやほと〳〵評し難し、

然れとも釋迦の印度に降誕せられて說示せらるゝ、所豈に此の如き類ならんや、六百年の古印度にありて、既に其傳を失ひしと、龍樹も自ら知らずと云はれたるに て知べし、されど既に失ひたりと云へば、有り難やの價不定なるが如く、佛敎の佛敎たる所以の相場果して何れにあるや、釋迦の眞意まさか有難や葬式屋にはあらざりしなるべし、余は今實に此理を發顯し、其人生日用の外にあらざる所以を明にせんと欲するなり、列子に曰く楊子の隣人亡羊、既率其黨、又請楊子之豎追之、楊子曰嘻、亡一羊何迫者之衆、隣人曰、多岐路既反、問獲羊乎、曰亡之矣、曰奚亡之、曰岐路之中有岐焉、吾不知所之、所以反也云々と、愈入りて愈深遠なる佛氏の說に對し、終に羊を失ふに至れる無理ならずとは云へ、又悲しからずや、現在我人の身體中の羊を亡ず、余は今進て之を捕へんと欲す、

阿陀那識、此云執持識、又云不可覺知堅住器識、又云不覺不知器世間識、即ち萬物生滅之本源也、此識體知覺を具せず動植一切の形質を成し、勢力極まれは休歇す、植物

は枯死し動物は死亡す、故に之を生滅原と名く、人類に於ては腰骨盤中に起る、即ち人の腰骨盤中(腰骨盤又尻骨盤と譯するあり見苦しけれは斯くは改めつ)空虛の部ありて、生滅の本源此に存す、是れ、梵語の阿陀那識なり、又執持識とも云ふ、古來名ありて人其實物を指したるものあるとなし、これそ所謂煩惱の根本にして、上りて腦に至り、腦髓に凝結す、其凝結せしむるもの、之を無明と云ふなり、而して此物たるや不覺不知器世間識とあるが如く、獨り人若しくは動物のみならず、又植物にも存するなり、其如何にして存するかは又知ると能はずと雖も、根の邊にありて種々の食物を吸取し、幹を造り枝を成し花葉を着け種子を結ぶを見て、此理を知ることを得へし、

獨逸のコッポ氏肺病ノバチルスを發見したりしが、其信否は余之を知らざるも兎に角かゝるものは決して肉眼抔見分くべきものにあらず、阿陀那識又此の如き我人の感覺にて之を識別するに由なしと雖も、人類にありては、腰骨盤中に起り、脊髓を經絡滲徹して腦髓に入る、科學者は脊髓神經を名けて、腦中より下流すとなすも、余は却て腰骨盤より上流すとす、之れ余の所說なり、而して其餘派全身に徧布し、

其昇流して腦に入るものは、緩漫遲鈍にして知覺尤も微弱、腦より下流するもの尤も皆知覺銳敏なり、是腦中神經を和合するによれり、去ればこそ今日迄世皆和合後のことのみを知り、腦より下流するものとなして、其上流する所以を知らざりしなり去れども是大なる誤にして、昇流して腦中に積めば病となり、死を致すの根本とも なるものなりと知るべし、

余の先年來脊髓異體の說を爲し、而して腰骨盤中其原府あるを發見せしは、昨明治廿二年にあり、是れ今日新說と名くる所以なり、何となれは醫學生理學等に於ては、今日に至るまて未だ脊髓昇流の說を爲すものありしを聞ざればなり、而して之れ實に余の佛氏三昧法中より發見する所、後來諸學參考の爲め之を公言す、然れども余の說又未た現實に其證據を出すと能はず、恰も指を靴中に動かすが如く(所謂唯獨自明了餘人所不見)外より之を知ることを得ず、猶余は諸君に其詳察精研あらんことを希望す、さればとて余は指を靴中に動かしてりきむにあらず、余年今や七十三、既に餘年なからんとす、則ち之を出して世に存することを得は、百千年の後又或は之を證明するものなしとなさんや、是れ余の此の辨ある所以なり、

次に阿賴耶識のことを述ぶべし、阿賴耶識、此云和合識、又云、含藏識、人類諸識を總攝含藏する義なり、是識頭腦頂上半規形中に常住し、知覺應動分別念想の主宰にして、動物一切の本性即ち腦神經と云ひ腦髓と云ふもの是なり、精神の腦中に存することと斯の如くにして、三尺の童子尚能く知る所なりと雖も、其如何にして存するかを、亦明ならざる所なりとす、然るに無始已來、阿陀那識と混合俱行するが故に、和合識と名く、無始とは始めの知れぬことなり、例へば人についても我人を知ることは母の胎内に在るときより以來のことにして、其以前は到底知るべからず、是れ無始なり、況んや世界の始際後際の如きは、全く人智の外にあり、故に之を無始無終と云ふ、今阿賴耶識も亦斯の如く、無始爾來阿陀那識と和合して人心を構造す、故に之を三昧と稱す、三昧も亦佛教中途にして之を失し、三昧の何たるは今見るべからず、然れども全くかたなしと云ふべからず、例へば禪家の四宗と分るゝも、皆勉むる所は坐禪なるが如し、此坐禪こそ其かたなりと云ふべけれ、

世には物好きなる人もありて、或は學者に或は書生に、鎌倉に至りて參禪する人多しと聞く、然れともかゝる人も、漸く入れは佛教の大海漸深くして底なきが如し唯此生死の根原元清淨の體と、二種の根原不明なるが爲めに佛教は底なしとはなりしなり、全く二種の根本か兩底だ遥慨と云ふの外あるべからず、然し今にして幸に余此理を知ることを得たり、以爲へらく三昧修證の力、和合の體を解脱すれは菩提涅槃なり、是れ佛氏始終の實際とす、（佛仙會雜誌四）

吾心似秋月　碧潭清皎潔
無物堪比倫　敢我如何說　寒山

第貳編　著述部

(一)　時得抄

時得抄序

余之諸稿、名曰時得集、今抄出切於時事者、梓之曰時得抄、有偈代序、

嘗入宣尼學、螢雖究經史、早悟非至法、因顧爲釋子、盡力南頓禪、偶得安心旨、
憶昔小少時、慷慨期傑士、自憾我何人、永朽山野裡、秉志忘寢餐、却慚屈姚姒、
不若了一心、萬法歸胸襟、天地從改變、世情任浮沈、生死夜與晝、今古晴又
陰、清霄孤杖月、和日閑窓禽、幽意可自掬、免遭佗搜尋、
古賢先聖異中同、千句萬章空裡風、筆硯有時隨意得、任佗爲白又爲紅、

時得抄目次

無明論　弘化丁未撰論二
惑障之本原
原板心識論　安政庚申撰論二心識迷悟之原體
再校心識論　明治己巳撰補原板之遺漏加二心識之精確
老婆新說　文久癸亥撰說二迷悟修證之淺深一
佛仙論
腦脊異體論　明治己巳撰論二腦脊之同異一
惑病同原論　明治己巳撰論二惑病之原同體不二一

右六論一說、總顯佛法之正意、對破謬誕虛妄之謗、

明治二年己巳九月

坦山識

○無明論

本來常寂、全體備足、固無迷悟之實、豈有揀擇之法哉、譬如寒蟾之墜淵、駛驟之遊空也、穿水而網月、執索而繫風、亦癡之已甚也矣、然所以其不能自決了者何也、經論之所詮、以無明爲惑障之本、而所謂無明、惟說暗昏癡疑之迷相、而未見謂其實體者也、經曰、識想住於緣、起四住惑及一切煩惱、而四住地前、更無法起、故名無始無明住地、金剛智知此始起一想有終、而不知其始前、唯佛知始知終、論曰、無始無明爲所起識、非凡夫二乘之所能解、

乃至菩薩究竟地、不能盡知、唯佛究了、是悉以無明爲惑障之源、而不言其實何物、反推諸妙覺之後、豈不亦慊乎、然令其自悟自得之意、亦可以見矣、古人曰無明實性即佛性、可謂稍得其說、且試論之、蓋夫無明之實者、動識之根體也已矣、其始成身心也、隨業緣以凝和、蘊之體根之用、凡聖不二、譬如湖與江河也、在湖名湖水、在江河名江水河水、名相雖殊、水性不二、其爲湖也、有汪洋含潤之德、而及其爲江河也、流蕩波瀾、順之則渡舟楫利、稼穡暴之則流漂田宅、滌蕩山澤、人見其漂蕩之勢、以爲水害不可測矣、然人之於水也、不可以一日闕之、今夫心亦然矣、雖有常寂元明之性德、而意識之相現、則作善作惡、其相雖異、其體非變、且其質流注積結故、滯結身處、發疾病矣、積聚心地、則現惑障矣、是所以其爲迷悟也、猶如飲食之性能養人、聚滯則生害矣、且其靜也、隱乎難測、常潛伏于頭目胷臆之際、其動也難制、遂發妄迷諸惑之相、以何知之、或遇危難諸苦、或發見愛疑慢、又如瞋恚喜豫、驚駭悲哀之切、自察其心地、煩悶惱屈、而不能自在、是即無明之住地也、苟未拔其根、則菩提涅槃、及一切勝妙之法、皆是鬼窟裡之活計耳、若其欲脫之、須工夫參究、工夫之際、不拘行住坐臥、進止動靜、秪向一念起滅之地、攝引張弛、放之視其所適、捉之察其所窮、及斷其源、覺性常住、應用無邊、即是無明之脫也、謂之正覺、又稱大悟、抑是依教立言、若非祖宗

之所要、雖然古人曰、光不透脫、有兩般病、是豈非無明不脫耶、況乎當今邪僞之道熾而難遇正師、我唯欲行車、莫怪推挽之異、又有一條葛藤、曰不關言句伎倆、如何辨正邪、若能於是了達、非聲色之所擬也焉耳、

弘化丁未秋日

心識論凡例

一經論師、空談名義、而無實詣、禪者、癡坐暗證、而不識正定、是佛氏之通患也、今欲救之、故撰此論、

一心識之名義、經論多異同、蓋譯師經論師、各隨其所解、譬如葉公之愛龍、未免或見鐘爲甕、故今不係實驗者、不取之、若其以火爲冷、以氷爲熱、爲以頭屐以脚語、假令雖佛說、孰能信之、然則其說之多端、所以不足必據也、

一心識流布之源支等、經論之所不說、今取捨西洋之說者、以係修證之要道也、其部位源支之說、可取之、至其覺不覺之實體、彼固不知之、豈足謂哉、今非特補佛氏之缺典、復將欲糺理學之錯繆、知我罪我其此而已矣、

一此論雖通動靜萬類專就人機者先急務也、

一注依典故者欲免臆說之譏但至自得之說雖遠衆不得無獨立之辯見者擇之、

一或問經云心不住內外中間今但稱和合于色身何也答經所言者謂心所之圓融緣相、

今論心王之體性所依故經曰使汝輪轉生死復證菩提涅槃唯汝六根更非他物、

○心識論夾注要義

坦山撰幷注

扶倦挑燈草要義、婆情一片未全灰、浮辭非肯釣名利、願以深心供後才、

心識生萬法萬法攝於心識、

入楞伽經曰無始虛僞過習因滅了知外境自心所現首楞嚴經曰諸法所生唯心所現一切因果世界微塵因心成體又曰色身外洎山河虛空大地咸是妙明眞心中之所現物大凡經論中三界唯心萬法唯識等之說不可枚舉、

其爲名義也甚多矣或名心意識知又立覺法智身之義其實一體而已矣、

婆娑論曰一心有三差別過去名意未來名心現在名識顯識論曰阿黎耶識細品意識、

陀那識中品意識常所明意識是麁品意識也攝論曰所知依等爲性仁王經曰初一念金剛終一念於中生不可說識成衆生色心衆生根本色名色蓋心名識蓋想蓋受蓋行蓋當知名義互通實體不別唯識論曰集起名心思量名意了別名識如是三義雖通八識而隨勝顯、

又覺者本覺始覺佛性如來藏等法者法界法性眞如涅槃等智者般若菩提無師智自然智自覺聖智等身者法身報身應身化身十身等華嚴經曰心如工畫師造種々五陰、

又曰能隨染淨緣遂分十法界方今欲詳其實體不拘名義之紛紜故曰其實一體而已矣、

今分之爲三心以攝一切之法曰覺心曰不覺心曰和合心、

十界之依正其體雖一分開之則不出三心有情者三心合成非情者唯不覺也

覺心者靈妙寂照而具覺知分辨應動識智之法其體非生滅而周遍法界其性非一異而有隱顯之相、

四心中堅實心（梵云乾陀耶心）是也此心泥於不覺則受諸染名（即和合心）離障則成諸淨法（識如法眞）等

佛所謂陰入處界皆如來藏妙覺本然徧周法界世間無智惑爲因緣及自然性蓋諸聖明此群生覆此耳、

其於人機也、發源於腦之前髓、支流九對、彌覽全躬、但除毛骨爪齒、（西書云表皮部帶亦無知覺）

今單於人機者、就其要也、發源腦者、覺心種子之源府、在頭腦頂骨之前髓、其支流九對、分派無量彌覽全身、經中稱佛頂金剛法界宮等、密說其意、未見顯說也、蓋經論中、心識性相迷悟修證之說、小大悉備、非異道之所及、而未詳說其所部、是爲缺典耳、西洋之理學、說其所部甚詳（彼書說腦髓製造心識流布全身其說尤精詳）而彼未知迷悟之實體、（四人唯執和合之心相而爲心識之本性未知覺不覺之實體反以眞如佛性爲疏略）故以彼補缺耳、

何謂九對、曰、一對支流入鼻根起嗅覺、二三四對及六對、入眼根起見覺及轉運、五對數支散布頰面、七對入耳根起聞覺、八對數支入胸腹肺胃等、九對入舌根起味覺轉運、若夫至筋肉皮膚、及四肢之末、有覺知轉運之用者、皆此心之支流而已矣、

九對支流（凡稱一對者左右兩條或數條不必一定）西書或爲十對、且彼所論皆和合心耳、又西書曰、五六八九對之支流、至胸腹諸臟及姪器等、是亦難定執、大凡腦中諸對之支末、皆至胸腹及四肢也、

不覺心者、集質造形之心也、其體不具覺知、（無覺知而具集起執持等法故名不覺心）起滅變幻現十界依正之相、華嚴經曰、彼心不常住、無量難思議、顯現一切色、各各不相知、一切世界中、無法而不造、

經中或謂之質多耶、阿陀那、又稱不覺不知不動器世間識、

質多耶、（集起義即是四心之一）阿陀那識（執持發）不覺不知器世間識、（解深密經說之新譯爲二皆是心不可覺知堅住器識）

之異稱也、唯識論曰、以能執持諸法種子、及能執受色根依處、亦能執取結生相續故、（是釋阿陀那義）且隨業緣之熏習、變幻無量顯現十界依正之相矣、

其源亦在後腦及脊腰、而發三十一對支流、集取諸質之精粹、相續形體、

此心之本源、在後腦及脊腰、而腰髓如樹根、脊髓如本幹、頭手如條枝、蓋覺心以頭腦爲根源、以四肢爲枝末、此心以脊腰爲本源、以頭腦四肢爲枝派、其枝派之所起三十一對、（或爲三十對非其質異以三項之一對或屬腦或屬脊也）分派無量纏綿羅織、集造身體、補益闕損、（四書以脊髓爲三腦餘或爲腦髓同體者非也前腦爲覺源後腦及脊腰爲三不覺心源是四人之所未發明也）且男女小大强弱美惡等、隨其業緣而已、

和合心者、念想性慮之心也、（和合有內外二相內相者今之所論外相者與外境相應其相易知故不論及）此心無別體、覺心和合於不覺、而成此心也、蓋不覺心流動而入覺源、則覺心與之和合、譬如豆汁之和於鹽液、而爲豆腐、清水之合於塵土、而成濁水、（以和合染淨言則如今論若以動靜論則如楞伽起信等水風波喻）是故如々之覺性、變而成念慮生滅之心也、

四心中緣慮心（梵三三唯多）是也、此心無自體、而覺心混淆於不覺、成此心、故覺心舉體皆爲生

滅心也、夫不覺心流動而入覺源、細名無明、（龍樹大士曰精動名流、微細之動念也）麁名煩惱、（煩惱惱動而生苦惱故名）（煩惱惱亂之境而起貪愛於惱怖長時煩惱等念即是煩惱之外相也）覺心已與之和合、則細名黎耶末那、麁名意識、即是一切衆生之心相也、問曰、無明之本源、唯佛之境、馬鳴龍樹未說之、今安論之、寧得不謬耶、答曰、今有二意、爲此說、一者當今異道之學熾、而佛祖之正義將滅、（盲修闇鍊之禪、耳食名聲之教及異學之流、不能究佛祖之正義）故依十方諸佛之加被、二者是予精究實驗、發明三心之本體者、實係我日本安政六年己未、乃得無毫釐之疑滯、而流布于人間者、以此論（原板在安政庚申方今明治己巳再校）爲嚆矢、造論之要其唯在斯、豈敢恐毀謗哉、

大凡在儒名心意、西人稱靈魂精神、又經論中有種々名目者、皆此心染淨隨緣之異名、而非有別體、是故仁王經曰、菩薩未成佛、以菩提爲煩惱、菩薩已成佛、以煩惱爲菩提、

在腦名八識、在胸腹名六識七識、（七識起於腦流注而至胸腹）

八識名心、即阿黎耶識、（含藏之義）覺不覺含藏之淵源也、六識名意識、即分別計度之心也、七識名末那識、即思量情想之心也、且經論說心意識之名義、同異不一、今取六七同依之說、又其部位不明顯、故今論定之、且其所依雖異、體性不二、（如無明論湖河之喻）

且夫三心有純有雜、純覺者、眼睛舌根及耳鼻之浮根是也、純不覺者、毛骨爪齒、及草木等是也、餘皆三心之所合成、而和合心消則惑障隨滅矣、覺心離則動類即死矣、不覺心廢則形實從壞矣、若夫佛氏之道、在斷和合心焉耳、

是總論三心結之、大凡三心純雜之相、就入體論其梗概、若欲詳之在、究其源蓋遍身之中、不受不覺之混淆者、眼睛舌根等、若至病老等、則亦不免也、斷和合生滅心者、修證之要道、次下明之、

證契大乘經曰、識體至妙清淨、而爲客塵之所染汚、

識體者、即覺心也、客塵者、不覺流入之內因、及六塵起滅之外緣也、內因斷則外緣自息、（如起信論說）

定慧堅明能斷流入、則煩惱菩提猶如昨夢也耳、

定有金剛定、首楞嚴定等名、（堅強剛猛之義）慧有金剛般若、無分別智等名、（眞空無著勇猛之意）蓋覺源發堅剛猛利之神力、則不覺無明不能俱住俱轉、而和合流入之心消絕矣、乃覺心之體性、宛然顯現、涅槃經曰、定慧等學、明見佛性、古人曰、證此心有遲疾、有即法一念得無心者、（起信論謂三之無念皆謂三和合之心念大凡祖門機關轉換棒喝拂拳等之作用皆驗其實否耳）有至三賢十聖乃得無心者、長短得無心

乃休、更無可修可證、涅槃經曰、我以摩訶般若、徧觀三界有情、一切人法皆究竟無繫縛者、無解脫者、無主無依無煩惱、與虛空等、不平等、非不平等、盡諸動念、思想心息、此語宜究即是和合之心念現行惑障之根蔕 如是法相名大涅槃、眞見此法名爲解脫、凡夫不知名曰無明、法華經曰、如來如實知見三界之相、無有生死若退若出、亦無在世及滅度者、非實非虛、非如非異、不如三界見於三界、豈其得非一切之法、如昨夢之無實也哉、 明治二年己巳仲秋

心識論凡例

一經論師空談名義、而無實詣、禪者癡座暗證、而不知正定、是佛氏之通患也、今欲救之、故撰此論、

一心識之名義、經論有異同、蓋譯師經論師、隨其所解、故今不係實驗者不取之、

一心識流布之源支等、經論之所不說、今取捨西洋之說者、以係修證之要道也、知我罪我、其唯在斯、

一此論雖通動靜萬類、專就人機者、以佗非急務也、

一注必依典故者、欲免臆說之譏也耳、 萬延庚申仲秋

偈頌

一念心明暗、無量劫苦辛、機輪展轉妙、楚庭抱璞人、
身心滅盡了、覺性滿虛空、眞月非來去、影光西又東、
非無聰達人、流弊誤群類、蚊力欲擔山、自歎且自愧、
摸索心源幾萬端、工夫做盡唯知難、頃來偶得截流術、含元殿裡問長安、
人生虛幻質、豈有金石堅、難保圓月滿、安永春花鮮、艱辛貪名利、藥餌索神仙、
紛々稱弘法、渾々謂悟玄、爭似恣飽飯、夠々又便々、閑吟步秋野、冷笑坐春筵、
固懶把黃葉、何堪挾箭弦、不羨眞淨界、一任妄塵纏、

○心識論夾註要義

坦山撰並註

心識之名義甚多、曰心意識、末那、陀那、黎耶、菴摩羅等、蓋依染淨麁細等、異其稱、而名義互通、故今依其實、不拘其名、偈曰、

扶倦挑燈草要義、婆情一片未全灰、

第貳編 著述部

浮辭不肯釣名利、願以深心供後才、

心識有二種、曰覺心、曰不覺心、

此二通十界有情非情、有情具二、非情唯不覺、

覺心者、靈妙寂照、而具無量之性德、體非生滅、而周遍法界、性非一異、而有隱顯之相、

菩提涅槃、妙法眞如、本覺始覺、法身法性、佛智佛性、正徧知如來藏、淸淨心、大圓覺、大圓鏡智第一義心、四德波羅蜜等、皆此心性德之異名也、諸佛明此、群生覆此而已、

其於人機也、發源於腦之前髓、而遍布全躬、

今單於人機論者、就其要也、發源腦者、覺心種子之源府、在頭頂腦骨之前髓、其末遍行、而彌滿全躬、經中稱佛頂、金剛法界宮等、密說其意、未見顯說也、蓋經論心識性相、迷悟修證之說、小大悉備、非異道之可及、而未說其所部、是爲闕典耳、西洋之理學、說心識之所部甚詳矣、彼者既腦髓製造精神、而彼未知迷悟之實體、四人唯見二和合之識相、而爲心識之本體、未知覺不覺之實體、故今以彼補此、耳食之徒、莫異創聞、

不覺心者、起質造形之心也、其體不覺、而含受覺心、起滅變幻、現十界相、華嚴經曰、彼心不常住、無量難思議、顯現一切色、一切世界中、無法而不造、

經所謂阿陀那識是也、此心有三義、曰含受覺心、曰集取諸種、曰執持質形、其體不覺、隨業緣之熏習、而顯現十界依正、生滅無量之相也、

亦發源於後腦、流動聚結、而製造身體、

其於人機也、頂骨之後髓、及脊髓有陀那之種子、彌蔓于全身、製造身體、補益闕損、四人曰發腦及脊髓、製造精神、謬也、且男女大小、强弱美惡等、隨業緣有分際、

流入覺源、則名無明煩惱、與覺心和合、則受諸識名、

陀那流動而入覺源、細名無明、微細之動念、麁名煩惱、煩惱苦之惱、對逆順之境、而起貪愛怒惱、怖畏瞋嫉等念、罔之內煩惱、依煩惱念、證、種種業、謂之外煩惱、覺心與此和合、此有二和合識名、細名黎耶末那、麁名意識、是即一切衆生之心相也、

問曰、無明之本源、唯佛之境、馬鳴龍樹未說之、今妄論之、寧得不謬耶、答曰、今有二義爲、此說、一者、恐佛祖之正義將滅、盲修瞎鍊之禪、耳食名義之教、及學之流、不能究佛祖之正義、故依十方諸佛之加被、二者、是我精究實驗之所發、毫無臆說、造論之要趣、其唯在此、所以不顧毀謗、

證契大乘經曰、識體至妙淸淨、而爲客塵之所染汚、

識體者、覺心之本體也、客染者、陀那流入之內因、及六塵起滅之外緣也、內因斷則外緣自息、

定慧堅明、能斷流入、則煩惱菩提、猶如昨夢也耳、

定有金剛定、首楞嚴定等名、（堅確剛強之義）慧有金剛般若、無分別智等名、（直空無著之義）蓋覺源發堅剛無着之神力、則不覺無明、不能俱住俱轉、而流入和合之心消矣、乃覺心之體性、宛然顯現、涅槃經曰、定慧等學、明見佛性、古人（故槃）曰、證此心有遲疾、有聞法一念得無心者、（起信論即二之無念、皆謂三和合心念、大凡機關轉換、棒喝拂拳之作用、驗其實否耳、）有至三賢十地、乃得無心者、長短得無心、乃休、更無可修可證、法華經曰、如來如實知見三界之相、無有生死若退若出、亦無在世及滅度者、非實非虛、非如非異、不如三界見於三界、豈其得非一切之法、如昨夢之無實也哉、

安政庚申仲春

○老婆新說

夫無明和合之識體者、諸大菩薩未能明了、不覺動起之本源者、一切諸佛未顯說之、（予心識論值學二一隅）故學者往往謬解之、且如禪徒、多以盲修暗證當宗旨、予亦曾向胷臆肚裡工夫、其部之心識皆既坐斷、雖稍脫煩惱之蘊惑、未能免微細生滅之動念智障、又聞西洋之理學、說心源在頭腦之中、予乃放下從前工夫、用力腦裡、其始堅確、而定力難及、種種工夫、稍覺

有動、增勵心力、欲究之、流動變幻、如提汞丸、如逐影響、又胷臆頓起、非常之妄識、或煩悶或鬱結、（此即上部和合識動轉而所起涅槃經所謂先以定動後以智拔者是也）予謂此必誤工夫、又退守胷臆、雖然上部覺有淵源、屢進屢退、遂斷其大本、方知從前之動念煩惱、皆是不覺和合之識相、而非覺心之體性、（覺心如不動）大凡非堅剛猛利之定力、不能斷和合之識相、而其定力、究心源最難、若但斷胷臆肚裡之煩惱、而不究心源、則墮二乘地、（今古禪徒不免此坑）予愍世人之不能信之、究之、故不厭拖泥帶水、婆說紛紜也耳、雖然、尚有向上事、直須問取牛屎馬糞、始得、文久癸亥仲春坦山狂衲書於武國西臺乍住室乍住室藏版

○佛仙論

諸道之最勝謂之菩提、證此謂之佛、群生之至寶謂之命壽、全此謂之仙、仙者護身、佛者治心、蓋夫佛道也者、至大至妙以常住法身爲妙果、而初學之士安得及焉、是故修佛而不得壽則、勞役於死生、而動輙墮醜倫矣、學仙而不知佛則、見愛不脫、終復淪墜矣、故欲究至道而護其壽、謂之佛仙佛仙、之道大要有三、一避愛憎之緣因、二除惑病之本源、三慎養居

之時宜因也者從己從內緣也者從他從外惑本也者忘動念想之心也病原也者濫質之滯結也抑惑病同其原而其狀或異也集於念想者謂之惑本患於身躬者謂之病原其實濫醋也佛者唯斷其惑而其法久絕矣仙者唯延其壽而得其道者希矣今其修證之要特存於此焉養居也者飲食衣被居處動靜適其宜也其得之略有三位曰信曰修曰證非信不傳其法非修不能明之非證莫盡其妙矣若夫死生之源斷而應變無窮唯證者能之、

佛仙學則

第一除集苦之結　即是忘識之積滯於腦脊而起憂悲苦惱者

第二斷惑病之源　即是陀那之和合於覺性而成一切惑病之源者

第三拔無明之根　即是和合之識體蔓延於腦脊而爲生滅之念想者

○腦脊異體論

坦山撰

我佛法の教理に依て人體身心（心腦の義に非す、心識精神の謂也）に於て一大事件を發明せり、尙敢て自ら是とせず以て普く十方の碩學大德に問質告知せんと欲す、夫我佛家の說心

識三種の別あり、一は靈覺淨智の眞心、二は集造執持の心體（即梵語阿陀那識是也、此心體質を集取し、身形を造起し、執持して壞散せさらしむ、四體の所謂生力なる者此に近し）、三は念想思量の情識也（即是心意識又妄心煩惱識等の名あり）此理に依て觀察研究數十年其實體を發明せり、是に於て醫家偏行の書を閲するに（支那古來の學說粗略多し、今西洋人身究理書をいふ）一の大錯あり、所謂頭腦を以て心識神魂の本原となす、確論と謂べし、脊髓を以て腦と同體同用と爲者は（又腦髓支とも末となす）非也、蓋頭腦は靈覺心識の本原にして九對の筋を起し、（解體新書醫範提綱等腦の十對神經と稱す、今此に依る、抑靈竟は質形の見べきなし、故に新論に九對腦氣筋と譯するを好とし、脊髓は津液の質形あり、故に脊髓液と譯して可となすへし、）聞見覺知應動記識の妙用を具す、脊髓は集造執持の心體にして覺知を具せず、（此今古未發の既なるか故に創開の士必す疑惑すへし、予心識論を參照せよ）三十一對の筋液を醸起し、（此亦全體新論に依る）全身を生養補益す、此二種の筋（腦氣筋脊髓液）全身を羅織するが故に分辨しがたきのみ、且腦より起る所の九對の筋は、脊髓液腦中に流入して腦氣に（即ち靈竟智性）和合して起す所なるが故に、佛家に此を和合識と名く（即前に云念想思量の心也）此心識通身に徧行するが故に、唐人の身體に純覺淨智なし、故に佛家に此を觀察學斷じて念想思量の心識滅盡する時は、純覺眞心の體顯現す、其學斷の法は、佛氏の專務なれば、（經論中具に之を明す）之を略す、今唯和合の心體より起る所の病原を論じて確證とす、

熱病、瘧疾、頭痛、勞瘵、癲、痫、脚氣、

夫腦中ゑ流入する所の脊髓液腦氣と和合して諸部に流行して（九對流行の部位、西醫書中に説かず）其廢液身外に泄除して滯碍なきは健康無恙の身體とす（和合の廢液身外に如きのみならず通身に布蔓す、）若通身に滯碍する者一時に發動すれば熱病となり、（醫書に熱病は非常の外腦時處等に由て起ると云へし病緣と云へし病原に非ず、）其勢稍弱なれば瘧疾となり、腦中に滯碍すれば頭痛を起し、胷腹に滯結すれば癪疝となり、肺中に滯壅すれば勞瘵となり、脚部に滯腫するは脚氣と名く、（凡そ喉肺の粘痰、鼻涕の濃厚、又疥癬癤の類、總て痰膿は皆和合心の廢退釀成する者也、西醫の説に痰と膿とを辨別すること、あれども、採がたし、但痰は廢退する者と、膿は腐敗する者との別あるのみ、）是皆同因にして其所部に隨て異相を現する者也、

大凡西洋人體の説、二千年來解剖究理の實驗を以て立する所、予唯佛教内觀の説に依て之を破せんと欲せば恐くば人信しがたからん、故に予又實驗親證數件を擧て効據とす、

予初め定力に由て（定力とは佛法中惑障を斷ずる方法の名也）腹部の心識を斷ずる時（凡そ斷とは知識の本體を斷ずるに非ず、和合心の流行を斷ずる也、所謂無明滅すると雖も、故に動相即ち滅する心體滅に非ずと是也、）頭面胷臆心識の部暴漲溢滿を覺え、胷部の心識を斷ずる時胷腹の部空淨にして頭面の部暴漲し、腦部の心識を斷ずる時頭面胷腹の部皆空淨にして後腦及脊髓液流行の部暴漲を覺ふ、是、一、證、也、

又腦項接續の路を斷ずる時腦胷腹の部念想思量皆空淨す、若脊髓は腦の同體支末ならば九對の部皆暴漲すべし、今之に反す、是、二、證、也、

且夫腦項の接續を斷ずとは精妙如實の觀智と勇猛剛强の定力とに由て、項脊より腦髓に莖延するの筋、脫然として拔出する也、（起信論に一念相應の慧を以て頓に無明根を拔と云者是也）而に脊腰は毫厘も動搖せず、但腦に輸送する所の脊髓液轉して別處に流行するのみ、是即執持の心體は脊腰を根元とし、腦は其支末なると顯然たり、（脊髓は樹根の如く、脊髓は幹の如く、頭手は枝條の如し、但頭腦は覺原あるを以て尊勝とす、）然ども項脊より起り腦中に莖延するの筋一條二條に非ず、故に此を拔出するは一大難事とす、（脊髓液の流入全盡も餘殘あれば和合心を起し、動念惑障を生ず、故に之を拔盡するは大難とす、）善師に逢ざれば種々の心病を發すると多し、若脊髓は腦の支末ならば其接路を斷せば三十一對の部枯渴すべし、而るに其接路斷ずる時脊髓液流行の部、皆煩悶を覺え、後却て滋蔓肥壯を加ふ、是、三、證、也、

大凡佛氏心識の法義至精至妙、而して其部位を詳説せざるは一缺典と謂べし、西

洋の理學內外皆實驗に出、而して心識の一事に於て其本末を誤る、其部位を詳にせざる故に修證に錯謬多し、其本末を誤る故に覺不覺の實體を知らず、豈各一得一失ありと謂ざるを得んや、明治二年己巳之春

○惑病同原論

坦山撰

惑本は唯佛氏之を談ず、病原は醫學の要門とす、所謂惑本とは無明也、予無明心識の二論を參考せよ無明は二惑の本覺不覺和合の念想にして、種々の忘知忘見を靈起するが故に所知障と名づけ、種々の念想煩惱亂して、妄智妄業を作爲するが故に煩惱障と名つく此二障は千障萬惑の根原なるが故に無明を惑本と名づくる也、病原とは身心凝流の二體皮・肉・筋・骨・髮・毛・爪・齒等を凝體とし、血・脉・水液・膿・痰等を流體とす、然れども凝體も本流體の凝結する者也、平和を失すれば皆之を疾病と名く、病學通論云、十全健康を以て眞の無病とせば、今人の如きは悉く病者に屬すべし、故に健康と疾病とは較然たる分界を示すと能はずと、予曰、此說尤好、大凡身心は和合の所成なるが故に過不及偏固あれば皆疾病となす、其過不及甚しからざるを暫く健康となす、然ども世の所謂健康は惑本無明、即是病原を孕胎するを知らず維摩經曰、從癡即無明有愛則我病生ずと、故に惑本の體久きを積は必ず疾病を發す、或は怠惰放恣、或は思念過勞、皆病緣となり、想念凝滯して癩痼癲癇等を發するが如し總て一切の疾病心思情想に關係せざる者なきを以て知るべし、又佛氏斷惑修證の失誤より暗鬱種々の疾病を生ずるとあり、腦脊異體論を參考せよ但世人其實體に昧く、惑病同原を知る能はず、抑古人の說に上醫は未病を療ずと云、稍佛氏修證の理に近し、予故曰、諸病の本原は惑體也、諸惑の本體は無明也、無明は即和合業識の念想也、遺承傳染等の類、偶和合の心體より生ぜざる疾病あれども百中の一二に過ず、是故に佛氏一念の起動を千惑萬病の本原とす、此に觀察學斷の功夫あり、信解行證の階序あり、三乘五乘の分滿あり、若實に無心無念の境界に至らば、無心無念古今錯認多し、百說を以て停へがたし、身心は、猶泡影の起滅するが如く、迷悟修證は夢裡に水火を渡るが如く、萬法は空華の開落に異なるなきのみ、明治二年己巳仲秋

(二) 心性實驗錄

心性實驗錄題辭

物必盛衰あり、動靜彼此の免れがたき所、方今佛氏の學衰運に係る其原二あり、一は其徒の怠慢、二は西學の隆盛、而して西學の我佛を排する者二あり、曰耶教、曰理學夫耶蘇の教は歐米の專ら奉崇する所、我　國教と旨を異にす、理學は實驗精覈にして根據あり、大に畏るべしとす、抑我佛氏の學離苦得樂を要とす、然るに近世佛子往往一粟を滄溟に求め、亡羊を岐途に逐ふが如き者あり、爰に西洋の諸學日に進み月に熾んに、遂に我佛法を以て謊誕無實の妄法となし、彼希臘亞利斯の同類とす、嗚呼彼聚實の說を以て我本據を失するの短を攻む、亦殆んど危哉、予曾て小森某と理論し、後大に進步し、自他の錯謬を發明し、彼理學醫術の佛氏、修證に關係する者を抄撮し、其謬る者は方圈を加へ、其採るべき者は之を揭げ、俱に其所以を辨解取捨し、務て實地明驗の說を擧げ、廣遠空大の理談を省き夫の謊誕無實の舊面目を一洗し、初學の徒に實學切用の道を勸め、護法利人の一助たらんを欲するのみ、

明治六年癸酉四月

○心性實驗錄（又名西學辨解）

坦山撰

人身窮理書（三本利孫蘭度撰　廣瀨元恭譯）云、（一帙）古哲亞利斯氏四元（土水火氣）の論を發せしより後の學者異論を立るも、遂に此四元の範圍を出ること能はず、

辨曰亞利斯は西洋紀元前三百年希臘國の人なり、之を佛書に徵するに馬鳴龍樹前後の人なり、其四元は原質本素の義にして我四大と同じ、釋迦文佛出世之に先たつ六七百載、恐くは佛說の彼に流傳する者か、

又云、（仝帙）然るに近年大に發明する所ありて其學一變す、（其學を名て「プネクマ」學と云ふ氣性學の義なり、所謂氣水土の如きも皆純體の元素に非らすして、他物聚合以て成る、辨曰、佛氏の說一變已後の說に通ぜず、是彼が破斥を免れざる所以なり）原圍氣の如きも是純性の流質に非ず、諸氣相合して以て成る者なり、（辨曰、佛氏の空と稱する者、彼斥て虛空と稱する者多くは心性の空を論ず、彼が所說の空に同じからず、然れども我空とも稱す、然も其實體を論ずれは唯酸素と窒素に成るのみ、水も亦酸素水素の集合に出づ、土は膠土加爾基珪土等を含む蓋古の理學者流多は空理の爲に眩惑せられて其立學の本旨となす、故に其說盡

く妄斷臆想に出づ、其目して元素と爲す者、集合物にして、其獘を免ることを得ず、

辨曰、予此を讀て愕然として額に汗することあり、何者、四大等の說、我經中千古不易の定說となし、今に主張する者彼之を弊と說き、我空と稱する者彼之を分析秤量して四五の氣となし、總て我經論の理、彼が所謂空理臆說の所破に墮す、予曾て小森氏（京師の洋學士宗二と稱す）の論破に由て、稍實學に進みしも之が爲なり、佛氏豈等閑なるべけんや、是今述作の由て起る所以なり、

又云、（紙一五）然るに輓近に至て理學大に闢て、古人未發の元素を發明して以て其數を定む、凡そ元素彼舍密術を以て分析し、終に分つべからざる者五十一に至る、抑今定むる所の五十一元も亦必ず之に止とせんや、天地間物品の衆多なる後世、恐くは今の純を駁と爲し、駁を純とし、其增減するも亦知へからず、

辨曰利氏の先見の如く、六年前（我慶應二年彼千八百六十七年）の說には六十八元素となす、即今に至ては七十餘元素と云、尙且將來の發明する所亦知べからず、然るを我徒依然として中古已來の空義を拘守せば、恐くは彼の所破に墮して救ふべからず遂に掃絕に至らん、是我奮然として萬死を顧みざる所以なり

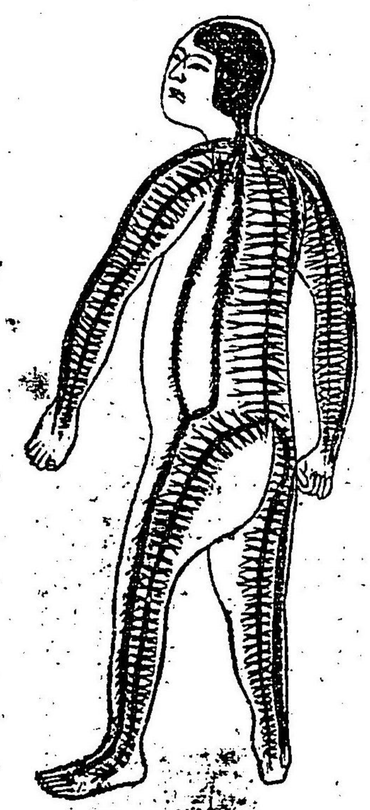
西洋事情（三部十本編、澤諭吉輯、六冊）云、（一二十）世人皆古聖アリストートルの學流に心醉し、附會奇異の神說を唱へて有用の實學に志すものなく、（辨曰、隱に我が神佛を破せんと欲す、讀者惑を審くべし、）千六百年の頃（我慶長の頃）に至るまて其形勢依然たり、（辨曰、當知彼が實學に進歩する未だ三百年に滿たず、彼豈愚なるのみならんや、我豈愚ならんや、豈愚なるのみ）此時に當て、フランシス、バーコン、テルカルテス等の賢哲世に出て、專ら試驗の物理論を唱へて古來の空談を排し、千六百六年には（我慶長十一年）伊多利の學者ガリレオ初て地動の說を立、（辨曰、地動の說確定して千六百年の末、英國の大家ニュートンより周天平地の說廢す、）千六百年の末、英國の大家ニュートン千古不世出の英才を以て日新の世に生れ、齡未だ二十四歲に滿たず大空に行はるゝ引力の理を發明し、（地球の引力は前既に其發明あり）光線の功用を說き、物色の根源を明にし、造化の秘訣一として明了ならざるはなし、其著述プリンシピヤと題せる書は究理學の大本を說く者にて、世の學者皆之を宗とす、これより西洋の學風更に一面目を改め、（辨曰當今の我邦の如し）衆傑輩出してニュートン氏の餘業を繼ぎ、切瑳琢磨今日の盛なるに及べり、千七百年代の初より現今に至るまて、大發明と稱すべき者枚擧するに遑あらず、

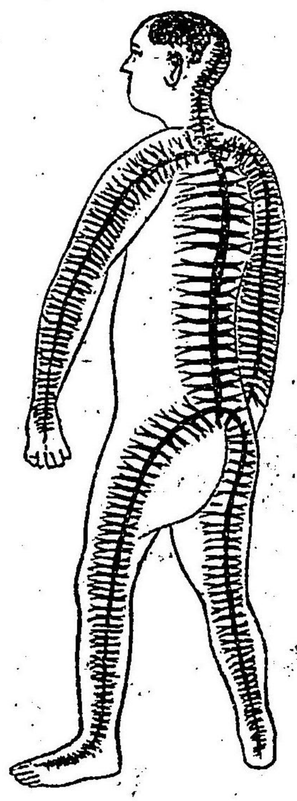
辨曰、我佛氏の學上古は實學眞證にして戲論少し、中古、已來實證の法衰へ、空論虛義の法起り、遂に今日の衰頹に及べり、彼洋學と何ぞ相反する、有志の者、豈省慮せ

三心圖解 不覺心 淨覺心 和合心

○不覺心 以レ朱表二覺性一以墨寫二不覺一後皆倣レ之

以腰髓爲根以脊髓爲本幹生三十一對枝杪培養身形





○和合心

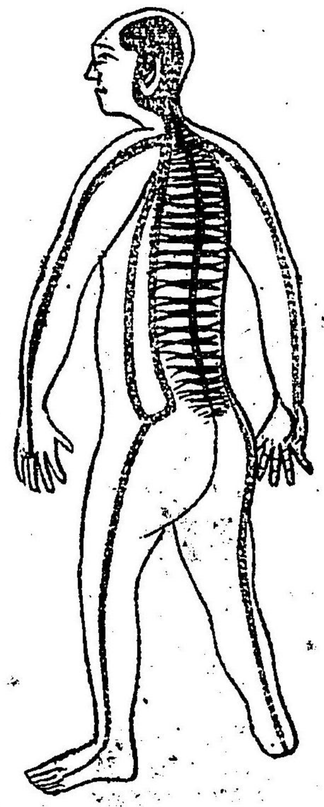
不覺心上流入覺原混淆和合起九對之派流爲諸根之妙用

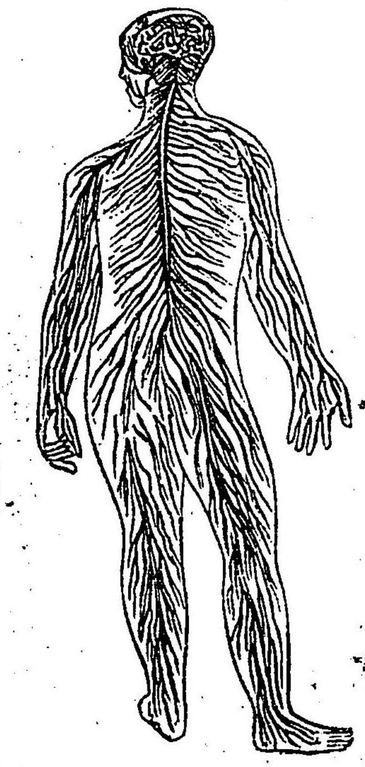
○淨覺心

和合生滅之心識滅盡而眞性清淨寂照無爲非意言之所擬右畧圖其大經至其精微非圖書所盡

附西說週身腦氣筋圖 腦氣筋又曰神經一

腦底生九對脊髓左右共生三十一對腦髓脊髓同一職務主宰覺悟動作以應萬事





ざらんや、豈慨歎せざらんや、豈悉く之を時運に附すべけんや、其責に任ずる者、佛子に非ずして誰ぞや、

全體新論（二本英國合信著）腦爲全體主之論（一十六帋）云（辯曰、初數通身腦氣筋圓離取故別製圖解之）凡人有腦腑之司、各遂其用、以互相濟而養身形、又有交接傳胎成孕之具、以司傳其種類、而更有主宰覺悟動作之司、以應外事者、即腦是也、古人云、人爲萬物之靈、萬事皆發於心、實未知靈之在腦、又云、腦爲元神之府、亦未知腦之功用、蓋人之腦最大較萬類之腦、或相陪襯足推人爲萬物之靈、而其靈則在腦也、

辯曰、涅槃經（序品）云、頭爲殿堂、心王處中、と、予曾て心識論を演ぶる未だ神識腦に在の顯說を得ず、故に佛頂金剛頂、瞥珠額珠等を以て密意の說とす、近來此明文を見る、然るに後人心王は肉團蓮華心臟の中にありと云、（心腦は血液の本府にして心識の堂奧にあらず）又心をむねと訓する等、皆支那已來の傳襲にして佛の本意にあらず、西洋の理學實驗を旨とす、故に能く心王居處の殿堂を覬覦することを得たり、但三心（覺心、不覺心、和合心、）の實體に於て知る能はず、次下之を辯ずるが如し、

又云、（帋）或問、腦即人之靈魂、否、答曰、腦非人之靈魂、乃靈魂所用之機、（辯曰、經に靈魂を心王と說き、頭腦を殿堂に喩ふ）以顯其思慮行爲者耳、初生小孩無腦者死、腦少者痴、腦中或有膿血水漲、或生熱或骨壓則失本性、而朦昧不明、或卒遭跌磕震動其腦、則頭目迷瞶、推而言之、眼無腦氣筋、則不能視、耳無腦氣筋、則不能聽、鼻無腦氣筋、不分香臭、舌無腦氣筋、不知甘苦、遍身手足之能、知痛癢冷熱澁滑、及能記古今應萬事者、非腦之權也、或問、腦在頭顱之內、何能運用遍身乎、答曰、腦在至高、爲一身之主、但其氣筋（色白運傳腦之氣勢者、）分派如繩、如線、如絲者、總名曰腦氣筋、（辯曰、本邦の腦膏神經と稱する者、）纏繞週身、五官百體皮肉筋骨臟腑內外無處不到、（辯曰、但毛骨爪齒等腦氣通ぜず、故に知覺なし、）故全體聽腦之驅使、無不如意、倘手足肉之腦氣筋壞即廢而無用矣、然昆蟲衆類亦必藉腦、始有動覺、惟與人類獸類之腦、不同形、有生于背者、有數腦如珠相連者、百足之蟲節節有腦、故斷其身兩半、皆能走動也、

辨曰、據論正確間然する所なし、然るに佛氏多く心意識の方所實體を失し、遂に謗誕虛妄の謗を得るに至る、悲夫、

又云、（全帋）凡人自初生至二十歲時、腦隨年長、至二十四五長足之年、全腦約重三磅零十一（一磅六錢一兩）自三十至四十歲時、腦亦微長、四十至五十、腦定而不長矣（辯曰、腦の長ずる所以は、骨髓液昇流浸潤して滋養增長する者なり、）五十已後年將老弱、而腦略輕減、女人之腦約少、男人五六兩、西國書有量腦

之法、以九十度爲率、其法用一機矩、將一端自耳横度至鼻孔、又將一端由頷骨上量至額、然後視兩端相去幾何、額之高者約得八十五度、額斜削者約得七十至八十度之間、大抵度愈多則人愈智、度愈少、而人愈愚（辯曰、腦の小大を以て智愚を定むることは決定しがたし、凡そ腦氣盛大にして骨體强壯なる者は男智なり、腦氣微小にして骨體强壯なる者は愚なり、餘は推知すべし、）固度多者則頭骨闊而腦必大、若度少者其腦亦小矣、故智者之腦必大且重、西國有上智之士、死後人剖挖其腦秤之、共重五十七兩、又一智者腦重五十四兩、又一人腦重四十八兩、斯皆腦之奇重者、其人聰明特達巧思絶倫、無出其右、又有痴蠢之人、五十死、腦重一十八兩、又一人四十而死、腦重二十一兩、人固以腦輕重爲愚智、而獸類亦然、猩猩獸之最靈者也、以機矩度之、約得五十六至六十度、幾與庸人相埒、若家犬則三十五度、羚羊得三十度、馬得二十三度、他獸愈愚品遞減下、而鱗介則無度焉、◎人之腦最貴、在至高之位、週圍有骨、包護誠不易受傷、西國醫士、或觀死人之腦、在額上半截、展割其皮肉、後鋸其骨、見腦充滿頭顱之內、全無虛隙、腦外有胞三層、首層即骨內衣堅韌略厚緊粘于骨、次胞雙胞膜中有濕潤、一邊連近骨衣、一邊反包其腦、第三層有薄膜、隨其淺深盤曲之縫、皆到腦紋、與猪羊略相似、左右各有血脈管兩支、分佈（兩枝在前兩枝在後）此管由心而出、運血養腦、以全體之血計之、腦得七分之一、腦雖主使百體、還須賴多血

養之、其管乃傍食喉栱上骨縫、而上將至腦際、蜿蜒而入、故不冲激腦體、腦分左右兩枚、胞膜間之、故左右不至相逼、兩枚正中之下有横紋、筋絲相屬、其下有水房、水房之中有薄膜、間分爲二、反看腦底、則腦之左右皆有三葉、分前中後、而內實相連、腦底有腦氣筋九對、第一對入鼻司聞香臭、第二對入眼球司觀萬物、第三四六對入眼肉司運動、第五對每分前中後三大支、前首支從眼窠上骨孔而出、分佈面上、亦分小支入上牙床散佈上齒、後第三支入下牙床、分佈下齒、從外孔出、分佈下頸、又分一支入舌、此三支俱司覺痛痒、第七對分二支、一支入耳內司聽聲音、一支出耳門底、分佈面部、司運動、此支若壞、則眼口俱歪（右筋壞、口右歪、左則左筋壞、）第八對傍氣喉、而下入心肺與胃司運用、第九對入舌司運動及別五味、○横割腦上小半、見兩邊各有水房、近前兩角形相反向外、近中兩角形曲向下近後、兩角形相對向內、左右房皆有水、故曰水房、○大腦之下帶連小腦、一顆亦分兩枚、其上有堅厚胞膜、與大腦相隔、故無壓逼之虞、直割看之、灰粉色微紅、有紋如扁栢、中有小水房、其重約得大腦七分之二、

辨曰、夫腦は心識覺知之本源、九對筋は其枝派の全身に遍行する所以の者、卽ち妄識苦惱を起し、又菩提涅槃を證する皆此總解に由る、故に佛氏詳にせざる可らず、

且腦の九對、解體新書、醫範提綱等、皆腦の十對神經（後に引く所の書皆腦氣筋を神經と譯す）と爲者、項髓の一對、或は腦に屬し、或は脊に屬するのみ（李遂は腦の十二對となす者は細分を別既するのみ、其實は腦脊腰合して、四十對其體別あるに非ず、神識の器機を論ず、其體用を云にあらず、）

又云（一八十）背脊髓由大小兩腦直生而下爲腦之餘蓋承腦之驅使分派衆腦氣筋之本也、

辨曰、大凡西洋理學醫術の謬誤此より甚しきはなし、抑腦と背とは其體用懸隔す、腦は精神識知の元府にして、九對の腦氣筋、五官の覺知運用の由て起る所にして腦を源とし、百體四支を派流とす、脊腰は脊髓液を釀起し、三十一對の筋を以て全身を滋養す、特に其機關の要は腰脊に於て諸部の精液を吹集し、以て全身の質形を生成補修す、腰脊を根本として頭面四支を枝杪とす、恰も草木の本末の如し、（心識論、腦脊異體論に述るが如し、）

又云（一九十）西國醫士、剖開脊骨、考驗見胞膜三層、膜內有清水、環護脊髓、髓質與腦質同類、比手足骨內之髓、大相逕庭亦謂之髓者、蓋中土無名不得不沿其舊耳、其形如兩柱并立、而中相連前後有直縫、分間內灰色而外色白、自枕骨大孔下垂過頭骨背骨直至腰骨之次節、而上上下略大而中略小（辯曰上下略大にして中略小なる所以は樹木の中幹枝葉少なきの理に同じ、）自頭背骨第三節至第六節、左右分派腦氣筋入手（辯曰腦氣の二字非也、辯に辨ずるが如し、）故髓柱略大、又自背骨第十節至腰骨第一節、亦然、因左右分派腦氣筋入足故也、每柱之旁各有竪紋、間分前後故有柱前柱後之稱、兩柱左右生出腦氣筋三十一對、在頭骨裡、生八對、在背骨裡、生十二對、在腰骨裡、生五對、在尾骨裸、生六對、左右各穿骨孔而出、然每支皆有兩根、長約四分、一根生于柱前、一根生于柱前、二根功用不同、前根主司運動、後根主司覺悟、實一筋而兼二用、凡人百體之能運動、及有覺悟者、是皆腦氣筋所爲、而腦爲之主使也、

辨曰、三所の腦氣圈を加る者、皆脊髓の二字に改めて可也、二根已下亦臆量の說なり、脊髓液は總て滋養運化を司り、腦氣は知覺運動の主なり、然も腦脊の接路斷絕し、通身の妄識除盡するに非ざれば明了なりがたし、

博物新編補遺（三本英國シヤンブル著、日本小幡篤次郎譯、）人體論云（下十六帋）人體の全面に神經と云へる細線ありて之を纏へり、神經は腦髓及脊髓とに通じ、五官の報告の精神に輸し、精神の意思を諸筋に傳ふるの用をなせり、腦髓脊髓及諸神經を合せ稱して神經全系と云ふ、蓋し此三者は明に同一の職務を爲せり

辯曰、三物同一職務といふと前已に辨ずるが如し、而して其誤謬の由て起る所を察するに、唯死屍を解剖して其理を測量し、只腦脊和合の妄識流行の跡を推究し、以て定說となす者也、仰彼が腦脊及神經同一職務となす者、元是集合物にして（腦脊二波の和合物）其器機體用大に異なり、理學者流其本源に達せず、故に熱病等の病原に暗く、（腦脊異體論に辯ずる如）其人命を誤らんを恐る、是予辨ぜざるを得ざる所以なり、

又云（下十六帋）腦髓は腦腔に在る白色にして柔軟なる塊肉なり、其質纖緯狀の者にして夥く血管の具するあり、又腦髓は精神の機なれば重要言ふべからず、故に之を護るに至らざる所なし、腦蓋骨は最も堅質の穹窿にして數骨よりなれり、其啣接の所は犬牙して相合せり、斯く互に啣接するものは萬一此部に傷害あるも、唯一部の害に止て、他部へ波及するの患なからしめんと欲すればなり、又腦髓は主塊の後部の小片と分て二枚となれり、（辯曰、前に云中腦は前腦に振し云なり、）此小片を名て、小腦と云（辯曰、小腦は腦髓汝昇輸して腦氣と和合して成ずる者、故に前腦は神識の和合識の本、原腰は運化質形の根、此を三心の原、小腦は心の本原とす、）小腦は脊髓孔を下る所の長繩と連る、此を長繩の脊髓と云ふ、脊髓は針刺の如き、細小の害を受るも死を來すべし、

辯曰、小腦は脊髓孔を下る所の長繩に連る者、是即脊髓より上り腦に挿入する所の筋にして、脊髓液を腦に輸送する所以のもの、予所謂腦項接續の筋なり、是佛氏修證に由て拔斷すべき者、（腦脊異體論四紙に辨ずる如し、）然れども輙爾なれは病を發す尤も正師に依て學習すべし、是佛氏の惑本（即無明不覺）と稱する者なり、

又云（下十七紙）五官肺臟及胃腑と通ずる神經は腦より出づ、（辯曰所謂肋間對延對の分派）手足を動かす者は脊髓より來れり、

辯曰、此亦認れり、手足を動かす者は腦より通身に遍滿する所の筋肉含有の腦氣神經なり、特に耳根より手に分派し、脊骨に傍て下り、腰より兩脚に至る腦神經あり、

又云、（同紙）又交會神經と唱る別派の神經あり、直に腦及脊髓と連合せず、胸部に在て不隨意筋に動力を與ふる者とす、

辯曰、此說實地明確、予平常論ずる所と闇合せり、而して腦脊に連合せざる者は腦氣筋の二三四六對の餘派、胸部の筋肉に集叢し、（是佛氏の想陰と稱する者、心識論に述るが如し）下て小腹陰器等に至り、精水情慾等を釀起す、佛氏尤も功夫を盡すべき者也、

又云、兩間萬物の感覺は五官を歷て意識機に通ず、

視官、物の方圓黑白を知る所なり、眼球の後方に瞳孔と相向て網膜と唱る網狀の膜ありて之を收む、此膜鏡面の如く萬像を映すの力あり、物の大さは睛球の爲めに減小さるゝ者なり、網膜は展開する神經にして、球後に收聚し神經の常形と爲り腦裡に通ぜり、

耳官、聲音を聽くは、鼓膜と唱る膜上に展開する神經の功用なり、鼓膜は鼓の皮あるが如く、耳竅を横絶する者也、聲音は空氣搖動して鼓膜を撼すより生ず、猶砲を放つとき窓戸之が爲め振搖するが如し、空氣鼓膜を撼せば、神經逐一其感得を腦裡に報告す、又鼓膜を連合する許多の小空竅あり、此空竅は聲音を反響し、神經の脛裡に遞輸する感得を蓄むる者とす、

味官、味を知るは專ら舌上に展開する神經功用なり、舌膜の上皮に無數の小孔あるは、蓋し食物をして直に神經と觸れしめんが爲なり、

鼻官、鼻の功用は專ら鼻孔內の皮裡にある神經に屬す、

觸官、觸官は體の全面に布散する神經に屬す、然れども指端の神經最も無數にして細微なり、蓋し觸覺功用の主機なるが故なり、

辯曰、此條簡にして其義備足す、佛氏五識の參考となすべし、醫範提綱三本字田樣齊撰云、一之二紙腦髓者精神之府、造靈液起神經、以發寤寐動靜運化生養之機、其在脊者爲脊髓、○靈液者、精微之液也、神氣之所資、精妙之所成、出腦及脊之髓、而注射于神經、○神經靈液之道路、白色髓質其幹起于腦及脊之髓、腦者左右二十條、合爲十對、脊者左右六十條、合爲三十對、幹分爲萬支、彌綸周身、以知痛痒寒熱、以辨視聽嗅味、俾百體各致其官能、

辯曰、腦脊の異體、及譯誤等前已に辨ずるが如し、圈中且其細注等も多く謬りあれども、是未だ西學草味の時の述作なれば深く之を責めず、又腦脊共に神經と譯するの當らざること、腦脊異體論に之を辨ずるが如し、

病學通論三木緒方公蛟譯述云、一之十三紙覺機は觸知感覺する所以の機にして、乃ち神經腦髓脊髓の本然固有力なり、故に亦神經力の名あり、蓋神經外物に感ずれば、其感動を腦と筋とに達す、其腦に達するは支末より原本に溯洄して腦髓に屆り、以て痛痒寒熱を知しめ、以て百爾の事理を辨ぜしむ、是を神經識力と謂、所謂識力は精神力を指して云に非ず、精神をして辨識せしむる神經力を云、辯曰精神は神經の淵源、神經は精神の支派、兩物となす可らず、蓋精神は動物の腦髓に含する者にして生力と自ら別あり、故に生力有と雖も精神な

き者あり、植物是なり、動物亦剝列編（ボレイン植學啓原に出）の如きは腦髓なく精神なしと雖も、生力有て長育活動す、人亦痼卒厥睡癖の類に於ては、辨識なくして生活し、手脚の頑麻不遂せる部も精神感動なくして保生し、齒髮爪骨靭帶等は辨識觸覺無と雖も、生生長育して形質を保全す、以て精神と生力と混同す可らざること知べし、

辯曰、確論と云べし、然れども精神と生力と異なるを以て、其異なる所以を知らざる者は、腦脊の體用確乎として別異なるを知らざるに由れり、

又云、一十五帋蔓延對神經等の支別頭胸腹の諸部に於て、互に相聚結し、小節を成者之を神經節と云、其錯綜して網狀を成者、之を神經叢と云、此より更に幾多の神經を分ち、胸腹、の諸臟、諸器內外筋膜等、意識に關涉せざる諸部に瀰蔓す（動問對神經は乃其最幹を成す者なり、）故に此神經は別域を爲て其用を異にし、腦神と交涉せざるなり、（辯曰、是即想陰前に辨ずるが如し、又之を迎化神經と爲すの非なること、後に辨ずるが如し、）然れども所謂運化神經も非常の抵抗を發すれば其區域を過越して腦神に達し、之を辨識せしむるに至る、喩は胃腸の刺衝强ければ疼痛を知覺するが如し、腦神經亦其感動を腦に達すれとも精神を待たず、單に腦髓の抵抗に由て、動力を發するとあり、喩は眼胞の開闔瞳孔の縮張、及痙攣搖搦の諸病に於て見るが如し、

辨曰、腦神經は精神の支派又眼胞の開闔等、神識固有の妙用、精神を待たずと云可らず、

又云、二脊（二紙）腦は神經の根本なるを以て、諸部の運營五官の機用一も之に交感せざる者なく、胃亦肋間對神經の大節叢を成せる部にして運化生養の根本なればなり、是を以て內外諸病多少の害を腦胃腸に及ぼさゞる者幾ど希なり、

辨曰、胃を以て生養の本となすは固より論なし、肋間對の神經叢を以て運化生養の根本となすは謬りなり、是即、（佛氏所謂想陰妄識也、）惑病の根本なり、佛氏或は之を斷じて餘りなきに至る、而して毫も生養を妨ぐるなし、凡そ如此の謬り、皆內觀の工夫なく、腦脊の體用を謬る（腦脊は三心の原なるを知らず、）より起り、遂に賊を認めて子となす、又我佛氏心意識の依所も知らず、識智の本據も辨せず、漫に高遠を談じ、徒に空理をト度し、遂に佛法を以て空談虛義の妄法となさしめ、實際妙樂の道を蔽塞し、大覺至聖を以て兇主妄魁となさしむ、是皆實修眞證の者少きより如此の大錯を起せり、我之を默視するに忍びず、毀謗を畏れず怨嫉を顧みず、以て之を辨解す、且隨て我佛

氏諸宗の諸大德、及理學醫術の諸先生に白す、是人體性命病惑の至要、宜く人我彼此の情執を捨て、人命修證を謬らざらんとを冀ふ、

健全學（六本英國ロベルト著、日本杉田玄端譯、）云（中編八十五紙）脊髓の機能は知覺に關係せず、意識に反背する運動を起すなり、又云、（九十紙）智靈の所在は特に腦の外面淡黑腦にあり、又云、（九十四紙）脊髓は身體の顯著ならざる自己も識ることなき作用を掌る、譬へば呼吸の如し、

辨曰、腦脊別異の說、前人未發の卓見と云べし、惜哉、未た脊髓の機能を知らず、且其異なる所以を辨ぜず、（腦氣は下降し脊髓液は昇流するの理を解せず、）然とも識見已に此に至る、後世必す進歩の日あるべし、抑腦脊の接路を斷じ、病惑の本源を絶するに至ては、恐くば後來其方法を失するに至らん、是余が喋喋して止ざる所以なり、

生理發蒙（十四本和蘭李邁氏撰、阿波島村鼎鼓仲譯、）云、（七之十紙）脊髓は上際の頭蓋内に匿るゝ處を延髓とす、全形は猶圓柱の如く、其始は腦に起り、延髓孔より出てゝ、脊骨内に中實し（辨曰、此句是ならず、前に辨ずるが如し、）漸く尾端に至れば、漸く細く成り、脊髓の全體にも亦前後兩面に微りたる一道の細溝ありて、髓質を左右の半規形に分つと猶大小腦に於るが如し、脊髓も亦腦髓の如く、白髓と淡黑髓より成者なれども、唯脊髓は淡黑髓中に實して、白髓外を形くるの差あり、

辯曰、是條殊に精覈但腦脊の體用別異なることを知らず、夫脊骨中實の淡黑髓腦に上流して、外圍に布蔓し、其白質純粹なる者腦中に滲入し、腦氣と和合し、又更に下流し脊髓の外圍及び通身に遍布す、予曾て延髓を拔き、腦項の接續を斷ずる時、脊髓より腦中へ上昇するの筋と、腦より脊髓に下降する筋、共に斷絶するを覺ふ、抑脊より上る者は知覺を具せず、腦より下る者は知覺鋭敏なり、而して其斷に少しき難易遲速あり、（腦髓筋は斷じ難けれとも、却て其功を奏すること速かなり、脊髓筋は斷じ易けれども、其效遲緩因循し易し、）是決して死體上の景狀を以て測るへきの理にあらす、是予病原惑本を明むる實驗の本據のみ、

又云、（十一の十七紙）動物の大腦を剝露して、其半規形を百方刺衝するに、毫も痛楚を覺ゑ運動を起すの徵を見ず、是に依て大腦には本知覺なく、假令其刺衝を受るも亦これに由て運動を發する者ならざるを知べし、

辯曰、此說信じ難し、何者、腦は精神知覺の本原其支末の神經に微恙あるも、痛痒を覺知す、然るに其本源知覺なしとは、無稽の甚しきなり、況や現に頭痛腦病ある者

多きをや、想ふに精神と知覺と別種の物となすより、此說をなすか、且今動物の大、腦を刺衝して痛楚を覺ゑ、運動を起さゞるは神氣覺性を失する者ならん、

又云、一十帋二〇靈魂は即精神本形あるか將形なきか、腦の一處に含るか、將其全質に含るか、未だ之を端倪すべからざる者、亦猶人の思慮辨知は知覺神經の作用に由て起る、腦質の變化に成るか、將運動神經の根に受る意識の感應に由て起るか、未だ之を究極すべからざるが如し、

辯曰、此論愼密難知を難知とし不測を不測とす、蓋し之を明了せんと欲せば、三心の本體を究了すべし、其本體明了ならざれば、萬病千障の原山決して測るべからず、佛氏之を精究實證す、豈之を謊誕無實と謂んや、

(三) 心識論略辨對破

原坦山撰論

心識論は予曾て撰述し、之を官に聞し、且東京大學及び西洋諸國へも論議し提供し置けり、然るに近日、同門西有穆山師より略辯一書を贈らる、予深く感謝じ眞理實驗の爲め默する能はざるものあり、玆に復不遜を顧みず、對破一篇を述ぶ、是敢て人我を逞ふするにあらず、歸宗の正義を欲して止まざるのみ、請ふ師恕せよ、

略辯曰、心識論に云く、經論中、心識性相、迷悟修證之說、小大悉備、非異道之可及、而末說其所部、是爲闕典耳、西洋之理學說、心識之所部甚詳矣、故今以彼補此、我此論を閱すると數、而して僅に考るとあり、それ佛が心識の所部を別に說ざる所以は、眼耳鼻舌身意と六の部類を分つ、識は形なきが故に、六根に彌綸して定れる所なし、

對破曰、識に形なしといふは大に誤れり、自ら見ると能はざるを以て直ちに形無と云はゞ、恰かも盲者の日月を見ざるを以て、日月なしと云が如し、彼西人、四十對の心識源支を說くと詳明にして、白日に色相を辨別するが如し、若し詳密を知らんと欲さば就て考ふべし、

略辯曰、然れども、六根の中意に屬すると厚きが如し、意も亦形なきかゆへに、

對破曰、經に意根と說く、豈所依なからんや、空の空に依るの理なし。後に攝論の中より其典故を引く、合せ考ふべし、

略辯曰、意識心は同體異用麁細によつて名を分つのみ、心識は眼にありては眼識といひ、耳にありては耳識といふ、耳識といふ眼等の五根は形あり、意根は形なし、唯是有形と無形なり、約して云ときは身心の二つにして身は形あり而して心は形なし形なきものは形あるものに依て用を顯はす、然れども六根の功能によりて心識の用に全缺あり、たとへば耳根は利にして舌根は鈍なり、故に耳根の識は全にして舌根の識は缺あり、所謂る、功德に千二百と八百との差異ありて、然るに頭には六根悉く具す、ゆへに意識の用は頭に依て顯はるゝと多し、然れば心識頭腦にあると思ふも亦宜なり、洋夷理を說くと狡黠にし一時人を惑かし、故に眩惑するもの多し、浮圖者何ぞ是を辯駁せずして、却て是に佞するや、

對破曰、取るべきは取り、破すべきは破す、誰か猥りに西學に佞すゝとをせんや、辯者何ぞ予の論を看るの粗なるや、

略辯曰、唯其根の利鈍によりて屬する所の識に全缺深淺あるによりて、種々の邪見を生じ、支那以來の邪見は胸腹丹田等について心識の居處を論じ、西洋の邪見は頭腦について論じ、各々一意あり、然れども皆是れ佛の正見にあらず、唯其邪見深く理尤も巧なるがゆへに世に誇る、豈誰か是を信ぜんや、

對破曰、世既に皆彼等の說の實驗明確たるに信服し、殆んど今や洋の西東を論ぜす、學者の定說とす、何ぞ耳目の狹少なるや、

略辯曰、眞も體なく妄も亦體なし、迷ふときは妄となり、悟るときは眞となる、眞妄は唯是迷悟によるのみ、

對破曰、眞妄にして已に體なくば、佛氏の修證は猶ほ渴鹿の陽餡を逐ひ猿猴の水月を捉んとするが如きか、楞嚴經云、佛告阿難、諸修行不能得成無上菩提、乃至別成聲聞緣覺及成外道諸天魔王及魔眷屬、皆由不知二種根本錯亂修習、如今時學者、猶如煮沙欲成嘉饌、縱經塵劫終不能得、云何二種、阿難一者無始生死根本、則汝今者與諸衆生用攀緣心、爲自性者、(予論に所謂る和合心と稱するも是なり)、二者無始菩提涅槃元淸淨體、(序論所謂る覺心といふもの是なり)と、今眞妄皆體なしとは何等の陋見ぞや、宜

なる哉、暗禪盲悟の誇あること、

畧辯曰、譬へば水波の體に別なきが如し、全水是波、全波是水、全眞爲妄、全妄爲眞、

對破曰、古往今來かゝる見解をなす尤も多し、然れども若し此の如くならば、無明熏起の識は、究竟地の菩薩にも盡く知る能はずと言べからず、

畧辯曰、然るに覺と不覺とにおいて、前腦後腦を分つ覺は全躰に遍布し、不覺は身體を製造すと、斯く其用も亦各別にして全く二物あるに似たり、豈錯りにあらずや、

對破曰、然り確乎として二物たり、請ふ穩々に研究實證し來れ、起信論に所謂る生滅不生滅和合の妙義も此にあり、唯是先人未發の實驗說なるが故に、凡庸は信じがたきのみ、

畧辯曰、予や愚にして修行も亦疎なり(破曰、眞に所說の如し)然れども日夜心に存して此事を忘れず、或は時としては眠られず、所謂る煩悶といふものか、

對破曰、是即煩惱の本原たり、然れども今幸にして疑團此に至る、是他日必ずや眞心顯現實驗實證の時あるべし、

畧辯曰、逆氣すると甚しき事あり、故に跏趺時を移す、其時脊骨に於て恰も小蟲の匍匐するが如くに感じ、而して逆氣漸く下る、(破曰、是即妄識の運轉なり、豈體なしと云べけんや、實に心識腦にありて外に流注するかと思はる、而して次第に調適してその氣の收る處を知らず、唯其本位に復するのみ、是所謂絕緣無端、非思量の三昧、

對破曰、何ぞ所說の誤れるや、是即ち妄識の因倦なり、豈非思量の三昧)と云はんや、

畧辯曰、大耳三藏の他心通、何ぞ國師の心を知るとを得んや、其時始て心識論の非なるとを知る、

對破曰、三藏の國師を知らざるは固より然り、辨者も亦論者の眞意の在る所を知らざると又更に遠して遠し、予か老婆新說を爛讀究明せば或は節を擊つ時あらん、其時に到て始めて所謂る新說は親切の密語たるとを悟得すべし、

畧辯曰、其脊骨より下る者は氣なり、

對破曰、否々是即妄識なり、氣にあらず、能々研究あるべし、

畧辯曰、其氣を知るものは意にして、而して意は我身に遍滿せり、

對破曰、攝論曰、五臟中、心臟其中有孔、意識在此孔中と、今や辯者は意は身に遍滿すと云ふは、是れ何の經論に依るや、身に遍きものは觸識と名くるものにして意とは月體なり、深く究明して名實混同すべからざれ、

畧辯曰、故に脊に凝るときは脊に感知し、頭に凝るときは頭に感知し、胸腹に凝るときは胸腹に感知す、氣に凝散あれば意も亦凝散して悉く覺知あり、凝りず散ぜず、意氣能く調ふときは覺知すると能はず、

對破曰、形體なき者に凝散あるの理なし、若し凝散するものあらん乎、是疑もなく形體あるものなり、是に是て乎當さに知るべし、凝散するものは妄識にして形體あるとを、之を知るものもまた然り、

畧辯曰、胸に凝るものは胸を以て心識の居處と爲し、頭腦に凝るものは頭腦を以て心識の居處となす、又或は氣海丹田を以て心識の本と思ふものあり、體なきものゝ所部を論じて、妄に閑工夫を費す、皆是邪見にして斷惑證智の修行に益なし、

對破曰、噫迂なるかな陋なるかな、自己に於て實體本末を知らずして、却て他を以て邪見なり外道なりとす、之を井蛙海を知らざるに喩ふ、且夫れ手足に凝る者は手足を居處とせんか一嘆を發すべし、

畧辯曰、たとへ心識の所部を說と分明なれども、惑を斷ぜざれば唯是西洋の理學者ならんか、

對破曰、前に妄も體なしと云、今又斷と說く何ぞ前後相違するや、且つ西洋人斷惑を知ざるとは我論中具さに明すが如し、然れども、悲哉哀哉暗禪の徒、空腹高心にして、彼理學者にも及ばざる者多し、噫夫、

畧辯曰、龍樹馬鳴の說かざるも亦宜なり、

對破曰、二師の說ざるは法を知るものは惱るればなり、又闕如の意なり、今人の胡說亂道に同からず、

畧辯曰、心識の所部を知らざるも、內觀の功成つて而して、明かに惑を斷じ眞を證するものは眞に法中の英傑と謂つべし、

對破曰、楞嚴經云、賊を討ぜんと欲せば先づ賊の所在を探知して之を詳にせざるべからず、然るに今其所在を知らずして內觀すと、是何をか觀ずるや、無形の心を以て無體の惑を斷ぜんとする乎宜哉、勞して功なき、且斯の如きものは英傑とは云が

たし、却て是畢竟證謂證の增上慢と謂つべし、

畧辯曰、形なきものゝ所在を論議すると、畢竟浮雲の居處を論議するが如し、豈怨空ならずや、

對破曰、辯者知らずや浮雲にし亦居處あるとを、見よ或は大野に凝り、或は嶺頭に浮遊するを、

畧辯曰、心識もと所住なきとは、七處徵心は無着に盡て尙着あるとを恐る、八還辨見は見を立せず、是明證にあらずや、

對破曰、七徵八辨等は阿難をして反照せしむるの方便のみ。修證の要處は耳根圓通にあり、予別に詳說あり、我情を捨てて宜しく研究あるべし、

畧辯曰、西洋敎を張るものこれのみにあらず、都て儒佛の二敎に反して奇を衒ひ異を估る、然るに亦佛頂を以て佛に頭腦の密說ありとするものは甚だ誣ふるにあうずや、

對破曰、頂は頭頂最上の義なり、唯佛頂の最上なるのみにあらず、一切の動物類にして頭足あるものは皆頭頂を以て尊とするものは、頭頂は靈覺の原府なるを以て也、

(四) 心性實驗錄批判最後屁

心性實驗錄批判再辯

凡例

一本錄は元佛法實驗錄と號す、明治四年の稿に係る、當時行誠上人と坦山老師の贈酬に係る二稿具(ツブサ)に師の筐底に埋沒する十數年、頃來行誠上人の示寂に遇ひ又同志雜誌の設けあるに際し、右本稿を老師に請ひ、佛仙雜誌第二號として同好に流布す

一本錄の發兌は明治六年に在り、故ありて心性實驗錄と改稱す今(　)を加へ(錄)となす其題辭を(題)となし三心圖解を(圖)となす行誠上人の批判を(批)となし再辯を(辯)となす見易からんを欲するなり、今回發兌に付き近來余徒の親見聞に屬する者を加へて(補)となす、以て兩師の學志を億兆に及ぼさんを欲するのみ

明治二十一年十一月

編者識